

松江市文化財調査報告書 第176集

宍道複合施設進入路整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

## 森屋敷遺跡

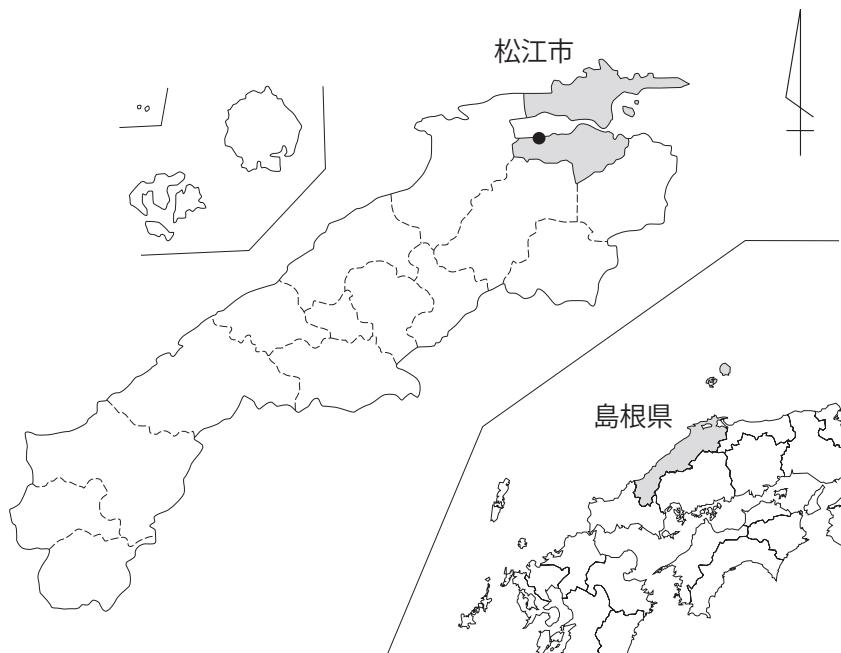
平成28(2016)年7月

島根県松江市教育委員会  
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団



宍道複合施設進入路整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

## 森屋敷遺跡



平成 28(2016) 年 7 月

島根県松江市教育委員会  
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団



# 例　　言

- 本書は、平成 27 年度に本調査を実施した宍道複合施設進入路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 本報告書の作成は、平成 28 年度に松江市都市整備部土木課から松江市教育委員会が依頼を受け、公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団が実施した。
- 遺跡の名称・所在地、調査面積は以下のとおりである。

名 称 森屋敷遺跡  
所在地 島根県松江市宍道町宍道 885-3 ほか  
調査面積 302.4m<sup>2</sup>

- 現地調査の期間及び報告書作成期間

平成 27 年 10 月 21 日～平成 27 年 11 月 24 日 ( 発掘調査業務 )

平成 28 年 4 月 28 日～平成 28 年 7 月 31 日 ( 報告書作成業務 )

- 各年度の調査組織

依頼者 松江市都市整備部土木課

主体者 松江市教育委員会 教育長 清水 伸夫

[平成 27 年度] 発掘調査業務

事務局 松江市歴史まちづくり部 部長 安田 憲司

　　〃 まちづくり文化財課 課長 永島 真吾

　　〃 〃 専門幹 ( 埋蔵文化財調査室長兼務 ) 飯塚 康行

　　〃 〃 埋蔵文化財調査室 調査係 係長 赤澤 秀則

　　〃 〃 〃 〃 主任 徳永 隆

嘱託 門脇 誠也

調査指導 島根県教育庁 文化財課 主幹 深田 浩

実施者 公益財団法人松江市スポーツ振興財団 理事長 清水 伸夫

埋蔵文化財課 部長 曽田 健

　　〃 調査係 係長 川西 学

　　〃 〃 調査員 徳永 桃代 ( 担当者 )

　　〃 〃 調査補助員 原 英誉

[平成 28 年度] 報告書作成業務

事務局 松江市歴史まちづくり部 部長 藤原 亮彦

　　〃 次長 ( まちづくり文化財課課長兼務 ) 永島 真吾

　　〃 まちづくり文化財課 専門幹 ( 埋蔵文化財調査室長兼務 ) 飯塚 康行

　　〃 〃 埋蔵文化財調査室 調査係 係長 赤澤 秀則

　　〃 〃 〃 〃 主任 徳永 隆

　　〃 〃 〃 〃 嘱託 門脇 誠也

実施者 公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 理事長 清水伸夫  
埋蔵文化財課課長 曽田健  
〃調査係係長 川西学  
〃〃調査員 徳永桃代(担当者)  
〃〃調査補助員 原英誉

6. 本書に記載した遺物の復元・実測・浄書、遺構図版の作成は以下の者が行った。  
木村由希江
7. 調査及び報告書の作成にあたっては、以下の方々から多大なご指導、ご教示、ご協力をいただいた。  
記して感謝の意を表したい。  
島根大学法文学部 准教授 平郡達哉(朝鮮系土器)  
島根県埋蔵文化財調査センター 調査第二課長 守岡正司(中世陶磁器)  
島根県埋蔵文化財調査センター 調査第二係長 中川寧(弥生土器)
8. 本書の執筆は第1章を徳永隆(松江市埋蔵文化財調査室)が、第2章第1節と第4章第1節を渡辺正巳(文化財調査コンサルタント株式会社)が、そのほかを徳永桃代が執筆した。また編集は松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て徳永桃代が行った。
9. 本書における土器区分、分類、編年は以下を参照した。  
[弥生土器]  
松本岩雄 1992「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』 木耳社  
鹿島町教育委員会 1992『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡』  
[土師器]  
松山智弘 1991「出雲における古墳時代前半期の土器の様相 - 大東式の再検討 -」『島根考古学会誌 第8集』島根考古学会  
[須恵器]  
大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌 第11集』島根考古学会  
[奈良・平安時代以降の須恵器、土師器、土師質土器]  
島根県教育委員会 2013「史跡出雲国府跡9 総括編」  
[陶器・磁器・中世土師器]  
大宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV - 陶磁器分類編 -』  
八峰 興 1998「山陰における中世土器の変遷について」『中近世土器の基礎研究XIII』  
九州近世陶磁器学会 2000『九州陶磁の編年 九州近世陶磁器学会10周年記念』
10. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。  
また、レベルは海拔標高を示す。
11. 本書における遺構記号は以下のとおりである。  
SK: 土坑 P: 柱穴 SD: 溝
12. 出土遺物、実測図及び写真等の資料は松江市教育委員会で保管している。

## 本文目次

### 例言

第1章 調査に至る経緯 ..... 1

### 第2章 位置と歴史的景観

　　第1節 遺跡の立地 ..... 2

　　第2節 歴史的景観 ..... 3

### 第3章 調査の成果

　　第1節 調査の概要と基本層序 ..... 6

　　第2節 自然面 ..... 10

　　第3節 第1面 ..... 19

### 第4章 総括

　　第1節 遺物の出土地点と砂州の発達過程 ..... 28

　　第2節 森屋敷遺跡出土の塩町式系土器と朝鮮半島系土器 ..... 28

　　第3節 まとめ ..... 30

遺物観察表

写真図版

報告書抄録

## 挿図目次

第 1 図	砂州の発達とラグーンの分布	2	第 19 図	1 区 1 面 遺構配置図	19
第 2 図	調査区断面図と粒度分析結果	2	第 20 図	1 区 1 面 7・8SP 遺構平面・断面図	20
第 3 図	砂州の発達と粒度の変化	3	第 21 図	1 区 1 面 7・8SP 遺構出土遺物	20
第 4 図	森屋敷遺跡の位置と周辺の遺跡	5	第 22 図	1 区 1 面 3・4SP 遺構平面・断面図	21
第 5 図	調査範囲と開発範囲図	6	第 23 図	1 区 1 面 3・4SP 遺構出土遺物	21
第 6 図	試掘調査 出土遺物実測図	7	第 24 図	1 区 1 面 1・2SP 遺構平面・断面図	22
第 7 図	調査 2 区 平面・断面図	8	第 25 図	1 区 1 面 1・2SP 遺構出土遺物	22
第 8 図	調査 1 区 平面・断面図	8	第 26 図	2 区 1 面より上層出土遺物	25
第 9 図	2 区遺物包含層出土遺物	11	第 27 図	2 区 1 面より上層出土遺物	26
第 10 図	2 区遺物包含層出土遺物	12	第 28 図	2 区 1 面より上層出土 金属製品	26
第 11 図	2 区遺物包含層出土遺物	13	第 29 図	2 区 1 面より上層出土 石製品	26
第 12 図	2 区遺物包含層出土 朝鮮半島系土器	14	第 30 図	1 区 1 面より上層出土遺物	27
第 13 図	2 区遺物包含層出土 金属製品	14	第 31 図	1 区 1 面より上層出土 古銭	27
第 14 図	1 区遺物包含層出土遺物	15	第 32 図	調査スパン毎の遺物の出土状況	28
第 15 図	1 区遺物包含層出土遺物	16	第 33 図	森屋敷遺跡出土の塩町式系土器と朝鮮半島系土器	29
第 16 図	1 区遺物包含層出土遺物	17	第 34 図	塩町式系土器と朝鮮半島系土器出土遺跡の分布図	30
第 17 図	1 区遺物包含層出土 朝鮮半島系土器	18	第 35 図	そのほかの遺跡出土の塩町式系土器と朝鮮半島系土器	31
第 18 図	1 区遺物包含層出土 金属製品	18			

## 挿表目次

表 1.	1 区 1 面 7・8SP 遺構法量表	23
表 2.	1 区 1 面 1 ~ 4SP 遺構法量表	23
表 3.	遺物観察表	33

## 写真図版目次

本文中写真		
写真 1.	調査地周辺の様子	1

図版 1.	調査開始前状況 (1 区東端から) 調査終了状況 (2 区西端から)	図版 7.	2 区遺物包含層出土遺物 (3) 2 区遺物包含層出土遺物 (4)
図版 2.	2 区 4SP 土層堆積状況 (北壁) 2 区 7SP 土層堆積状況 (北壁) 1 区 8SP 土層堆積状況 (北壁)	図版 8.	1 区遺物包含層出土遺物 (1)
図版 3.	2 区 1SP 検出状況 (南西から) 1 区 5SP 検出状況 (南東から)	図版 9.	1 区遺物包含層出土遺物 (2) 遺物包含層出土 朝鮮半島系土器 遺物包含層出土 金属製品
図版 4.	1 区 1 面 SK05 完掘状況 (北から) 1 区 1 面 P9 検出状況 (南から) 1 区 1 面 集石検出状況 (北西から)	図版 10.	1 区 1 面 7・8SP 遺構出土遺物 1 区 1 面 1・2SP 遺構出土遺物 2 区 1 面より上層 出土遺物 (1)
図版 5.	1 区 7SP1 面 完掘状況 (南から) 1 区 3SP1 面 完掘状況 (東から)	図版 11.	2 区 1 面より上層 出土遺物 (2) 1 区 1 面より上層 出土遺物 2 区 1 面より上層出土 石製品 1 面より上層出土 金属製品
図版 6.	試掘調査出土遺物 2 区遺物包含層出土遺物 (1) 2 区遺物包含層出土遺物 (2)		

# 第1章 調査に至る経緯

松江市宍道町宍道地内において、老朽化により施設の刷新が必要とされた松江市宍道支所及び宍道公民館を併設する新たな「宍道複合施設」の建設が、平成28年3月の竣工を目指して計画された。これに先立ち、この施設への北側からの進入路や災害時の避難路等を確保するため、地元要望もあったことから、松江市により施設に接続する市道の新設工事が併せて計画された。

この市道新設計画範囲において、平成27年6月に埋蔵文化財の有無照会が松江市教育委員会へなされた。これを受けた松江市まちづくり文化財課において、当該事業範囲における遺跡の有無を判断するため、同月に試掘調査を実施したところ、事業予定範囲に設定した試掘調査トレンチの各所において古代～中世の遺物が多数検出され、当該地の全域には遺跡が存在することが確認された。このため、平成27年7月に隣接する「森屋敷遺跡」の範囲の広がりが確認されたものとして、当該地も周知されることとなった。

この結果を受け、事業者と協議を行ったが、事業計画の変更は困難であるとの判断に至り、平成27年8月に松江市から発掘通知が提出され、この内容について、県教育委員会と協議した結果、事業範囲について発掘調査の勧告を受けたことから、同年10月から当該遺跡の本発掘調査を実施するに至ったものである。



写真1. 調査地周辺の様子（手前が宍道駅、左奥は宍道湖）南から

## 第2章 位置と歴史的景観

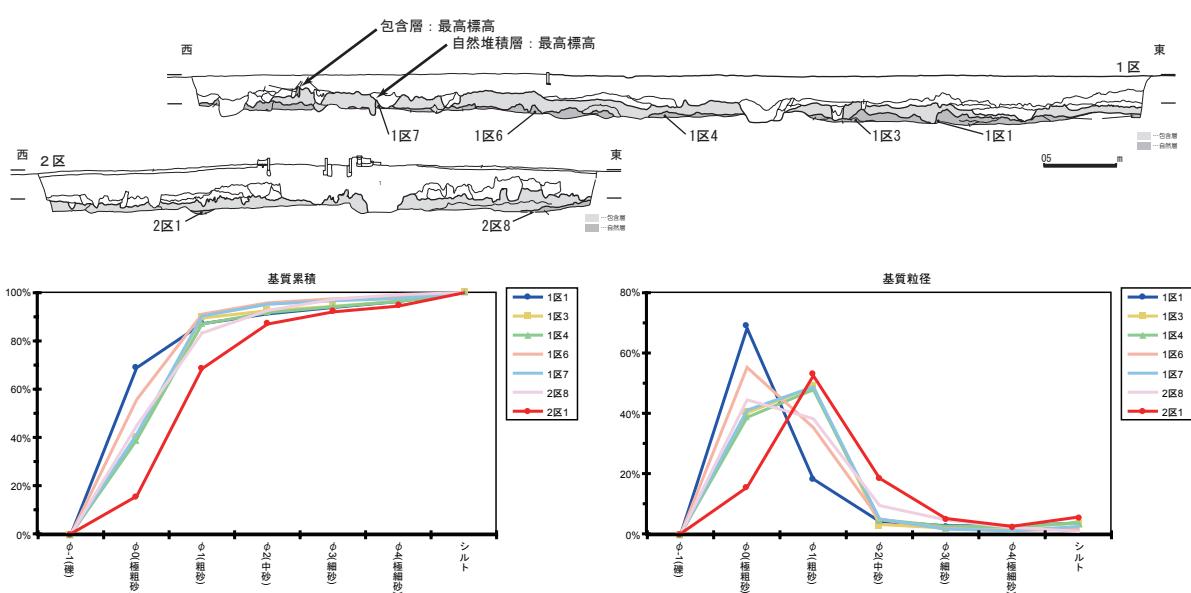
### 第1節 遺跡の立地

森屋敷遺跡は、宍道町宍道 885-3 ほかに所在する。

本遺跡は、地形分類図（第4図）によれば、佐々布川と小川の成す、南西から北東に延びる砂州上に立地する。今回の調査では、遺物包含層から弥生時代中期以降の遺物が検出されていることから、湾口砂州（あるいは海底砂州）上面が「弥生の小海退」期に完全に陸化し、土壤化を受けることによって、クロスナ（ここでは遺物包含層）が発達したものと考えられる。また、佐々布川と小川の流域に広がる谷底平野は、この砂州によって宍道湖から隔離されたラグーンが埋まってできたものである（第1図）。さらに、調査区断面（第2図）で明らかなように、現地表面、包含層上面、及び自然堆積層上面の標高が1区西部で高く、1区東方向、2区西方向に向かい低くなる。したがって、丘陵地に近い遺跡の東側には、ある時期までラグーンの端部が存在していたことが予想される。また、砂州の西側に「昭和」の地名があるように、昭和期の干拓（埋め立て）地が広がっており、干拓（埋め立て）以前には、砂州（あるいは遺跡）の西端がそのまま宍道湖に接していたことが示唆される。

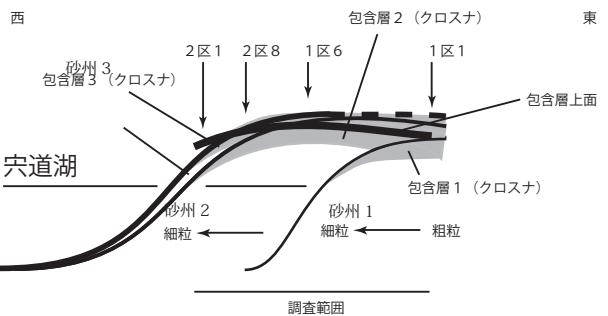


第1図 砂州の発達とラグーンの分布



第2図 調査区断面図と粒度分析結果

山田・高安（2006）によれば、宍道湖は斐伊川西のファンデルタの発達によって約6,000年前に形成された。斐伊川本流は、東流するまで「神門水界」を経て大社湾に流れている。一方、東流以前でも斐伊川分流の幾つかは東流しており、これらの成す三角州によって斐伊川平野は東に拡大を続けていたとも考えられる。したがって、宍道湖が形成されて以降、宍道湖内での潮流は、東への流れが卓越していたものと考えられる。これらの事柄から、本遺跡の立地する砂州は、西から東へと拡大していったものと考えられる（第2図）。



第3図 砂州の発達と粒度の変化

砂丘1が形成し、上部に古土壤（包含層1：クロスナ）が発達→砂丘1を覆い砂丘2が形成し、上部に古土壤（包含層2：クロスナ）が発達→砂丘2を覆い、砂丘3が形成し、古土壤（包含層2：クロスナ）が発達→浸食（あるいは整地ほか）され

包含層上面が形成（各古土壤発達時に、上面が浸食ほかを受けた可能性も大きい）。

基質（砂粒部）の粒度分析結果では、何れの地点も、砂丘（あるいは河口部）で特徴的に認められる粒度特性である、1つの鋭角なピークを持つ（第3図）。これらのピークの位置を概観すると、調査区域の東部が粗粒で、西部ほど細粒を示す傾向にある。更にピークの推移を詳細に見ると、粗粒～細粒の推移が少なくとも3度（1区1～、1区6～と2区8～）認められる。一般に砂州の中心部は粗粒で、縁辺部が細粒を示すことから、調査範囲内では砂州に少なくとも3回の発達時期があり、砂州が西側に発達していったことが示唆される（第3図）。

## 第2節 歴史的景観（第4図）

縄文時代における森屋敷遺跡は、このころの海進によって広がった古宍道湖の湖岸付近、あるいは湖底であったと考えられる。<sup>1)</sup>周辺に縄文時代の遺跡は少なく、森屋敷遺跡の南東側の丘陵地Ⅱにおいて標高約90mのところに位置する野津原Ⅱ遺跡(59)で縄文草創期の有舌尖頭器が出土しているほか、落とし穴が見つかっている程度である。

弥生時代では、前期の遺跡は確認されておらず、もっとも古いもので丘陵地Ⅰに位置する上野Ⅱ遺跡(93)があり、後期の土器とともに松本Ⅱ-1様式にあたる中期前葉の土器が加工段（標高約56m）から1点出土している。また、丘陵地Ⅱの縁辺部に位置する白石大谷Ⅰ遺跡(17)では、段状遺構（標高約10～15m付近）などから中期後葉から後期の土器が出土している。平成26年度に宍道複合施設の建設に伴い調査をした森屋敷遺跡<sup>2)</sup>(2)でも、松本Ⅲ～Ⅳ期にあたる中期後半の土器が数点出土（標高2m付近）しているが、現在までに確認されている中期にかけての遺跡はわずかである。後期になると、丘陵地Ⅱにあたる野津原Ⅱ遺跡(59)、山守免遺跡(60)、上野遺跡・上野Ⅰ遺跡(87)、上野Ⅱ遺跡(93)などで、竪穴建物跡などが確認され、集落の明らかな存在が判明している。以上のように、後期を中心に標高の高い位置に集落跡が多く確認されている。

古墳時代の遺跡は、丘陵地Ⅱを中心に古墳、集落跡が確認されている。森屋敷遺跡周辺の古墳では、宍道要害山古墳(47)、隨音寺横穴墓群(42)、横町横穴墓群(44)などが存在する。集落跡は、堤平遺跡(63)、上野Ⅱ遺跡(93)、矢頭遺跡(69)、山守免遺跡(60)で見つかっている。また、能登堀遺

跡(40)では、集中的に土器が廃棄された溝状遺構を検出しており、祭祀跡の可能性が指摘されている。

古代においては、『出雲国風土記』に宍道の地名伝承や祭祀遺跡の犬石・猪石(14)の記述が見られる。また、佐々布付近に意宇郡宍道駅が置かれ、古代山陰道が宍道湖岸に平行するように存在したことが推察されている。<sup>3)</sup> 萩田遺跡(106)、堤平遺跡(63)では、鉄滓と輪羽口の出土から、鉄鍛冶を行っていたことが判明し、さらに仏教関連遺物の出土も確認され、地方への仏教の浸透を示すものである。<sup>4)</sup>

中世では、白石大谷I遺跡(17)で、古道やピットなどから12世紀から14世紀にかけての貿易陶磁器や国産陶器などが出土している。また、白石大谷II遺跡(19)では、建物跡と思われる加工段から中世土師器が出土しており、貿易陶磁を伴わないことから豪族の居館ではなく、一般集落跡と考えられている。<sup>5)</sup> この二つの遺跡は、弥生時代から存在している。能登堀遺跡(40)では、石組遺構のなかから中国製青磁碗片とともに石製の硯が出土しており、何らかの有力者の施設が存在したことを示唆するものである。<sup>6)</sup>

戦国時代には、宍道湖沿岸は尼子と毛利の戦場となり、宍道氏の本拠地とされる金山要害山城後(74)を始め、多くの山城が築かれている。佐々布川のある谷底平野に沿って存在する丘陵地II、丘陵地Iに山城が築かれている。

江戸時代は、松江藩領となってからは、山陰道(116)と宍道尾道街道(117)の合流点にあたることから、雲南・山陽方面から陸路運搬されてきた物資を宍道で船に積み替え、宍道湖を通じて松江城下や各地に運ばれ水運が発達したようである。また、山陰道の街道沿いには「本陣」が設けられ、宿場町が形成された。現在も宿場町の町割りが残っており、調査範囲の西側(2区)が、この町割りに該当する。

註 1) 中村唯史 宍道町教育委員会 1995『宍道町ふるさと文庫 9 宍道湖のおいたち - 人と海の交わるところ -』

註 2) 松江市教育委員会 公益財団法人松江市スポーツ振興財団 2015『松江市文化財調査報告書第162集 宍道複合施設整備事業に伴う発掘調査報告書 森屋敷遺跡』

註 3) 池橋達雄 宍道町教育委員会 1998『宍道町西部の古代山陰道をめぐって』『宍道町歴史叢書2』

註 4) 西尾克己・稻田信・木下誠 宍道町教育委員会 1998『出土品からみた萩田遺跡の性格』『宍道町歴史叢書3』

註 5) 林健亮 日本道路公団中国支社 島根県教育委員会 2000『第4章 第4節 第2項 中世の白石大谷II遺跡について』

『勝負廻I遺跡・白石大谷II遺跡・シトギ免遺跡・野津原II遺跡・山守免遺跡・石地蔵遺跡』

註 6) 松江市教育委員会 財団法人松江市教育文化振興事業団「V. 小結」『松江市文化財調査報告書第126集 能登堀遺跡発掘調査報告書』

## 参考文献

### 1. について

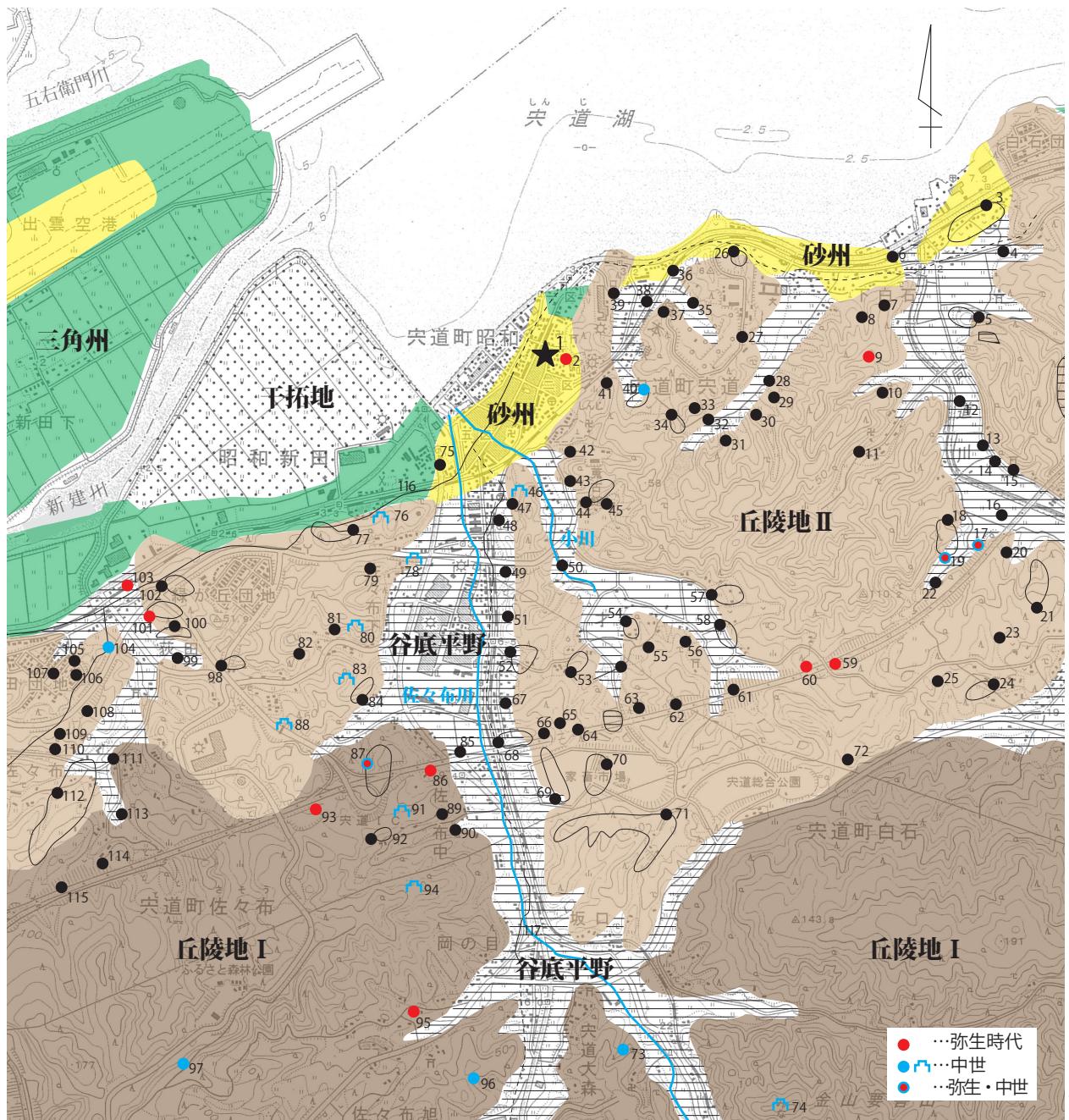
島根県 1973『恵曇・今市』『5万分の1都道府県土地分類基本調査(地形分類図)』

山田和芳・高安克己 2006『出雲平野・宍道湖地域における完新世の古環境変動:ボーリングコア解析による検討』『第四紀研究』45(5), 391-405.

中村唯史 2006『山陰中部地域における完新世の海面変化と古地理変遷』『第四紀研究』45(5), 407-420.

### 2. について

島根県教育委員会 2003『増補改訂 島根県遺跡地図I(出雲・隠岐編)』



第4図 森屋敷遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:25,000)

1 森屋敷遺跡	21 椎山古墳群	41 上野原遺跡	61 墓崎遺跡	81 中屋敷遺跡	101 屋敷古墳群
●2 森屋敷遺跡 (H26)	22 シトギ免遺跡	42 随音寺横穴墓群	62 香田遺跡	82 大畠ヶ遺跡	102 椎ノ木廻古墳群
3 下白石遺跡	23 上後ヶ市遺跡	43 八斗久保遺跡	63 堤平遺跡	●83 土居郭群跡	●103 北ヶ市遺跡
4 平井廻遺跡	24 鴨田遺跡	44 橫町横穴墓群	64 舟川原遺跡	84 西屋敷遺跡	●104 長廻古墳群
5 伊賀見古墳群	25 下倉横穴墓群	45 橫町遺跡	65 君廻遺跡	85 石地蔵遺跡	105 小界古墳群
6 後原遺跡	26 香の木遺跡	●46 宍道要害山城跡	66 女夫岩遺跡	●86 竹ノ崎遺跡	106 萩田遺跡
7 奥遺跡	27 伝塙治高貞首塚	47 宍道要害山古墳	67 OM公園横穴墓	●87 上野遺跡・上野Ⅰ遺跡	107 灘平遺跡
8 萩古墳	28 カシヤク古墳	48 檻廻遺跡	68 女夫岩西遺跡	●88 城山城跡	108 佐々布森遺跡
●9 萩遺跡	29 小昭廻遺跡	49 西代遺跡	69 矢頭遺跡	89 矢谷下遺跡	109 小佐々布古墳群
10 熊江遺跡	30 後谷横穴墓	50 六反田遺跡	70 清水谷古墳群	90 敷手遺跡	110 鹿田遺跡
11 空遺跡	31 元薬師遺跡	51 長廻古墳	71 水溜古墳群	●91 上野城跡	111 北ノ廻遺跡
12 長烟遺跡	32 山の神谷横穴墓	52 篠原遺跡	72 女ノ峠横穴墓	92 矢谷上遺跡	112 ソラ田遺跡
13 坪の内古墳	33 岩穴口横穴墓	53 才横穴墓群	●73 金山五輪塔群	●93 上野Ⅱ遺跡	113 野添遺跡
14 犬石・猪石	34 打越遺跡	54 向原遺跡	●74 金山要害山城跡	●94 佐々布要害山城跡	114 御崎谷遺跡
15 坪の内遺跡	35 深坪遺跡	55 才古墳	75 加茂分遺跡	●95 平田遺跡	115 センガ遺跡
16 眇形遺跡	36 小宮田遺跡	56 佐賀利遺跡	●76 掛屋山城跡	●96 大森経塚	116 近世山陰道
●17 白石大谷Ⅰ遺跡	37 庄遺跡	57 外垣内遺跡	77 佐々布下古墳群	●97 普門院跡	117 宍道尾道街道
18 イナエソ遺跡	38 向野原遺跡	58 原田遺跡	●78 海部城跡	79 観音寺横穴墓	98 岩穴畠遺跡
●19 白石大谷Ⅱ遺跡	39 下野原遺跡	●59 野津原Ⅱ遺跡	●80 舞屋城跡	99 鋤崎遺跡	100 鋤崎古墳群
20 椎山遺跡	●40 能登堀遺跡	●60 山守免遺跡			

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査の概要と基本層序

#### 1. 調査の概要

##### 試掘調査（第5図）

穴道複合施設への進入路となる開発範囲内で、T-1からT-5の5か所の試掘調査を行い、その結果に基づき調査範囲を確定している。この試掘調査では、古墳時代から近世の遺物が出土しているが、近世以前のものは細片が多く、図化できないものが多い。中世の須恵器（東播系）鉢片や瓷器系陶器片も比較的多く認められたが、細片のため図化していない。試掘調査の詳細をここで述べることは省略するが、ここでは図化できた年代を示す特徴的な遺物について紹介したい。

##### 試掘調査出土遺物（第6図）

6-1と6-2はT-2出土遺物である。6-1は古墳時代中期以降の土師器甕である。6-2は江戸時代後期の肥前磁器の広東碗で、九陶V期にあたる。6-3と6-4はT-3出土遺物で、6-3は古墳時代中期の土師器高环である。6-4は古墳時代後期の須恵器高环である。6-5はT-4出土遺物で、古墳時代後期から古代にかけての土師器甕である。6-6はT-5出土遺物の石鉢で凝灰岩質砂岩製である。内外面に被熱痕があり、金属の精鍊に使用された可能性も考えられる。

##### 調査の方法（第5図）



第5図 調査範囲と開発範囲図 (S=1:1,000)

試掘調査の結果から、地盤が砂地であり、本調査では当初より湧水による調査区の崩落が懸念されていたため、ある程度の範囲を調査、記録し、埋め戻してから次の範囲を調査する方法をとった。調査区を1区と2区に分け、1区の東から任意で1～8SPまでを設定し、1SPから調査を開始した。1区の調査後、2区の西端から1～8SPまで設定し、1SPから調査を開始した。2区の調査では、比較的高い位置からの湧水があり、調査地両側に民家が存在していることもあり、2区では遺構の検出を断念し、土層の確認と遺物の採取を行った。

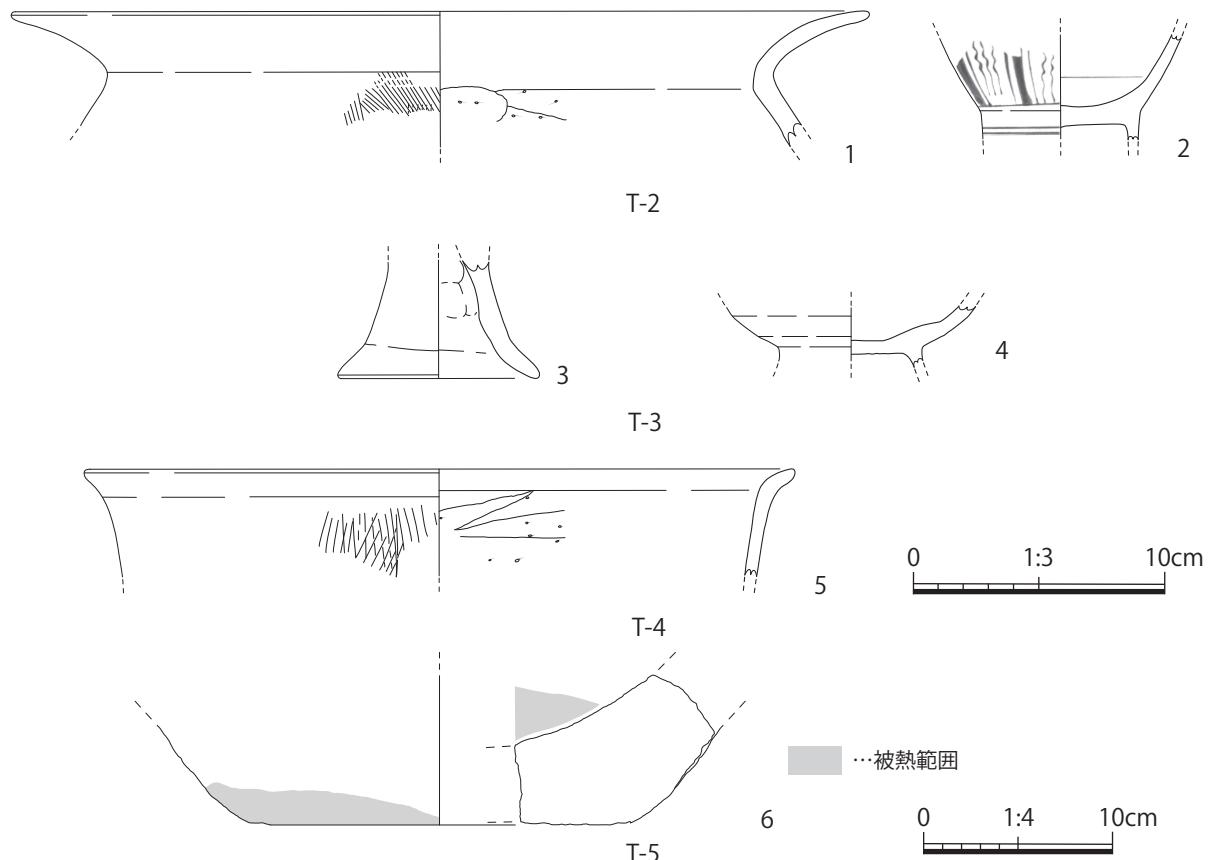
## 2. 基本層序(第7、8図)

調査区の現地表面の標高は、1区1SPが約3.5m、西に向かってやや高くなり、2区5SPが約3.7mである。調査区西端にあたる2区1SPではまた約3.5mと低くなっている。

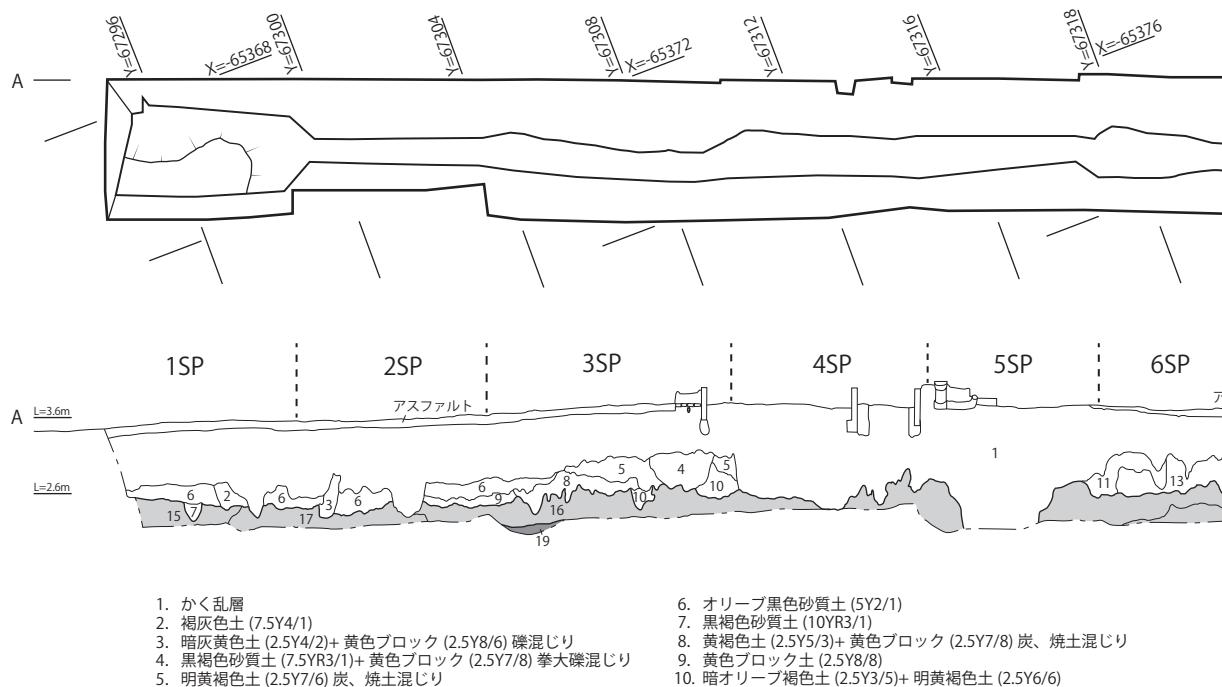
現地表面から約1mほど下までは、近現代のかく乱層があり、それを取り除くと古墳時代から近世にかけての遺物を含む土層の堆積を確認している。この土層の上面では、遺構の検出はできていない。

この土層の下で、弥生時代中期から中世にかけての遺物包含層が認められ、この包含層上面で遺構を検出している。これを第1面と称して調査を行った。1区では遺構をいくつか確認できたが、2区の1SPで第1面の落ち込みを検出したものの、湧水のため、それ以上の確認はできていない。

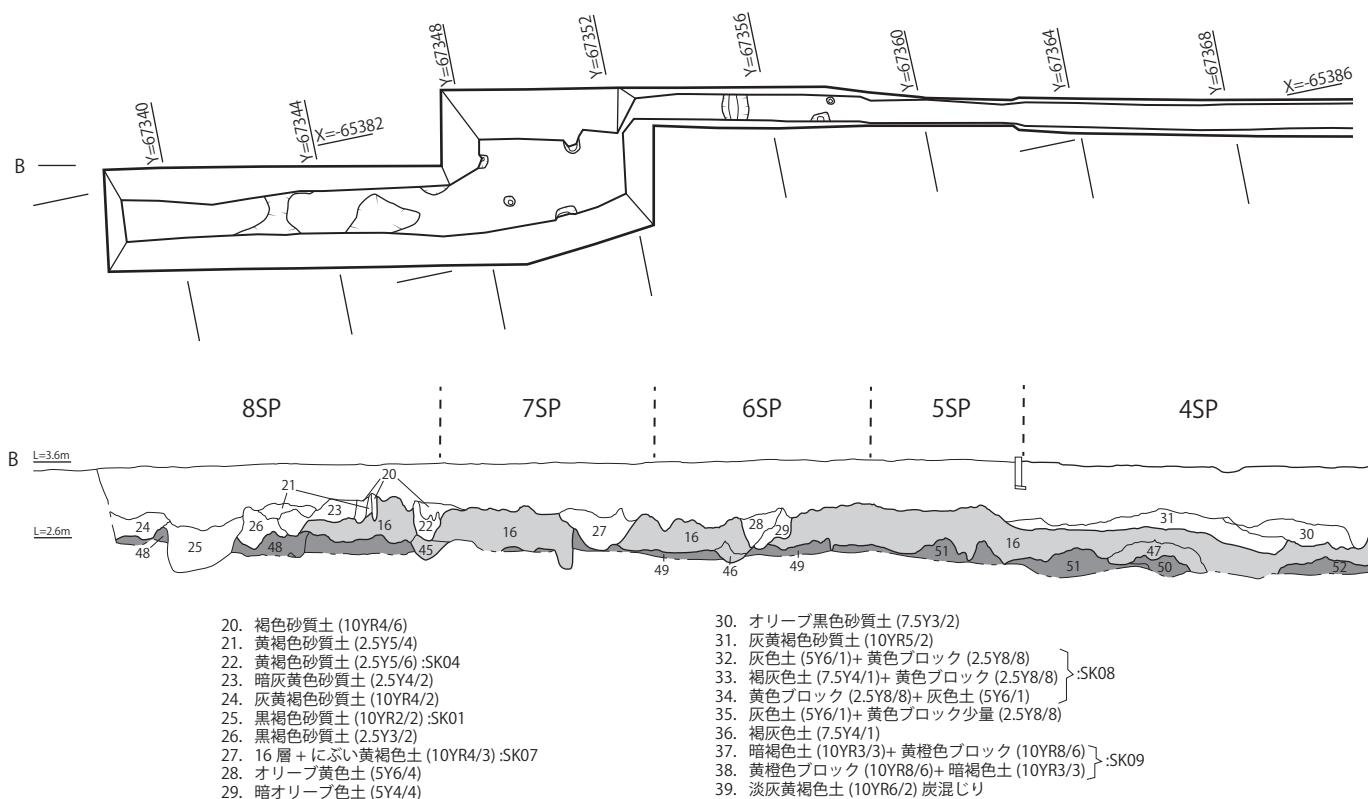
第1面を形成する遺物包含層の下層は、遺物を含まない黄褐色砂層あるいは灰白砂層となっており、佐々布川、小川に由来する自然堆積層と考えられる。以下、この自然堆積層の上面を自然面として、最下層である自然面から説明をしていく。



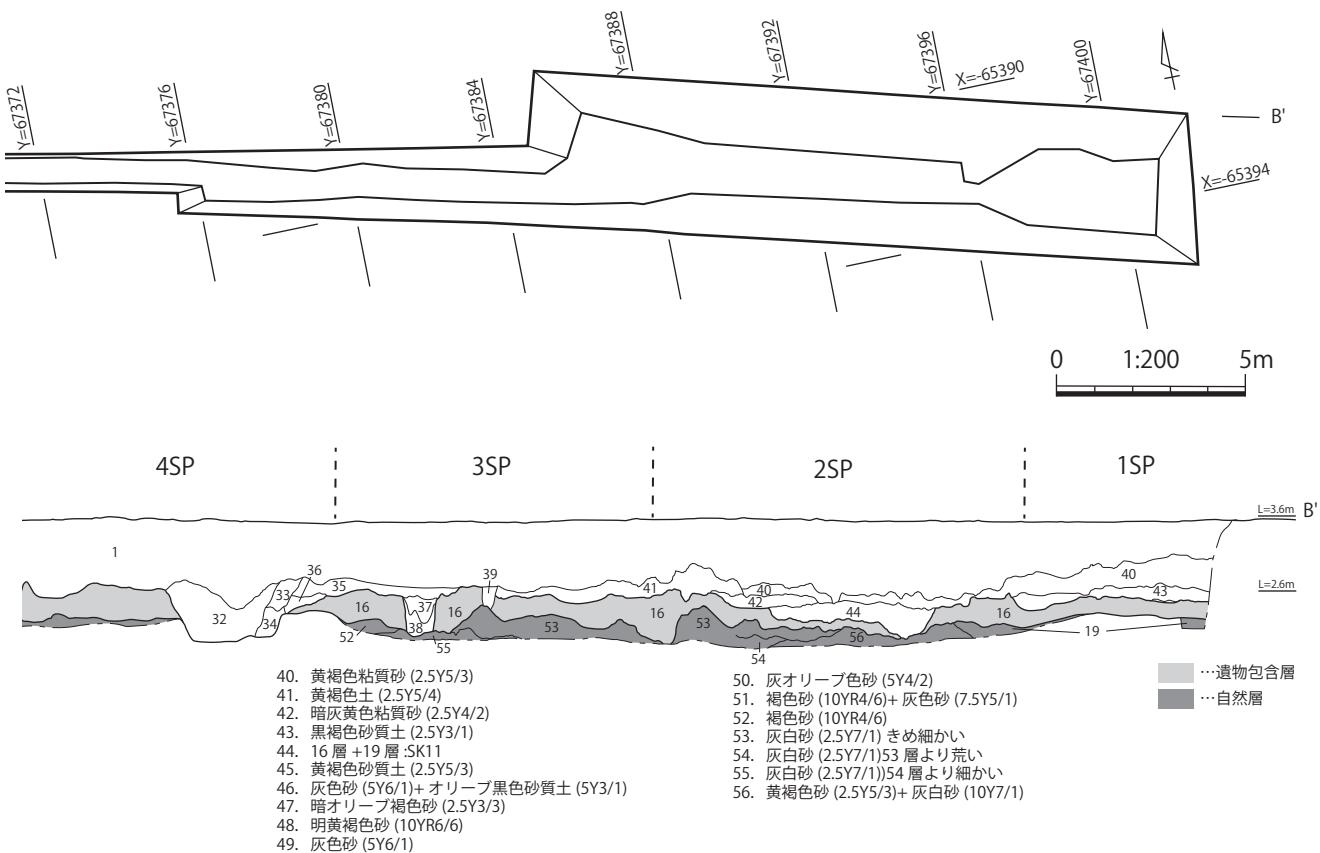
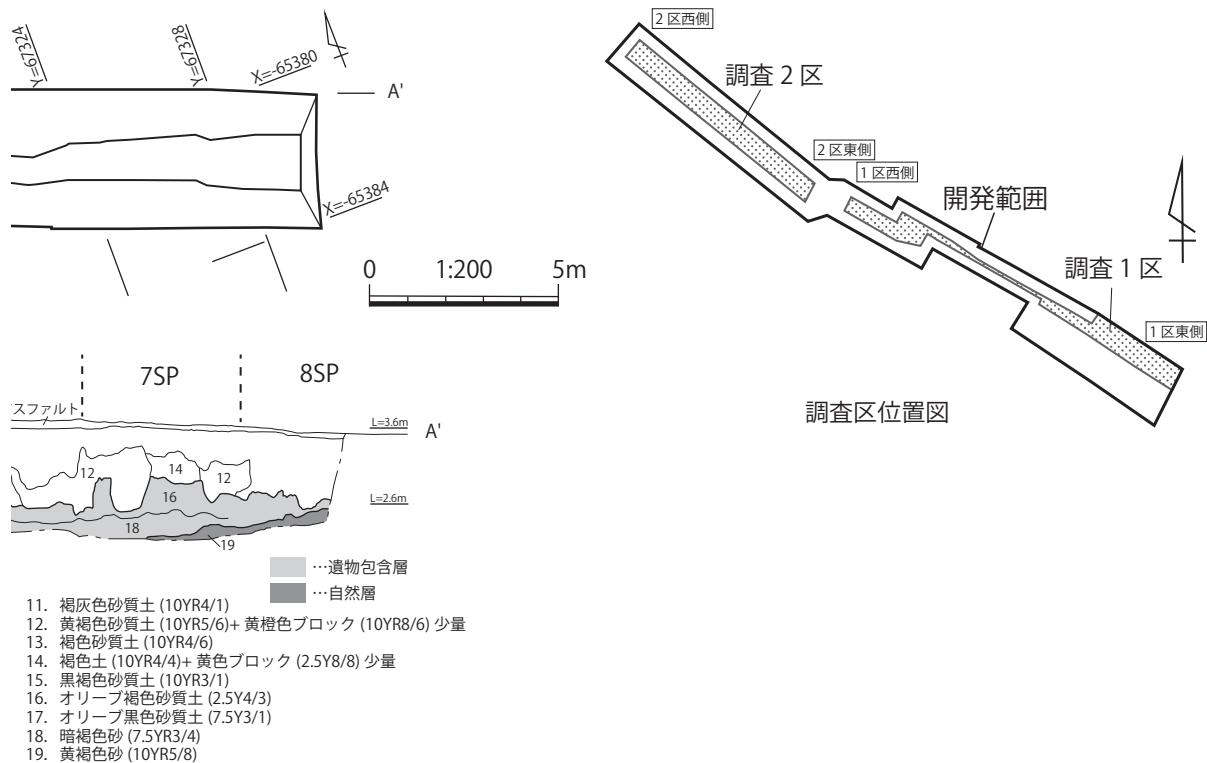
第6図 試掘調査出土遺物実測図



第7図 調査2区 平面・断面図 (\*断面図は縦S=1/100、横S=1/200)



第8図 調査1区 平面・断面図 (\*断面図は縦S=1/100、横S=1/200)



## 第2節 自然面(第7、8図)

調査範囲の西側にあたる2区では、湧水のため、部分的にしか自然堆積層を確認することができない。最も西側にあたる2SPで標高約2.1m、東端にあたる8SPで標高約2.1～2.5mと東に向かって標高が高くなっている。2区では自然面上面での遺構の検出はできていない。調査範囲の東側にあたる1区では、全体的に自然堆積層を確認できている。最東端である1SPで標高約2.3m、最も標高が高くなるのは1区西側にあたる7SPで標高約2.7mである。さらに西側の8SPでは標高約2.6mを測る。1区の自然面では、いくつかの土坑、ピットなどを検出しているが、遺物を含むものではなく、土層の堆積状況から、上層からの遺構の掘り残しである可能性が高い。

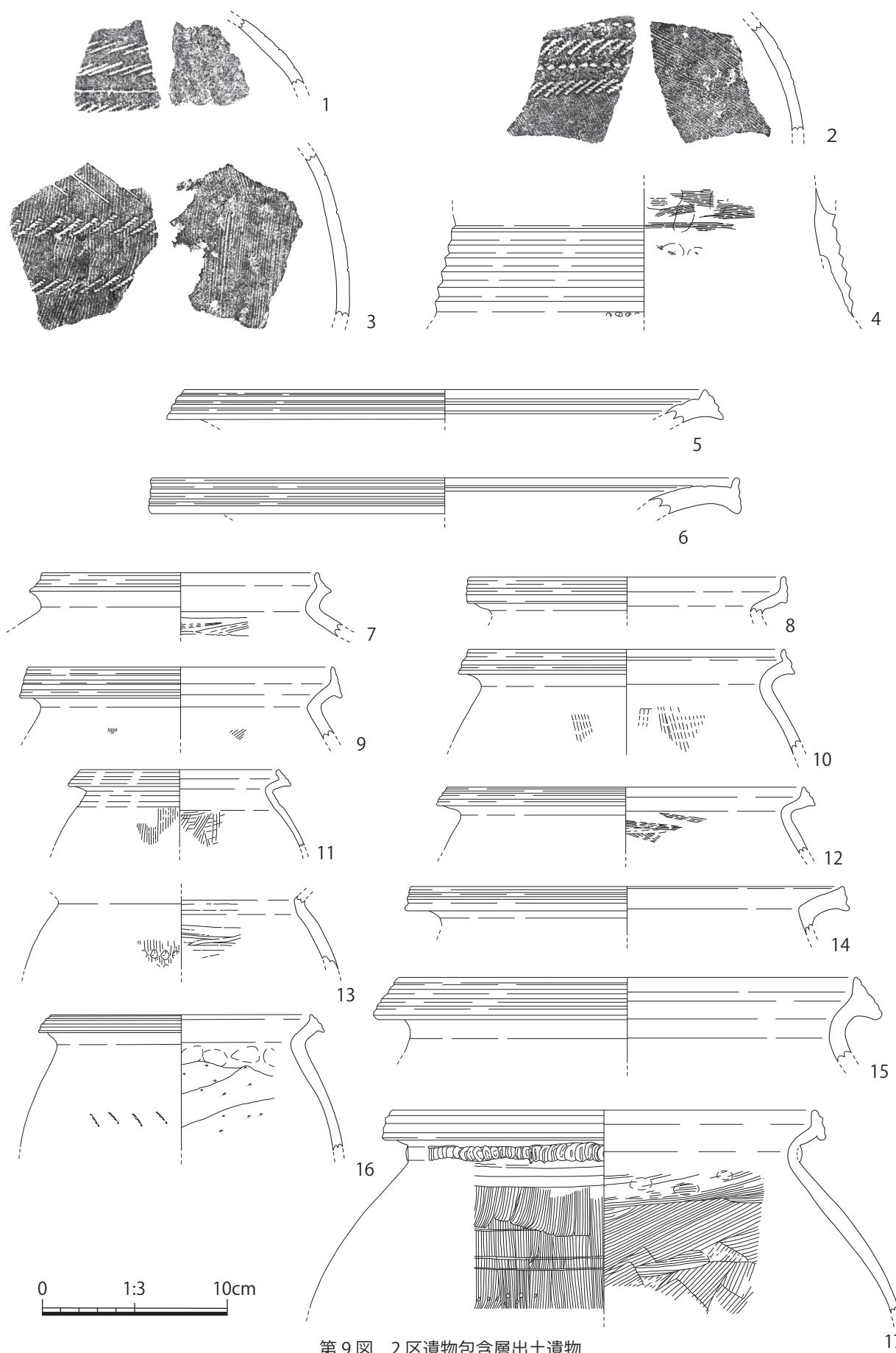
調査1区、2区を通してみると、1区7SPを中心に東西に自然面の標高が下がっており、前章第1節のとおり、1区7SPから東側がラグーンの縁辺、西側が宍道湖の縁辺を示すものと考えられる。

自然面上層に弥生時代中期から中世にかけての遺物包含層が堆積しており、土壤分析の結果、この堆積層が自然面上に堆積した古土壤と判明している。中世の遺物が、遺物包含層の比較的下層からも出土するため、この古土壤が自然にこの場所で堆積したものとは断言はできない。

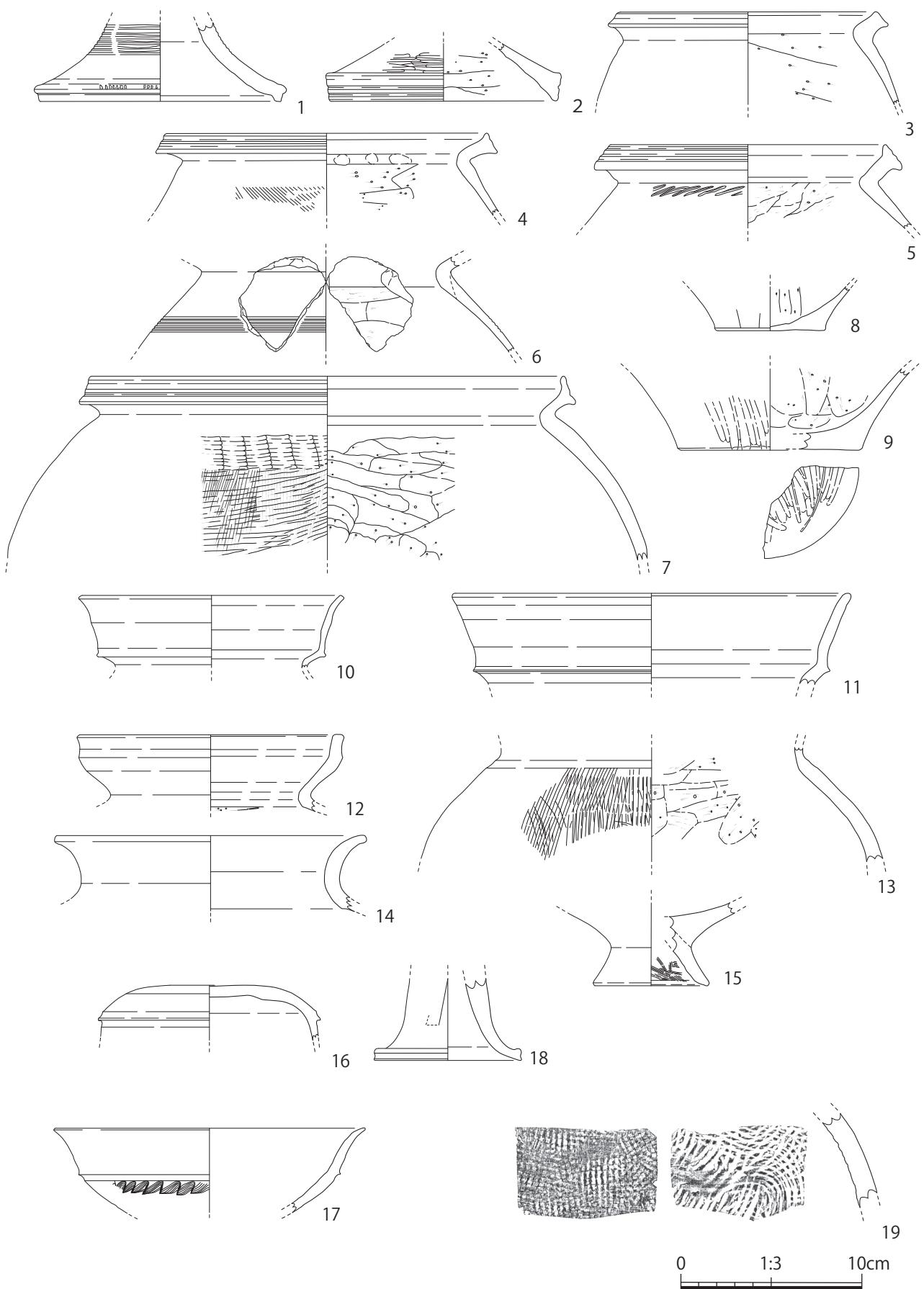
### 2区遺物包含層出土遺物(第9～13図)

第9図は弥生中期後葉の壺、甕で、松本IV様式にあたるものである。9-1～3は広口壺の肩部あるいは胴部と思われる。9-1は外面に貝殻原体による斜線文を上下に2列、その下に1条の沈線、さらにその下も斜線文を施す。内面はハケ調整の後ナデている。9-2は外面ハケ目調整の後、上部から刺突文、ハケ目原体による斜線文を施す。内面はハケ目調整で仕上げている。9-3は外面ハケ目調整の後、上部からヘラによるおそらく綾杉文が施されたと思われる。その下部はハケ目原体による斜線文が間をあけて2列に施される。内面はハケ目調整で仕上げられる。9-4は広口壺の頸部で、5条の凹線文が施される。9-5～6は広口壺の口縁部で、口縁端部に数条の凹線文が施され、口縁内部にも凹線文が施されている。9-7～17は甕で、いずれも口縁端部に数条の凹線文、内面頸部下部にハケ目が残るものが多い。9-13は外面胴部付近に円形の刺突文が残る。9-16は外面胴部に二枚貝原体による列点文が施される。9-17は頸部外面に指頭圧痕文帯が施され、胴部は縦方向のハケ目調整がされた後、3条の沈線、さらにその下に刺突文が施される。内面は頸部やや下側から斜め方向のハケ目が良く残る。

第10図は弥生中期から後期、古墳時代にかけての土器、須恵器である。10-1は弥生中期後葉の高壺の脚部で、松本IV様式にあたる。10-2は弥生後期前葉の高壺の脚部で、松本V様式にあたる。脚端部に凹線文が施される。10-3～7は弥生後期前葉の甕である。松本V様式にあたる。10-8、9は弥生土器甕の底部である。外面に縦方向のヘラミガキが施される。10-10、11は複合口縁をもつ弥生時代後期後葉の甕である。松本V様式で、10-10は草田編年4あるいは5期にあたるもの、10-11は草田編年3あるいは4期にあたると思われる。10-12は古墳中期前半の土師器甕で、松山編年IIあるいはIII期のものである。10-13も口縁部が欠損しているが、胎土やハケ目の様子から古墳時代中期の土師器甕で良いと思われる。10-14は単純口縁をもつ古墳時代中期の土師器甕である。10-15は古墳



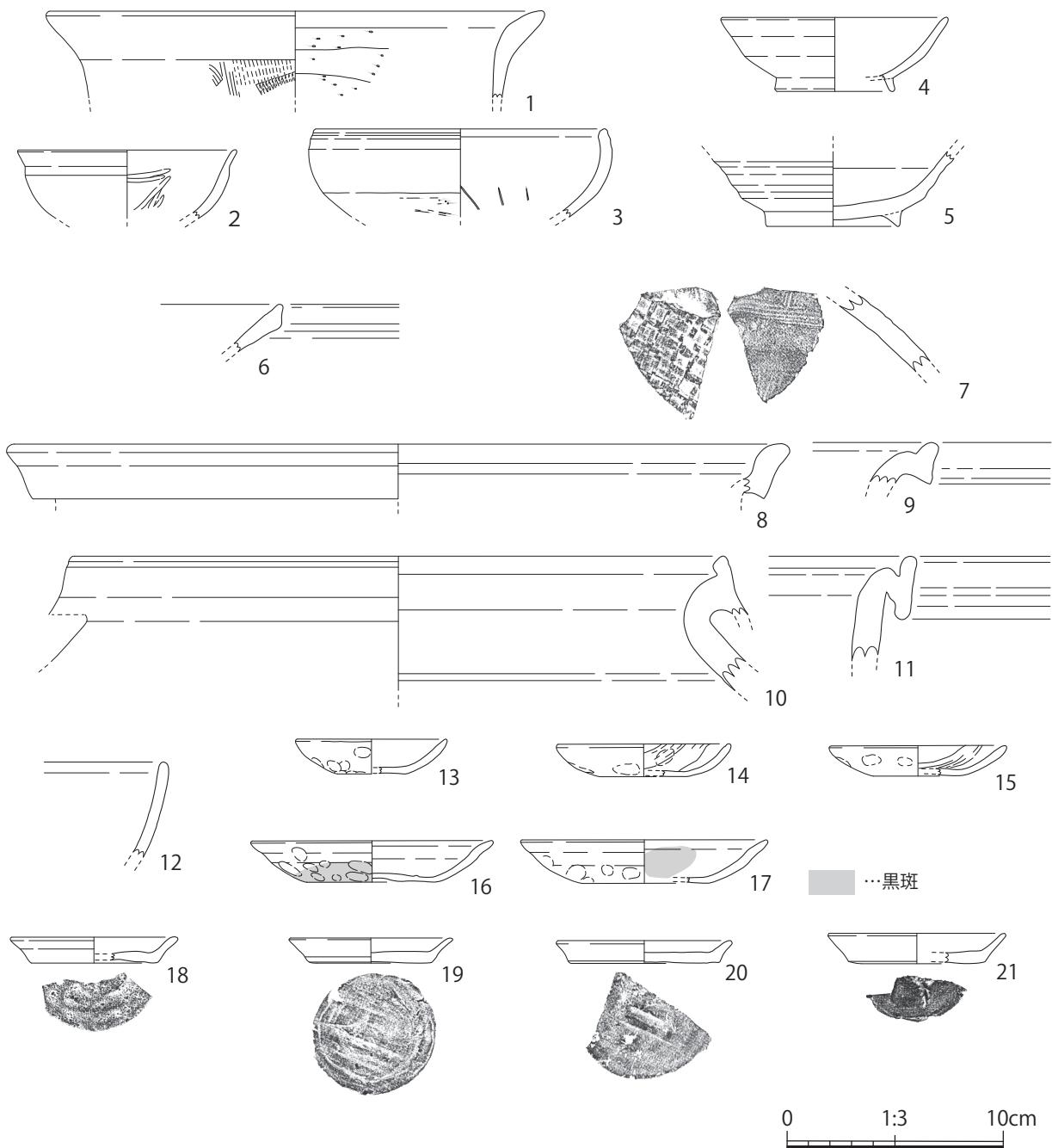
第9図 2区遺物包含層出土遺物



第10図 2区遺物包含層出土遺物

時代の製塩土器と思われる。10-16は須恵器の蓋坏の蓋で、出雲1期の古墳時代中期のものである。10-17は須恵器で無蓋高坏の坏部である。出雲1～2期の古墳時代中期のものである。10-18は須恵器の高坏の脚部である。出雲4～6期で古墳時代後期のものである。10-19は須恵器の甕である。

第11図は古墳時代から中世にかけての土器、須恵器、陶磁器である。11-1は古墳時代末から奈良時代にかけての土師器甕である。11-2、3は古代の土師器坏と思われる。11-4、5は古代から中世にかけての高台付の坏あるいは碗である。11-6は東播系の中世須恵器である。11-7は中世須恵器の甕である。<sup>1)</sup> 11-8～11は瓷器系陶器の甕である。13世紀前半から15世紀にかけてのものである。11-12は中国製の青磁碗龍泉窯E類で、15～16世紀代のものである。11-13～21は中世土師器皿



第11図 2区遺物包含層出土遺物

である。11-14～18は手づくねの皿、11-19～21は口クロ成形の皿である。11-19、20は外面底部に回転糸切痕の上に何らかの工具痕が残るものがある。

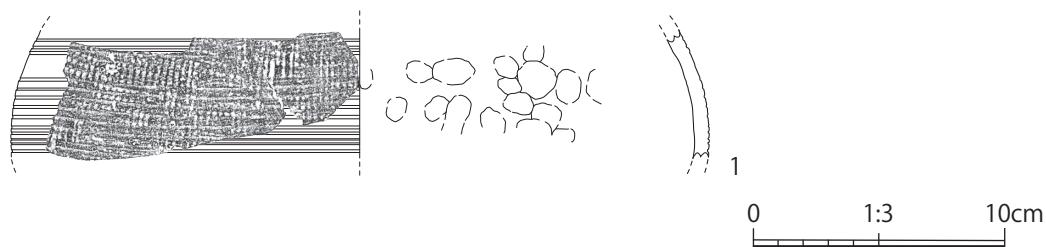
第12図は朝鮮半島系土器の壺の胴部である。外面は格子状タタキの上から、横方向の沈線を施し、内面は当て具の痕跡を丁寧にナデ消している。原三国後半期かもしくは三国時代初頭のものと考えられる<sup>2)</sup>。弥生後期から古墳前期初頭頃にあたる。

第13図は金属製品である。13-1は帶金具であろうか。13-2、3は鉄釘である。

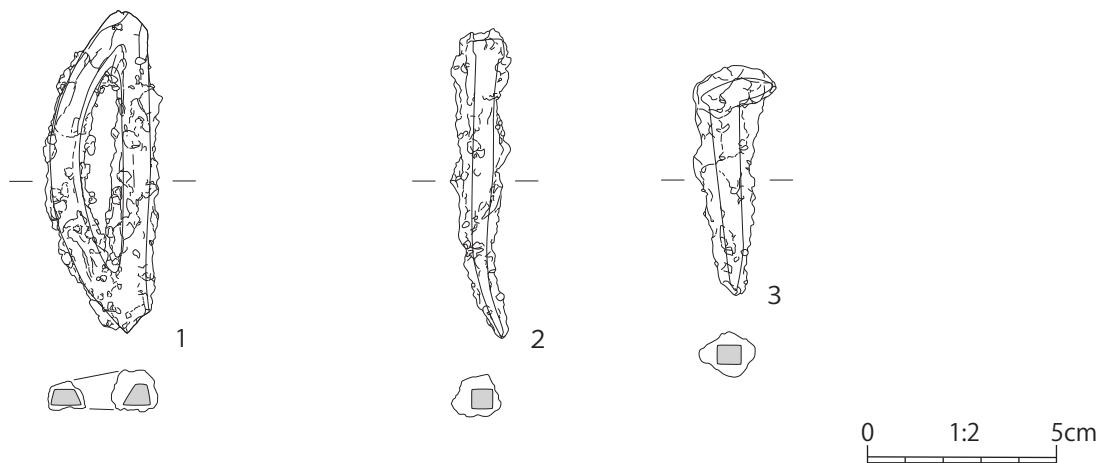
#### 1区遺物包含層出土遺物(第14～18図)

第14図は弥生前期から弥生中期の壺である。14-1は弥生前期の壺で、松本I様式にあたる。弥生前期でも中葉以降のものと思われる。外面胴部上半は上下に配された2条の沈線の間を羽状文で埋めるように施文されている。外面胴部下半は横方向のヘラミガキが施され、底部に近くになる部分は縦方向のヘラミガキが認められる。内面はハケ調整の後、ナデている。14-2、3は弥生中期中葉から後葉の壺で、松本IIIからIV様式のものと思われる。14-4～7は弥生中期後葉の鉢あるいは壺で、松本IV様式にあたる。14-4は外面を目の粗い原体でハケ調整し、小さい原体で押し引きするように沈線を2条施すものである。14-5～7は比較的器厚が薄く、ほかの弥生中期土器に比べると焼成も甘く、やや赤みを帯びたものである。14-8～17は弥生中期後葉の広口壺で、松本IV様式にあたる。

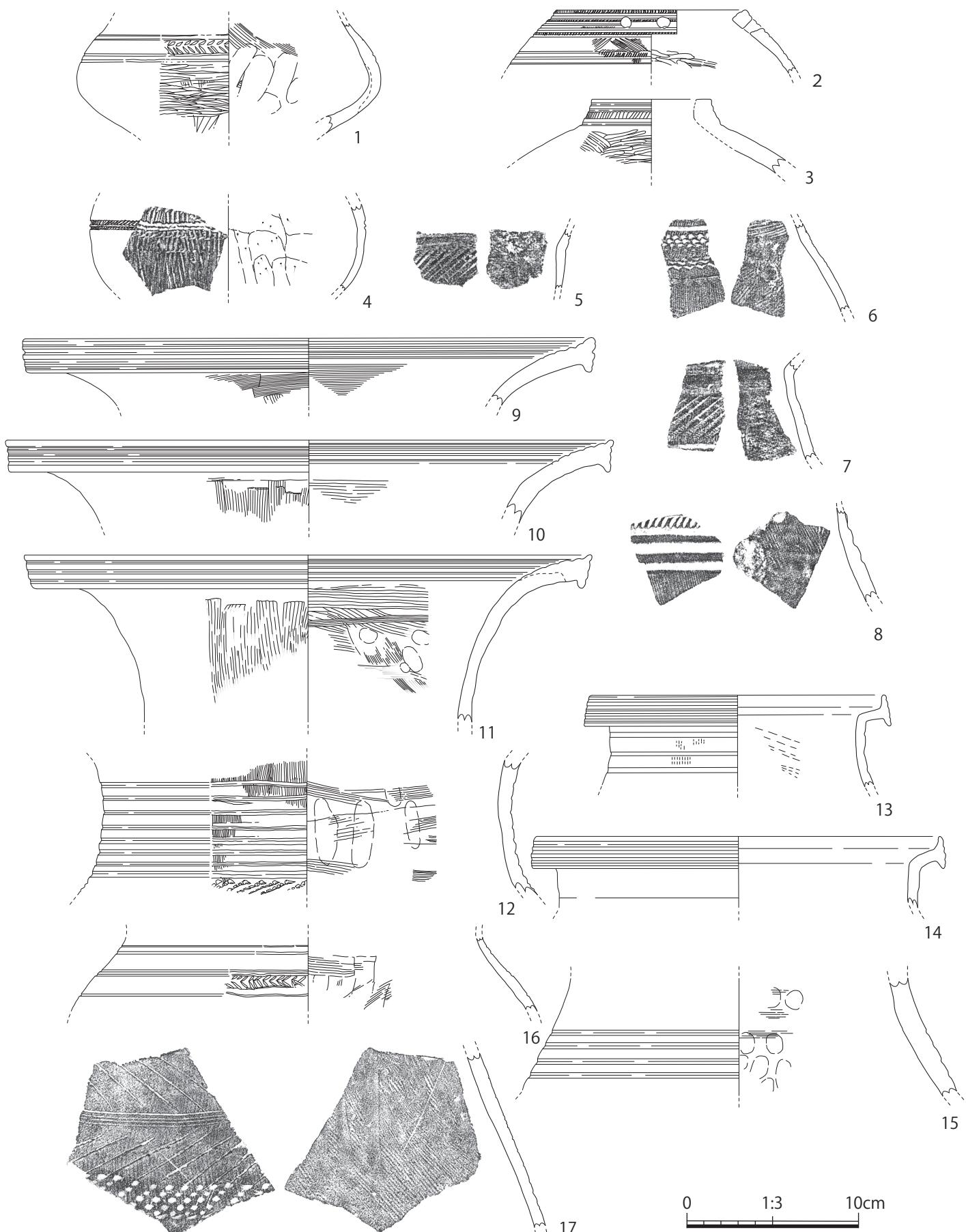
第15図は弥生中期の壺、甕である。15-2は塩町式系の壺あるいは甕で、外面は沈線文との間に刻目が施される。弥生中期後葉にあたる。このほかに掲載していないが、もう1点出土している。そのほかも松本IV様式で、弥生中期後葉のものである。15-16は頸部外面の指頭圧痕文帯が欠損してい



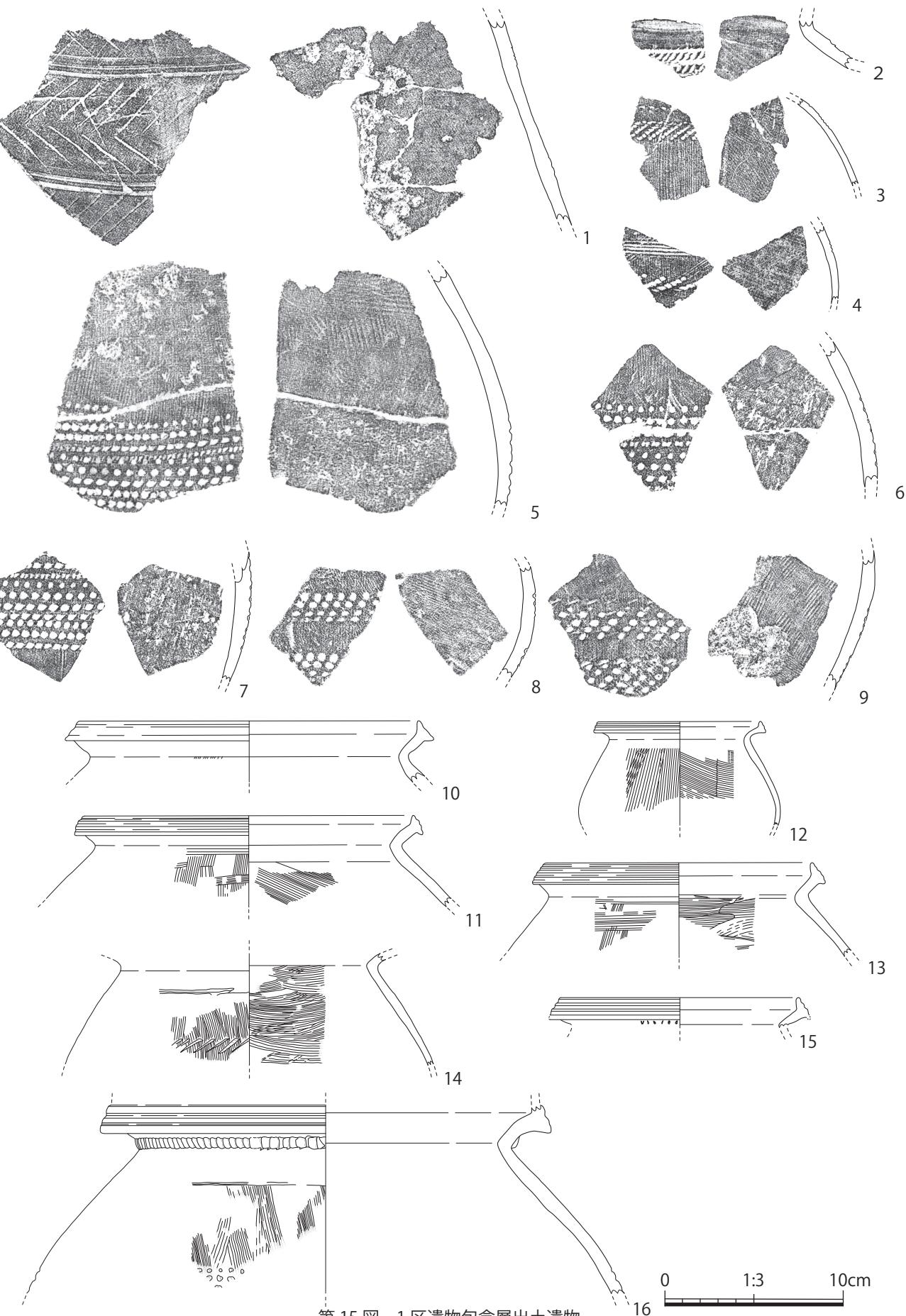
第12図 2区遺物包含層出土 朝鮮半島系土器



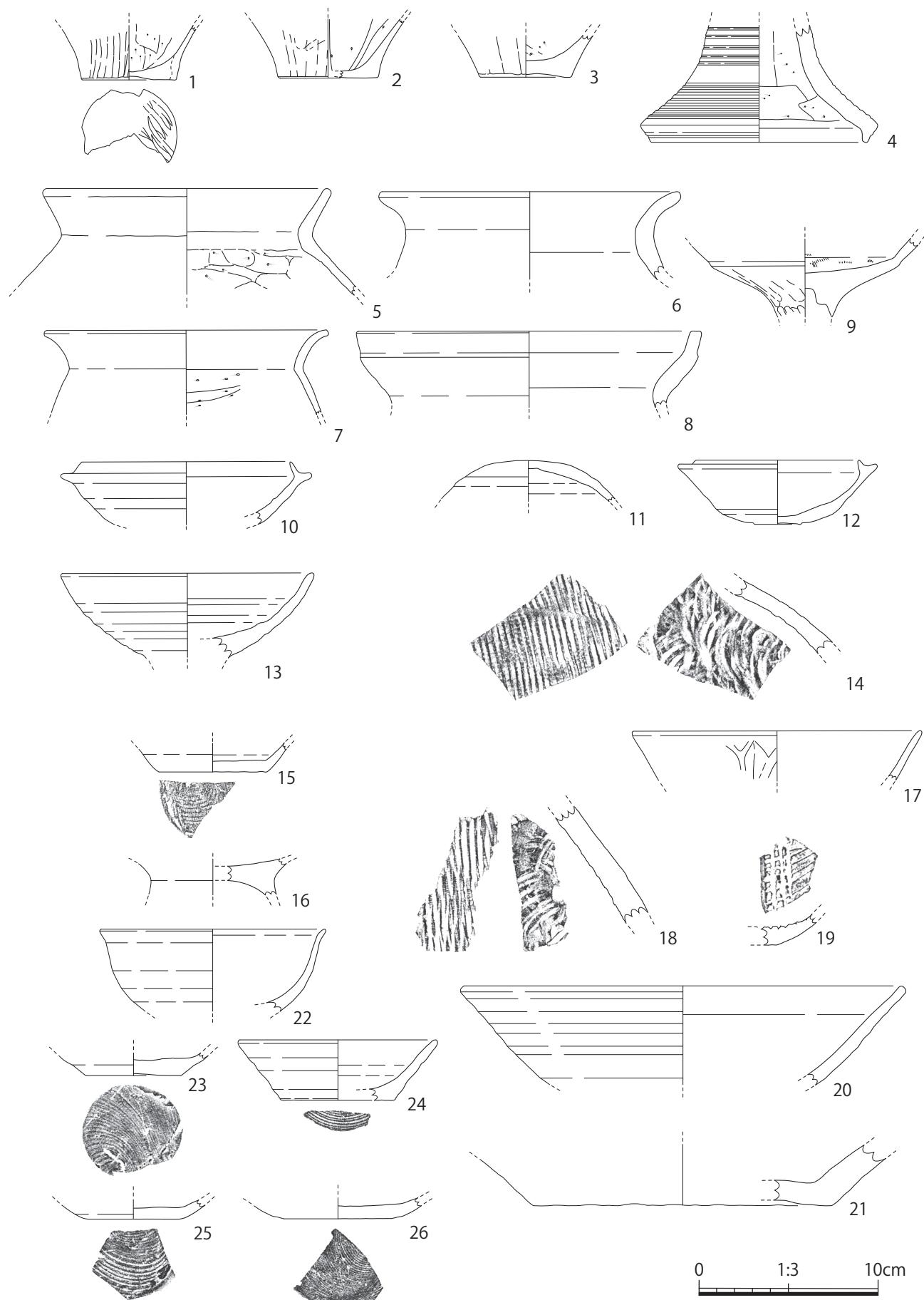
第13図 2区遺物包含層出土 金属製品



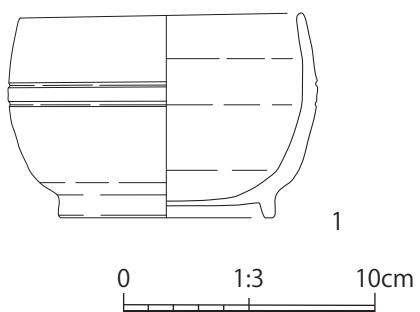
第14図 1区遺物包含層出土遺物



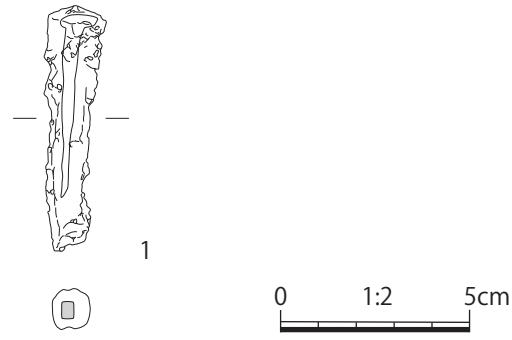
第15図 1区遺物包含層出土遺物



第16図 1区遺物包含層出土遺物



第17図 1区遺物包含層出土 朝鮮半島系土器



第18図 1区遺物包含層出土 金属製品

る。

第16図は弥生時代から中世にかけての遺物である。16-1～3は弥生土器の底部で、外面にヘラミガキが残る。16-4は弥生中期後葉の高坏で、松本IV様式にあたる。脚部外面に多数の沈線が施される。16-5～16-8は古墳中期の土師器甕である。16-8のみ複合口縁が形骸化したもので、松山編年Ⅱ～Ⅲ期にあたる。そのほかは、同時期の単純口縁をもつものである。16-9は古墳中期の土師器高坏である。16-10～14は古墳時代の須恵器である。16-5は須恵器の無高台坏で、国府編年第6型式9世紀中葉から後葉のものである。16-10は蓋坏の身で出雲5あるいは6期、16-11と16-12は蓋坏の蓋と身で出雲6期、16-13は無蓋高坏で出雲5あるいは6期にあたるものである。16-10～13は7世紀代におさまるものであろう。16-16は古代の足高高台付土師器の皿である。国府第7あるいは第8型式で、10世紀から11世紀前半のものである。16-17は中国製の青磁碗である。龍泉窯I-5類で13世紀前半のものである。16-18は中世須恵器の甕である。16-19は古瀬戸のおろし皿で、14世紀後半～15世紀にかけてのものである。<sup>4)</sup>16-20は瓷器系陶器の直縁大皿で15世紀代のものと考えられる<sup>5)</sup>。16-21は瓷器系陶器の甕底部である。<sup>5)</sup>16-22～26は中世土師器の坏または皿である。すべて底部を回転糸切りしたものである。16-22は中世前半、そのほかは中世後半にあたるものと思われる。

第17図は朝鮮半島系の高台付の碗である。焼成は須恵質でかなり焼きしまっており、体部外面に2本の沈線が巡らされる。6世紀末から7世紀初頭の百濟土器と考えられる。<sup>2)</sup>

第18図は鉄釘である。鋸による腐食のため、身がかなりやせてしまっている。

### 第3節 第1面(第19図)

前節(第1節2項基本層序)で述べたとおり、弥生時代中期から中世にかけての遺物包含層上面で遺構を検出しており、これを第1面と称して調査を行った。1面の検出標高は、1区5～8SPと2区8SPで約3.0mと高くなっている。ここから調査区東端の1区1SPでは標高約2.5m、西端にあたる2区1SPでも標高約2.5mを測る。このことから、第1面の形成層である遺物包含層が、自然堆積層の傾斜に沿って東西に向かって下がっていることがわかる。

調査区西側にあたる2区では、1SPで1面の落ち込みを一部で確認したものの、湧水が激しく崩落の恐れが発生したため、落ち込みの底面、範囲などを確認することができなかった。2区ではこれより東側すべての範囲において、1面の精査を断念している。1区では4SPと5SPにおいて、調査範囲が狭く遺構の検出が不可能であったものの、それ以外の範囲で遺構を検出することができた。

遺構は遺物を伴うものがあるものの、細片のため図示できるものが少ない。

以下、図示できる遺物を伴う遺構について紹介ていき、そのほかの遺構については遺構法量表(表1、2)を参照いただきたい。

また、1面と近代以降のかく乱層との間に、弥生時代から近世の遺物包含層があり、この包含層からの出土遺物を1面より上層出土遺物として掲載した。なお、この遺物包含層は近代のかく乱が激しく遺構は検出していない。

#### 1. 1区1面7・8SP検出遺構(第20図)

##### SK01

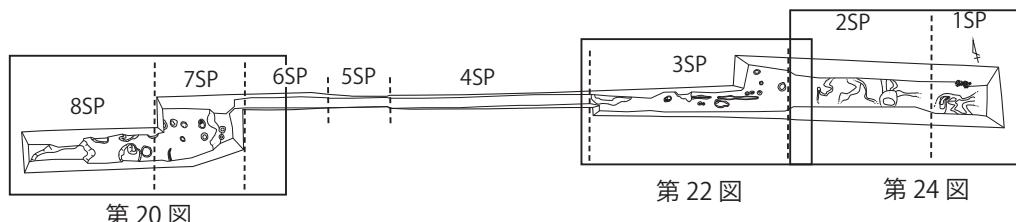
1区の最西端で検出した土坑で、南北端は調査区外に広がる。また、土坑の底面は湧水のため確認できなかった。この土坑を1面で検出したが、調査区北壁の土層観察により、1面よりも上層から掘り込まれていることがわかっている。検出面から確認できた深さは、20cm程度であるが、実際に掘り込まれた標高からは42cmを測る。この土坑からの出土遺物は、弥生時代から近世までのものであったが、ほとんどが細片である。

##### SK05

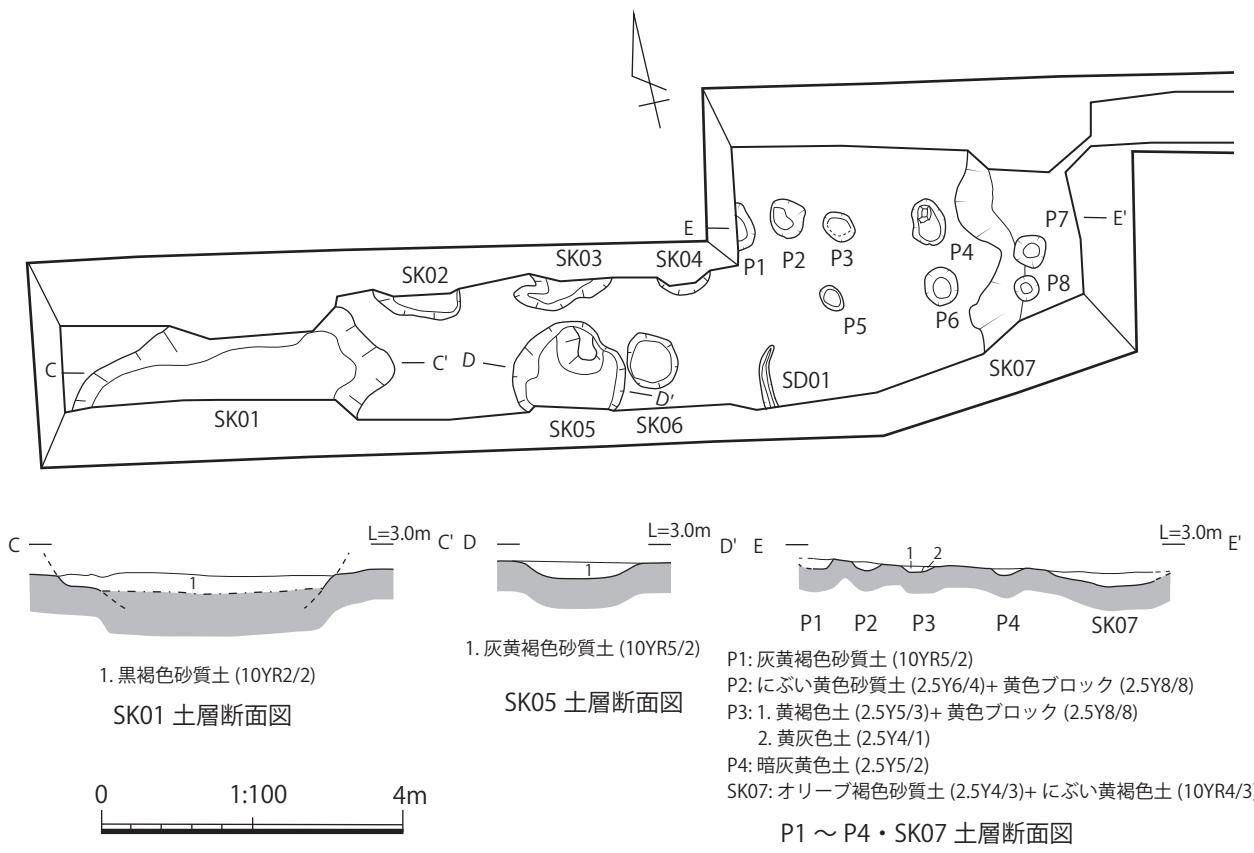
円形の土坑で、南端は調査区外に広がる。出土遺物は弥生時代から近代のものまで含まれる。

##### P1～P4・SK07

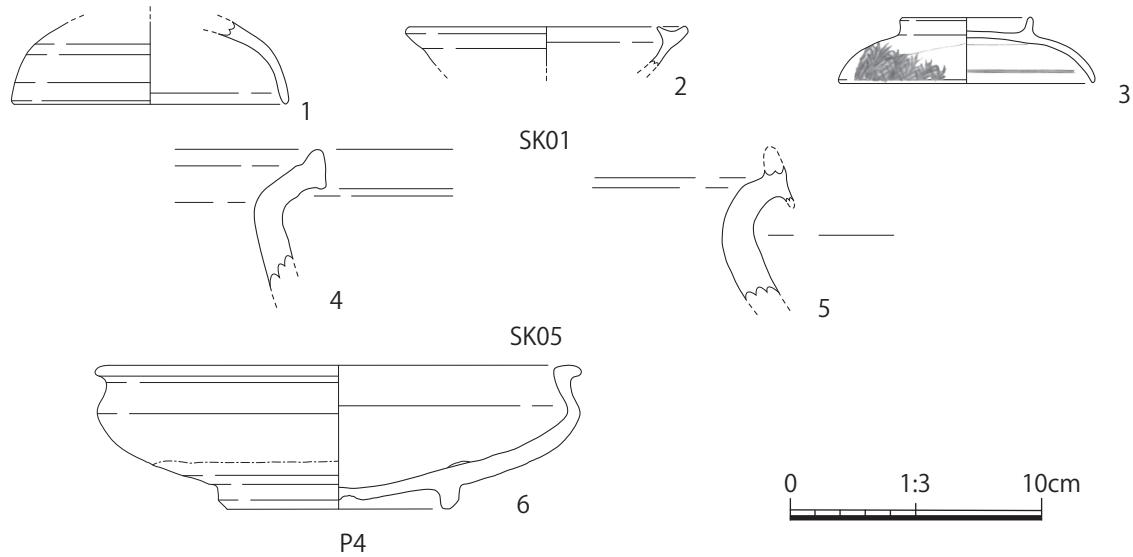
P1～P4は東西に並ぶピットであるが、それぞれの間隔はまちまちで遺構に伴う遺物も弥生時代から近代のものまでと、年代に幅がある。土坑の埋土もそれぞれ異なる土質であることからも、同時期の遺構の可能性は低い。検出面からの深さも浅く、遺構の上面が削平を受けたと思われる。SK07



第19図 1区1面 遺構配置図 (S=1/500)



第20図 1区1面7・8SP 遺構平面・断面図



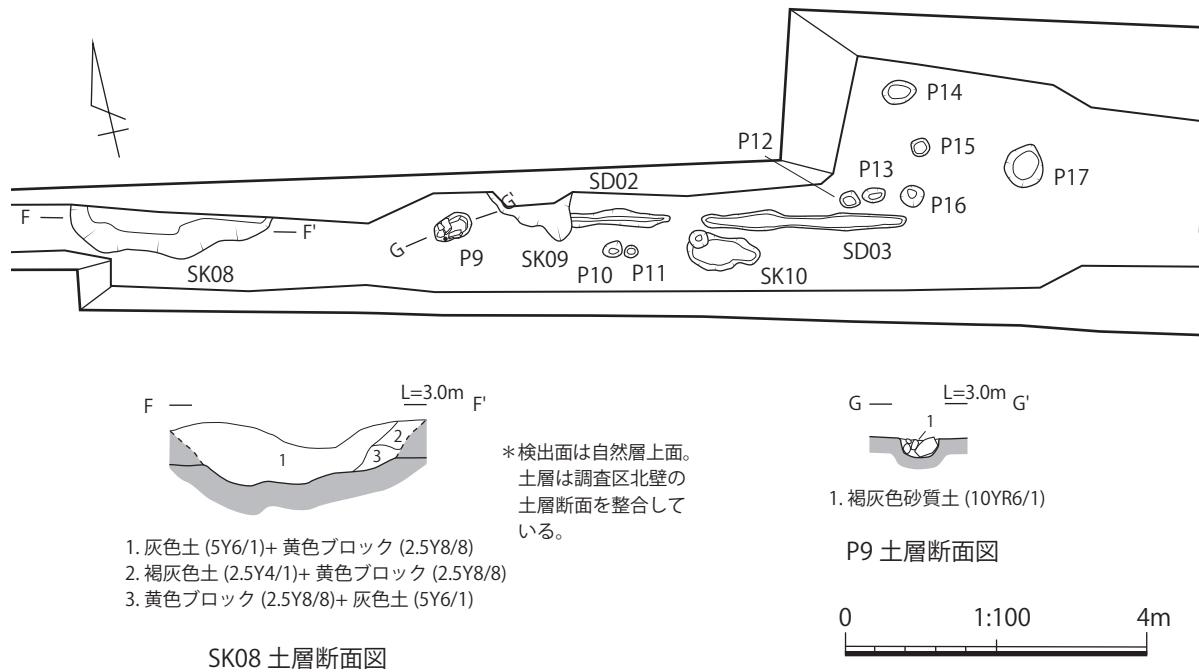
第21図 1区1面7・8SP 遺構出土遺物

は東にむかって落ち込む土坑であるが、西端にあたる土坑の立ち上がりは確認できなかった。

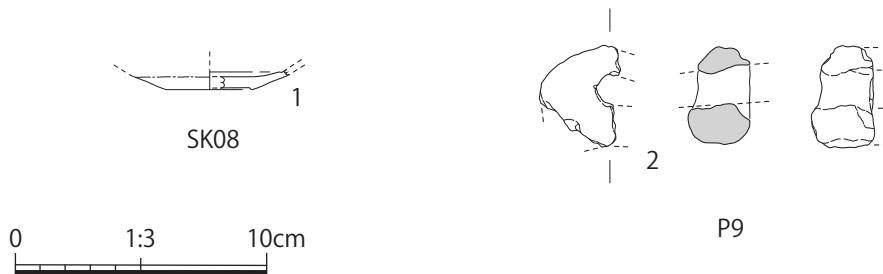
## 2. 1区1面7・8SP 遺構出土遺物(第21図)

**SK01 出土遺物** 21-1は須恵器蓋環の蓋、21-2は須恵器蓋環の身である。いずれも出雲5～6期の7世紀代にあたるものである。21-3は肥前磁器の広東碗蓋である。九陶V期で19世紀代のものである。

## SK05 出土遺物



第22図 1区1面3・4SP 遺構平面・断面図



第23図 1区1面3・4SP 遺構出土遺物

21-4と5は瓷器系陶器の甕で、いずれも5型式13世紀前半のものと思われる。<sup>1)</sup>

#### P4 出土遺物

21-6は在地系陶器の布志名焼である。布志名焼の編年は確立されていないが、近世末あるいは近代にかかるものではないかと思われる。

#### 3. 1区1面3・4SP 検出遺構(第22図)

##### SK08

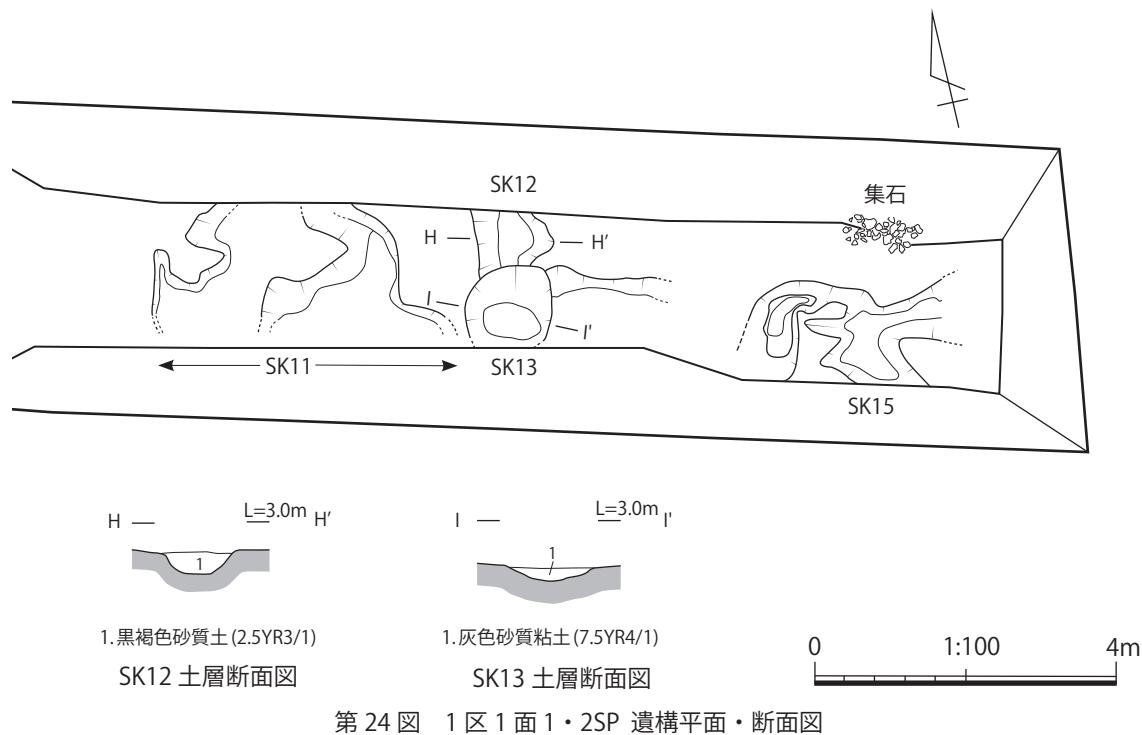
東西に長軸を持つ土坑で、北半分は調査区外に広がる。調査区北壁の土層観察から1面に伴う遺構と判断した。この土坑からは中世の遺物が出土している。

##### P9

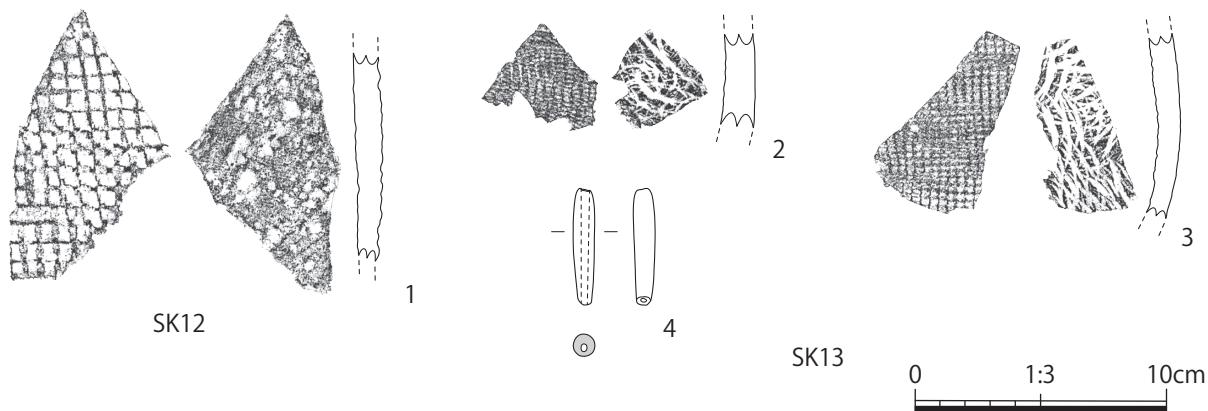
ピットのなかに拳大またはそれよりやや大きめの石を配する遺構で、ピットからは小形の輪羽口が出土している。鍛冶に関する遺構の可能性が考えられる。

#### 4. 1区1面3・4SP 遺構出土遺物(第23図)

##### SK08 出土遺物



第24図 1区1面1・2SP 遺構平面・断面図



第25図 1区1面1・2SP 遺構出土遺物

23-1は中国製白磁皿のIV類にあたる11世紀末から12世紀後葉のものである。

#### P9 出土遺物

23-2は轍羽口でやや小形のものである。

#### 5. 1区1面1・2SP 検出遺構(第24図)

##### SK12

南北に長軸を持つ土坑で、南端はSK13に切られており、北端は調査区外に広がる。遺構の形状から溝である可能性もある。遺構からは中世須恵器が出土している。

##### SK13

SK12を切る形で存在する楕円形の土坑である。遺構からは弥生時代から中世の遺物が出土している。

このほか5~10cm程度の石が集積された遺構を検出しているが、遺物を伴わず、調査区の一部

表1 1区1面7・8SP 遺構法量表

遺構名	上面長軸	上面短軸	深さ	出土遺物の時期	備考
SK01	430cm	150cm	42cm以上	弥生～近世	湧水の為、下端不明
SK02	114cm	25cm以上	26.2cm	中世	
SK03	130cm	40cm以上	14.6cm	弥生	
SK04	71cm	27cm	22.5cm	弥生	
SK05	149cm	113cm以上	23.8cm	弥生～近代	
SK06	80cm	66cm	28.2cm	弥生～中世	
SK07	270cm以上	106cm以上	41cm	弥生～中世	
P1	64cm	25cm以上	7cm		
P2	55cm	45cm	12.4cm	弥生	
P3	45cm	36cm	10.2cm	弥生～中世	
P4	63cm	42cm	12.6cm	弥生～近代	石あり
P5	39cm	28cm	4cm		
P6	52cm	44cm	11.5cm	中世	
P7	44cm	43cm	14.5cm		
P8	33cm	32cm	16cm		
SD01	85cm	18cm	3cm		

表2 1区1面1～4SP 遺構法量表

遺構名	上面長軸	上面短軸	深さ	出土遺物の時期	備考
SK08	267cm	53cm	90cm	中世	
SK09	143cm	52cm以上	51.5cm	弥生～中世	
SK10	98cm	35cm	9.1cm	古墳	
SK11	360cm	170cm以上	29.3cm	弥生～古墳	
SK12	94cm以上	98cm	13.9cm		
SK13	108cm以上	112cm	13.9cm	弥生～中世	
SK14	146cm以上	104cm以上	19.9cm		
SK15	250cm以上	140cm以上	8.3cm		
P9	53cm	40cm	21cm		石あり
P10	27cm	21cm	14cm	古墳～中世	
P11	18cm	16cm	4.5cm		
P12	27cm	23cm	9.6cm		
P13	31cm	20cm	5.8cm		
P14	45cm	43cm	11.9cm	古墳	
P15	26cm	24cm	4.8cm	弥生	
P16	32cm	2.7cm	15.7cm		
P17	57cm	52cm	10.7cm		
SD02	134cm以上	14cm	9.2cm	弥生	
SD03	267cm	15cm	5.2cm	古墳	

分のみの検出であるため、遺構の性格は不明である。

## 6. 1区1面1・2SP 遺構出土遺物(第25図)

### SK12 出土遺物

25-1は中世須恵器の甕である。外面の格子タタキ目がやや大きめのものである。

### SK13 出土遺物

25-2と3は須恵器の甕で、古墳時代のものである。25-4は土錐である。

## 7. 2区1面より上層出土遺物(第26～29図)

第26図は弥生時代から中世の遺物である。26-1は弥生時代の高坏の脚部である。26-2は古墳時代の須恵器甕である。26-3は土師器の坏で、古代末ぐらいのものであろうか。26-4、5は土師器の高

台付の壺あるいは皿である。古代末あるいは中世初頭のものであろうか。26-6は中世須恵器の甕である。外面格子タタキが大きめのものである。26-7は古瀬戸の瓶子である。外面はオリーブ黄色の釉薬がかかり、内面には釉薬はかけず、指頭圧痕が目立つ。26-8、9は瓷器系陶器の甕である。<sup>5)</sup> 26-9は7型式14世紀前半のものと思われる。26-10は瓷器系陶器の鉢である。Ⅲ-1期13世紀末から14世紀初頭のものと考えられる。26-11は備前焼の擂鉢である。乗岡編年中世5～6期15世紀後半～16世紀末のものである。<sup>6)</sup> 26-12～27は中世土師器の壺あるいは皿である。26-12～14は底部を回転糸切りで仕上げる中世前半の壺あるいは皿である。26-15～25は底部を回転糸切りで仕上げる中世後半の壺または皿である。26-26、27は手づくねの皿で、中世末ぐらいのものであろうか。

第27図は近世の遺物である。27-1、2は肥前磁器碗である。九陶IV期18世紀代のものである。27-3は在地系陶器碗である。緑釉の布志名焼で、19世紀代のものと考えられる。27-4は在地系陶器皿で、褐色のいわゆる来待釉がかかる布志名焼である。

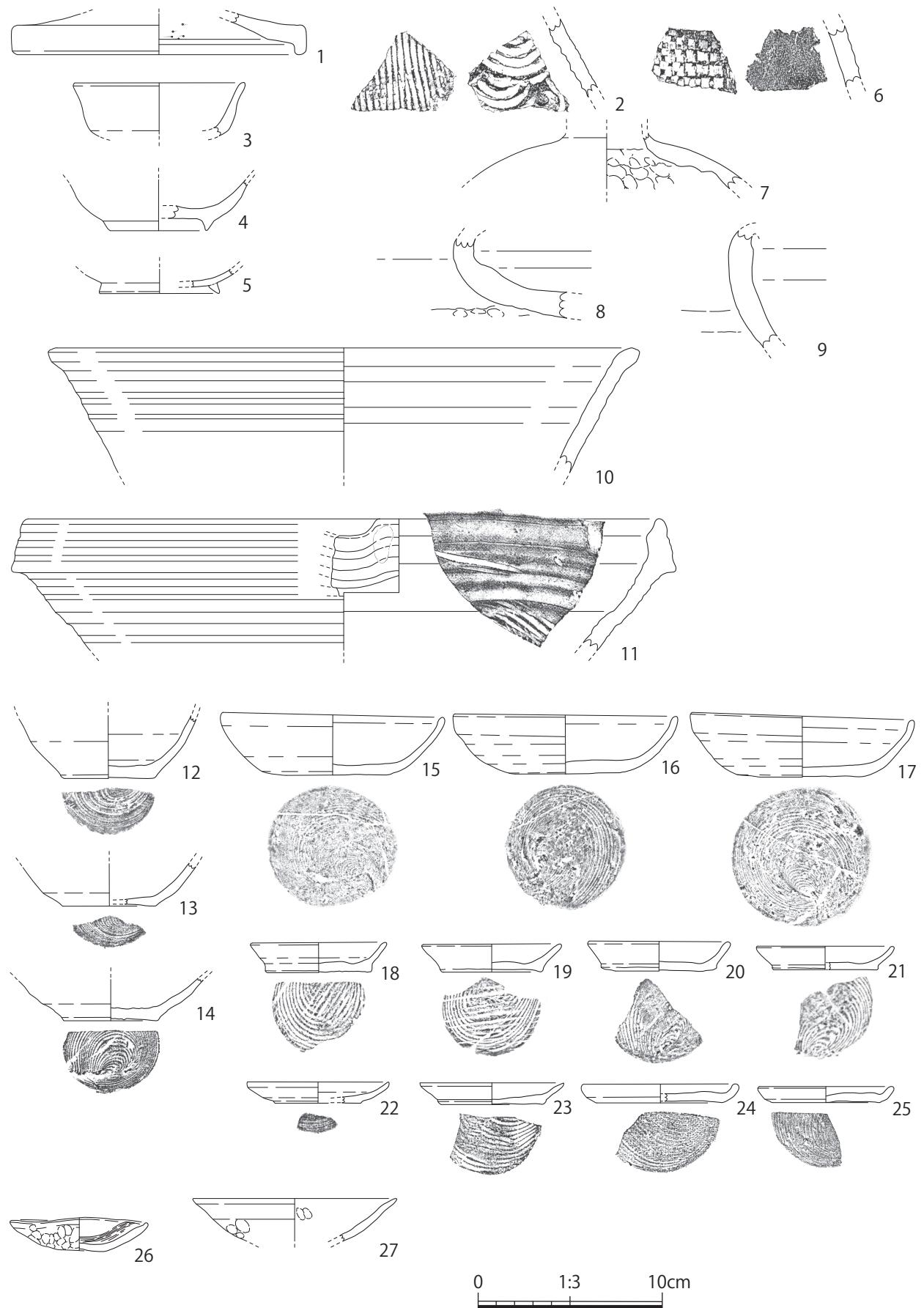
第28図はるつぼ状の金属製品である。X線撮影を行ったが、腐食のため金属成分がほぼ流れ出てしまっている。

第29図は花崗岩製の石製品で、1面のみ使用痕がみられる。調査区からは轍羽口や細片のため掲載していないが、鉄滓も数点出土していることから、砥石のほか金床石の可能性も考えられる。

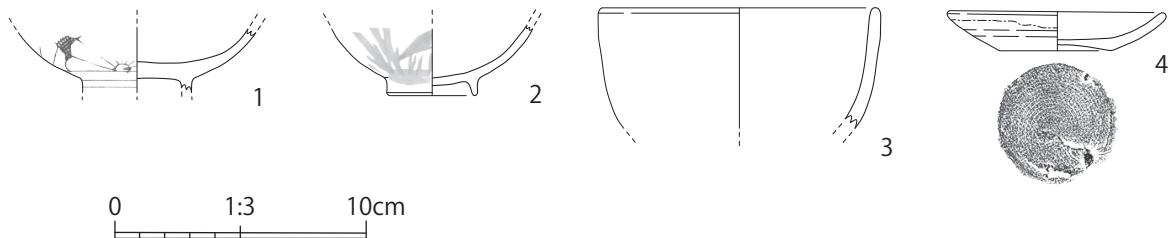
#### 8. 1区1面より上層出土遺物(第30～31図)

第30図は弥生中期から近世の遺物である。30-1は弥生中期後葉の広口壺で、松本IV様式にあたる。口縁部外面に5条の凹線を施し、外面頸部に縦方向のハケ目を施す。また、口縁部内面にも凹線が施されており、頸部内面は横方向のハケ目で仕上げられている。30-2は弥生中期の高壺で、外面に4条の沈線が施される。内面は粘土のしづり目が残る。30-3は古墳中期の土師器甕である。口縁部欠損のため、複合口縁か単純口縁なのかは不明である。30-4は古墳時代土師器の高壺である。外面調整はナデで、内面は粘土のしづり目が残る。30-5は古墳時代土製支脚の一部と思われる。30-6、7は古墳時代須恵器の蓋壺の蓋である。いずれも出雲6期7世紀代のものと思われる。30-8、9は古墳時代須恵器の甕である。30-10、11は土師器の足高高台付壺である。国府編年第7～8型式で10世紀～11世紀前半にあたるものである。30-12は須恵器の蓋壺の蓋で、国府編年第5型式8世紀末葉～9世紀前葉のものと思われる。30-13は須恵器蓋壺の壺で、国府編年第1型式7世紀後葉のものである。30-14は瓦質土器の火鉢で、外面頸部に菊花文のスタンプが施される。内面頸部から下部は横方向のハケ目が施される。中世後半でも16世紀までのものと思われる。30-15、16は中世土師器の壺あるいは皿である。30-15は底部径が小さいため、壺と思われる。壺であれば、14世紀から15世紀にかけてのものではないだろうか。30-16は16-24の皿に類似しており、16世紀代ぐらいのものであろうか。30-17は在地系陶器の碗である。緑釉の布志名焼で19世紀代のものと思われる。30-18は肥前磁器の碗で、九陶IV期にあたる18世紀代のものである。30-19は肥前磁器の廣東碗で、九陶V期にあたる19世紀代のものである。

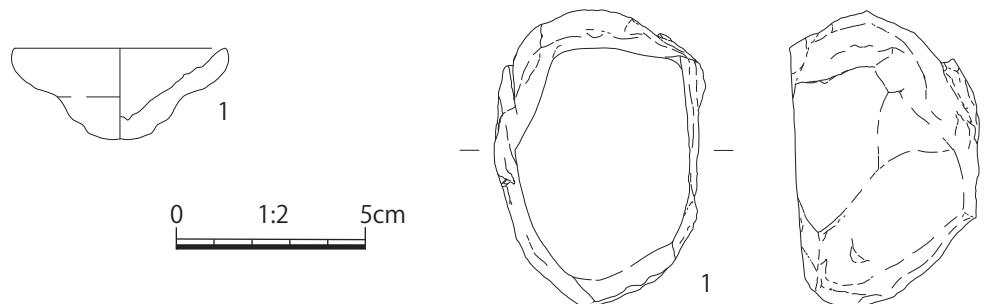
第31図は近世の古銭である。31-5は腐食のため文字が消えてしまっているが、このほかはすべて寛永通宝である。これらはまとまって出土しているため、31-5も寛永通宝と考えられる。31-1～3



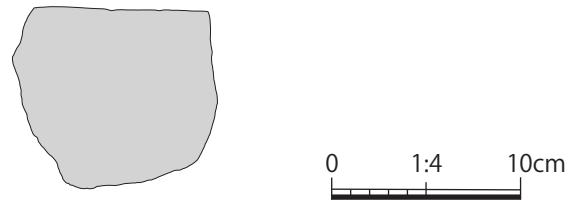
第26図 2区1面より上層 出土遺物



第27図 2区1面より上層出土遺物



第28図 2区1面より上層出土 金属製品



第29図 2区1面より上層出土 石製品

はス貝宝で古寛永、31-4は裏に「文」の字があるため、寛文8(1668)年以降に鋳造された新寛永のなかでも寛文12(1672)年までの限られた時期に鋳造されたものである。

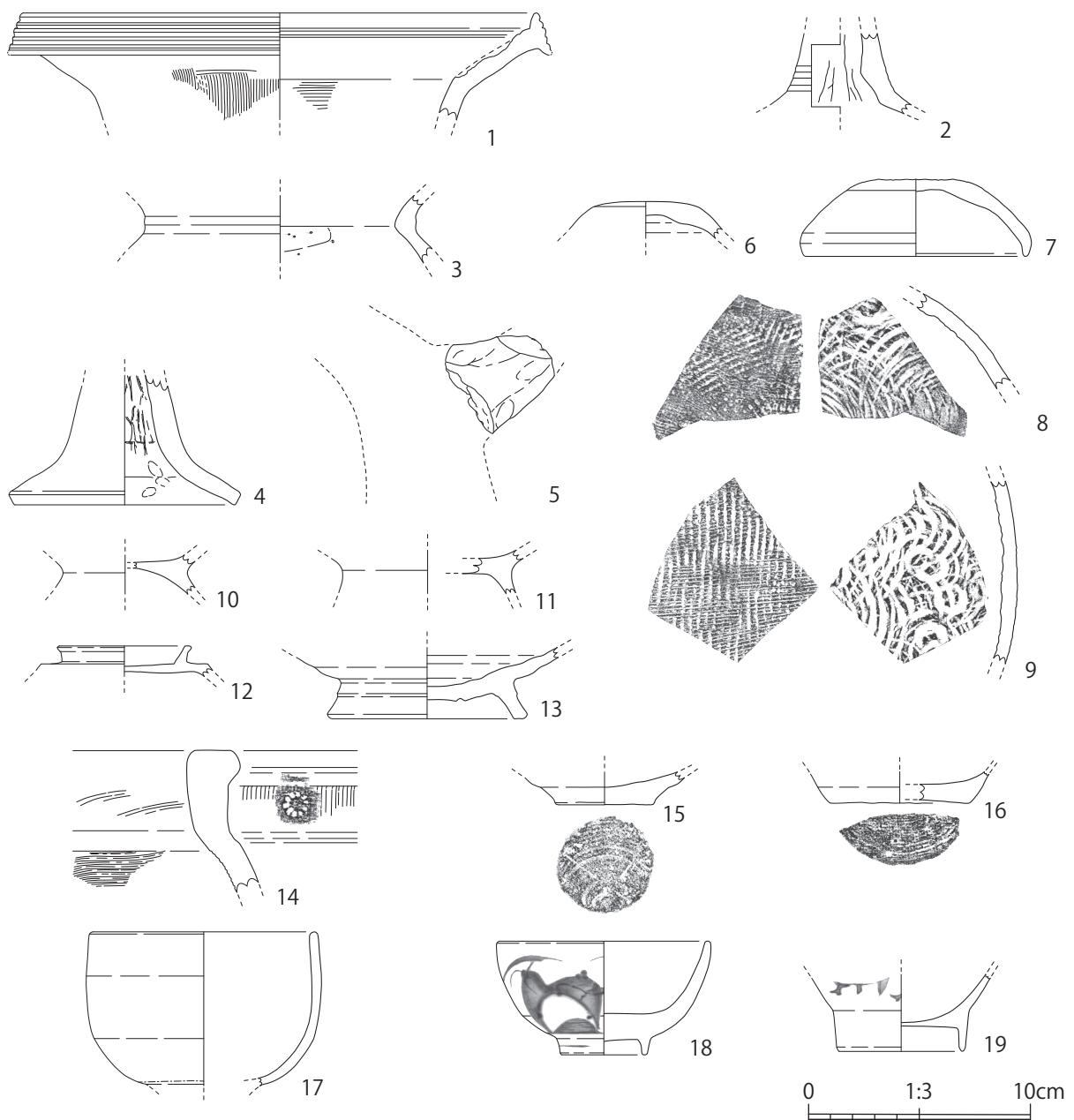
註 1) 中野晴久 2011 「常滑系陶器編年」『第10回山陰中世土器検討会資料集 山陰地方における越前・常滑系陶器』

註 2) 平郡達哉氏(島根大学)の御協力により、寺井誠氏(大阪歴史博物館)に鑑定していただいた。

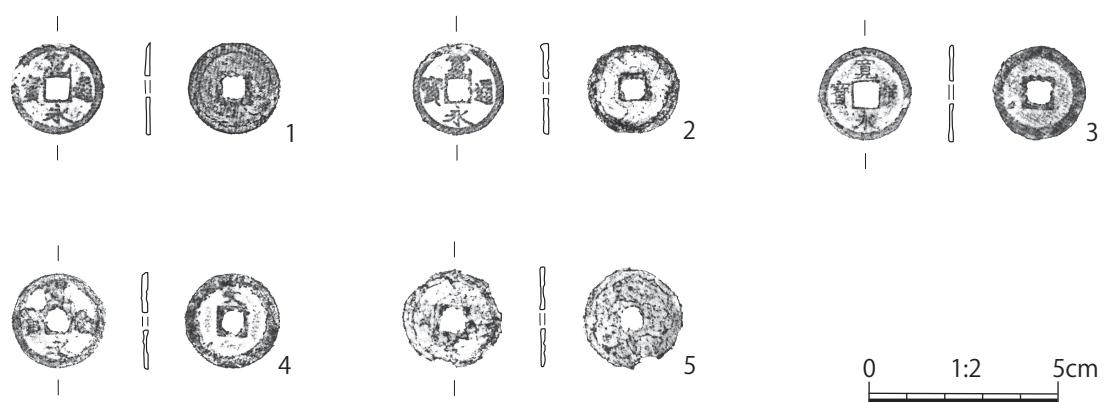
註 3) 弥生中期の広島県北部の三次市塩町遺跡から出土した装飾性の強い土器で、沈線文の間に刻目を施す文様を甕、鉢などの中部上半に施すものを塩町式とすると伊藤実氏(広島県立歴史民俗資料館)によって定義づけられている。しかし、山陰地域で出土するものに、塩町式土器の特徴を有しつつ、胎土は在地のものと変わらないものもあり、必ずしも塩町式土器そのものが搬入されたわけではなく、塩町式土器の影響を受けて在地で作成されたものも含まれる可能性があるため、「塩町式系」と称している。

註 4) 古瀬戸は以下の文献を参考にした。  
藤沢良祐 2007 「古瀬戸製品編年表」『愛知県史別編 窯業2』 愛知県史編さん委員会  
註 5) 木村孝一郎 2011 「越前焼の編年的研究と生産地の動向」『第10回山陰中世土器検討会資料集 山陰地方における越前・常滑系陶器』

註 6) 乘岡実 2008 「備前焼の編年について」『第7回山陰中世土器検討会 山陰地方における備前焼』



第30図 1区1面より上層出土遺物



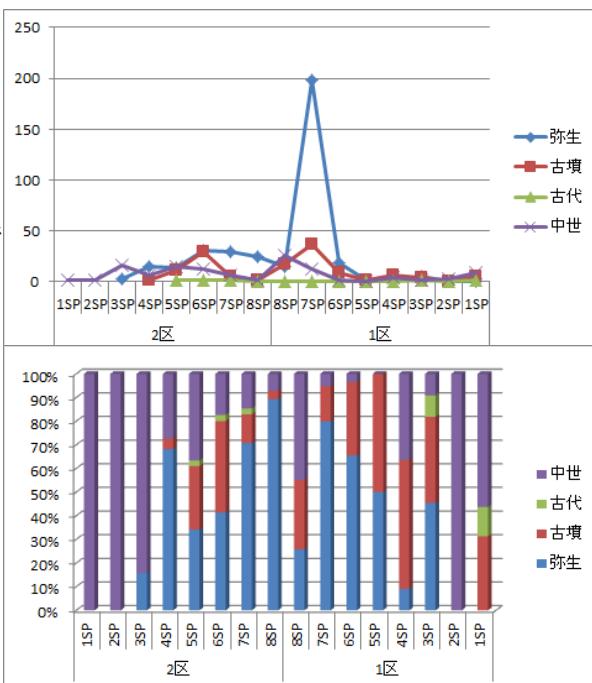
第31図 1区1面より上層出土古銭

## 第4章 総括

今回の調査では、遺構の存在は顕著ではないものの、弥生中期土器をはじめ多くの遺物が出土した。また、各調査区、各SP(スパン)で自然堆積層の科学分析を行うことで、地形の変化を明らかにすることができた。以下では、この地形の変化と遺物の出土状況の関係を探ってみたい。さらに朝鮮半島系土器や塩町式系といった他地域の土器の流入について考察し総括したい。

### 第1節 遺物の出土地点と砂州の発達過程

調査スパン毎の遺物包含層の遺物の出土状況を、グラフに表した（第32図 \*掲載・非掲載のものを含めた数量）。このグラフから、弥生時代の遺物が調査区中央部で多く（最多は1区7SP）、両端で少ない傾向にある事が分かる。古墳時代の遺物は調査区中央部の1区8SPと2区5SPでピークを成し、特に2区西部で少ない傾向にある。古代の遺物は他時期に比べ特に少ない。中世の遺物は古墳時代の遺物と同様な傾向を示すが、2区西部でも検出される。これらの事柄を前述の砂丘の発達過程、及び山陰地域での海岸砂丘の発達時期（豊島、1975）と重ねると、以下の事柄が明らかになる。



第32図 調査スパン毎の遺物の出土状況

上：実数 下：累積百分率

両グラフとも調査スパンを西（左）から東（右）に配列

### 第2節 森屋敷遺跡出土の塩町式系土器と朝鮮半島系土器

今回調査した森屋敷遺跡では、山陰地方の弥生中期土器に伴って、同時期の広島県北部を起源とする沈線文間に刻目を施す塩町式系の土器(33-1)が出土した。また、時代が異なるものの原三国後半期もしくは三国時代初頭(弥生後期～古墳前期初頭頃)の朝鮮半島系の壺(33-2)、百濟の6世紀末～7世紀初頭の朝鮮半島系高台付の碗(33-3)も出土している。

出雲地方において、遺跡内で山陰地方の土器とともに塩町式系土器、朝鮮半島系土器が出土した遺跡に限り示すと第34図のような分布を表わす。

<sup>2)</sup> ②山持遺跡(出雲市)は斐伊川、神戸川によって形成された沖積平野の北辺に位置する縄文～近世の集落遺跡である。35-1は甕の頸部から胴部にかけて沈線文間に刻目を施す塩町式系土器である。35-2、3は朝鮮半島系土器で、35-2は弥生中期後葉～後期中葉の樂浪土器である。35-3は両耳付短頸壺で弥生後期でも草田5期併行とされている。森屋敷遺跡33-2と同様のものと思われる。山持遺跡では、このほか北部九州系、西部瀬戸内沿岸部系<sup>3)</sup>、吉備系といったさまざまな地域からの土器が多く出土している。

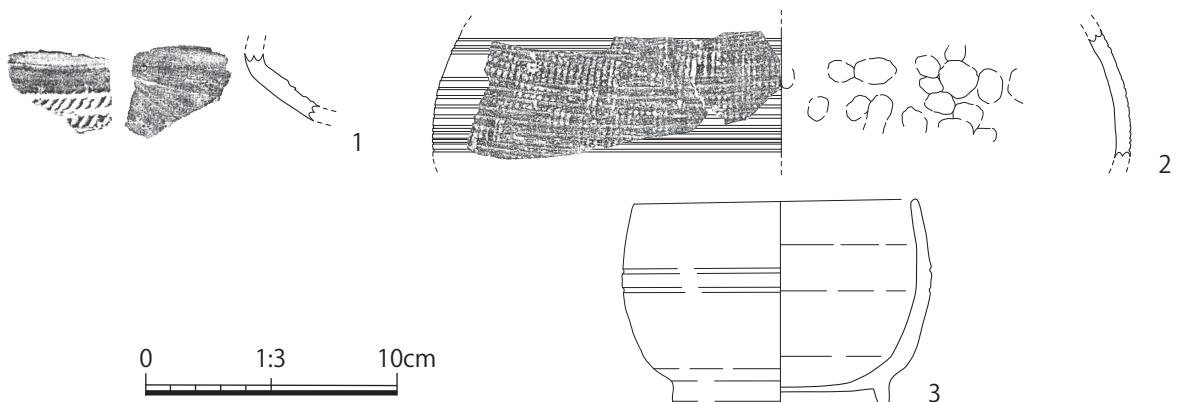
<sup>4)</sup> ③青木遺跡(出雲市)も斐伊川、神戸川によって形成された沖積平野の北辺に位置する弥生～鎌倉時代の墳墓、官衙関連、祭祀遺跡である。35-4は塩町式系の甕である。35-5は陶質の朝鮮系土器で壺の一部と推定されている。このほか九州から瀬戸内地方にかけての搬入土器も出土している。これらの土器は包含層からの出土であり、周辺の集落から廃棄されたものと推定されている。

<sup>5)</sup> ④古志本郷遺跡(出雲市)は神戸川左岸の自然堤防上及び後背湿地に位置する弥生～近世の集落遺跡である。35-6は塩町式系の甕である。35-7、8は朝鮮半島系土器の両耳付短頸壺で、森屋敷遺跡33-2と同様のものと思われる。また、北部九州系、畿内系の土器、さらに朝鮮半島由来の韓式三稜鏃も出土している。

<sup>6)</sup> このほか出雲平野では⑦白枝荒神遺跡や⑧下古志遺跡などで、朝鮮半島系土器は見られないものの塩町式系あるいは北部九州系や西瀬戸内沿岸部系の搬入土器が出土している。<sup>7)</sup>

<sup>8)</sup> ⑤タテチョウ遺跡(松江市)は松江市北東方向から大橋川に流れる朝酌川沿いにある弥生時代を中心とする縄文～中世の集落遺跡である。35-9は報告書では明記されていないものの沈線文間に刻目を持つ塩町式系の高坏の坏部分と考えられる。35-10は朝鮮半島系土器で、森屋敷遺跡33-2と同様の壺と思われる。上記の出雲市内の遺跡ほどの出土量ではないが、畿内系の土器の存在も報告されている。また、報告書で言及はされていないが、35-11は西部瀬戸内系の壺と思われる。

<sup>9)</sup> ⑥田和山遺跡(松江市)は宍道湖東岸の乃木段丘の一角を占める独立丘陵上に存在する弥生～平安時代にかけての集落遺跡である。35-12は報告書で明記されていないが、塩町式系の高坏と考えられ



第33図 森屋敷遺跡出土の塩町式系土器と朝鮮半島系土器



第34図 塩町式系土器と朝鮮半島系土器出土遺跡の分布図 (S=1/50,000)

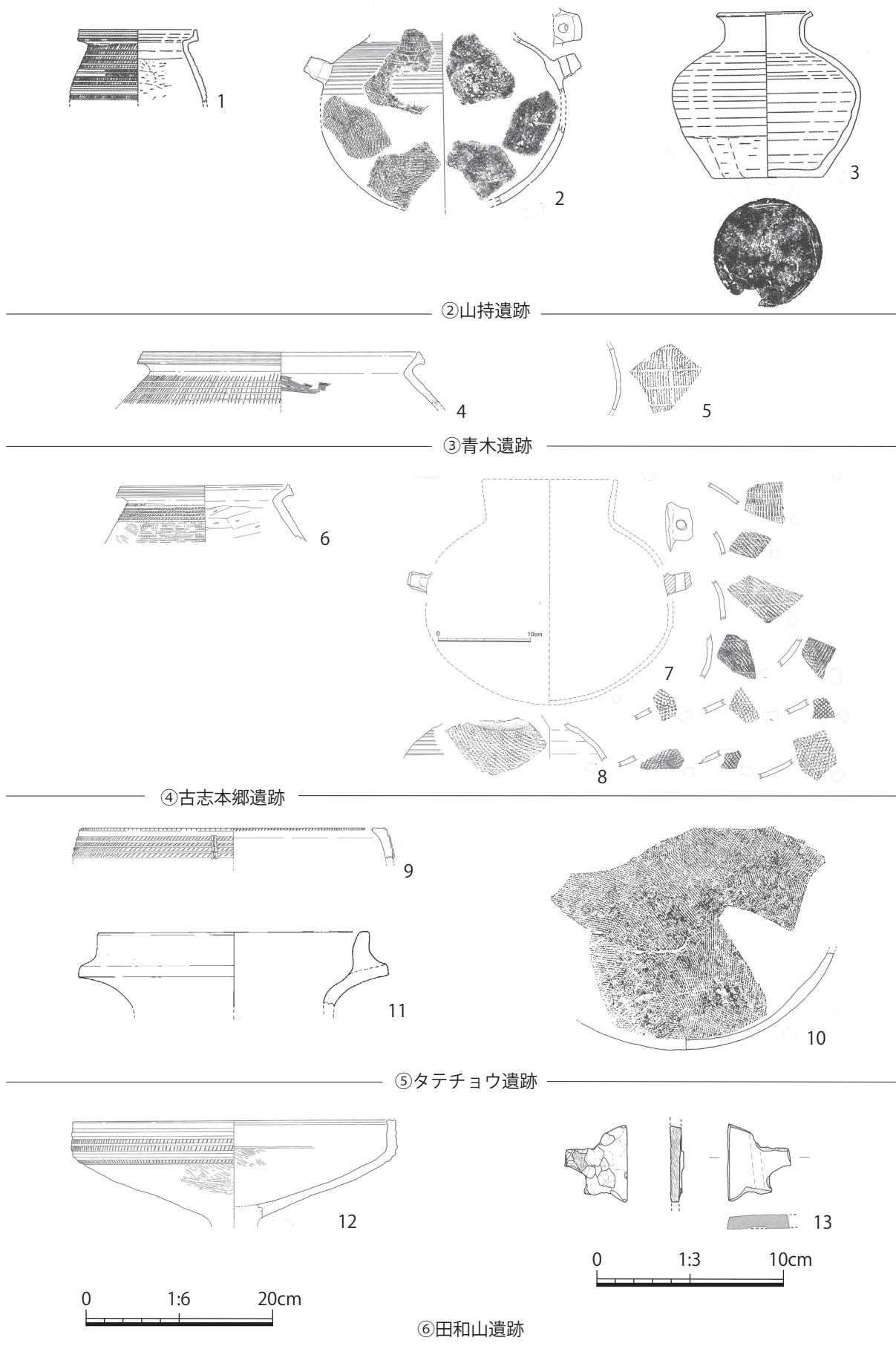
る。田和山遺跡では朝鮮半島系土器は出土していないものの、環濠内から出土した板状石製品35-13が楽浪の硯であることがわかっている。<sup>10)</sup>このように田和山遺跡でも少量ながら、他地域の土器が出土している。

このほか松江市内では、塩町式系土器は出土しないもの他地域との交流が覗える遺跡は、日本海沿岸に近い松江市鹿島町の⑨南講武草田遺跡、<sup>11)</sup>⑩堀部第3遺跡<sup>12)</sup>ぐらいであろうか。しかし、これらの遺跡については、地理的に宍道湖を介してではなく、日本海沿岸部から流入した可能性が高い。

このように見ていくと、現在確認できるところでは、日本海側から搬入されたと考えられる朝鮮半島系土器が出土する遺跡の南限は④古志本郷遺跡で、広島県北部からもたらされたと考えられる塩町式系土器が出土する遺跡の北限は⑤タテチョウ遺跡である。このことから、塩町式系土器と朝鮮半島系土器の両方を有する①から⑥の遺跡は、日本海側からと中国山地側からの文化が合流する交通の要衝として発達した遺跡と言えるのではないだろうか。ゆえに、これらの遺跡が弥生時代、遺跡によつては縄文時代から中世あるいは近世に至るまで継続して利用してきた事実は十分理解できる。

### 第3節 まとめ

今回調査をした森屋敷遺跡では、遺構の検出が困難であったが、弥生中期から近世にかけての遺物が出土し、そのなかでも弥生中期、中世の遺物が多く出土した。今回は明らかな中世の遺構は検出できていないものの、平成26年度に実施した宍道複合施設建設に伴う森屋敷遺跡の調査では、中世の遺物とともに屋敷の一部と考えられる掘立柱建物跡が検出されており、<sup>13)</sup>今回の調査地で多くの中世遺物が出土したことから、屋敷の存在を追認するデータが得られた。また、これまで森屋敷遺跡周辺で、弥生中期土器がこれほど多量に出土したのは、今回の森屋敷遺跡が初めてのことである。弥生中期土器には広島県北部から流入してきた塩町式系土器も含まれ、これより時期が下るもの朝鮮半島系土器が2点出土したことも弥生時代から古墳時代にかけて他地域との交流が伺える大きな成果を得た。



第35図 そのほかの遺跡出土の塩町系土器と朝鮮半島系土器（一部別のものも含む）

また、自然科学分析と遺物の組成の変化を捉まえる（第4章第1節）ことにより、中世以降、調査区2区から西側へ砂層が広がり宍道湖の南岸が北上していったことが明らかにできた。近世の宿場町はこの上に形成されたものである。

以上のように、森屋敷遺跡が古くから交通の要衝であったことが判明した。今後も周辺地域での類似資料の増加を期待したい。

註 1) 塩町式土器の特徴を有しつつ、胎土は在地のものと変わらないものもあり、必ずしも塩町式土器そのものが搬入されたわけではなく、塩町式土器の影響を受けて在地で作成されたものも含まれる可能性があるため、「塩町式系」と称している。  
増田浩太 2003「第3章 第5節まとめ 塩町式土器について」『-尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II -家の後I 遺跡 垣ノ内遺跡』国土交通省中国整備局 島根県教育委員会

註 2) 東山信治 2012「第6章 第3節 山持遺跡の非在地系土器について」『山持遺跡 Vol.8(6,7区) 国道431号道路(東林木バイパス)改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書10』島根県教育委員会

註 3) 米田美江子 1997「第3章 7.一考察 西瀬戸内系複合口縁壺」『市道松寄下小山線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -白枝荒神遺跡』出雲市教育委員会

註 4) 今岡一三 松尾充晶 2006「第18章 第1節 弥生・古墳時代の青木遺跡」『青木遺跡II 国道431号道路(東林木バイパス)改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書III』島根県教育委員会

註 5) 守岡利栄「第6章 3節 三韓系土器について」「第7章 まとめ」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XVII 古志本郷遺跡VI-K区の調査-』国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所 島根県教育委員会

註 6) 註3に同じ

註 7) 米田美江子 2002「第3章 第3節 搬入系遺物」『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書第12集 下古志遺跡 -考察編-』出雲市教育委員会

註 8) 柳浦俊一 1990「IV 第4~6層出土遺物の考古学的観察」『朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書 III』島根県土木部河川課 島根県教育委員会

註 9) 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2005『松江市文化財調査報告書第99集 田和山遺跡群発掘調査報告書1 田和山遺跡』

註 10) 岡崎雄二郎 2005「環濠内出土板状石製品について」松江市文化財調査報告書第99集 田和山遺跡群発掘調査報告書1 田和山遺跡』

註 11) 鹿島町教育委員会 1992『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡』

註 12) 赤澤秀則 2000「墓と海と -島根の弥生文化の一侧面-」『神々の源流 -出雲・石見・隠岐の弥生文化-』大阪府立弥生文化博物館

註 13) 松江市教育委員会 公益財団法人松江市スポーツ振興財団 2015『松江市文化財調査報告書第162集 宍道複合施設整備事業に伴う発掘調査報告書 森屋敷遺跡』

## 参考文献

### 1. について

豊島吉則 1975「山陰の海岸砂丘」『第四紀研究』14(4), 221-230.

### 2. について

亀田修一 2001「出雲・石見・隠岐の朝鮮系土器 -古墳時代資料を中心に-」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XII 蟹谷遺跡 上沢Ⅲ遺跡 古志本郷遺跡Ⅲ』国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所

寺井誠 2009「紀元前後から7世紀までの朝鮮半島系土器について」島根県埋文センター専門研修資料

表3 遺物観察表

試掘調査出土遺物

掘査番号	種類	器種	法量(cm)			調整・手法の特徴	色調	胎土	残存	備考
			口径	底径	器高					
6-1	土師器	甕	(34.0)	-	(5.35)	外ナデ、斜め方向のハケメ 内ナデ、ヘラケズリ	内外:浅黄褐色 10YR8/4	1mm前後の石英・長石・雲母を含む	口縁部～頸部 1/8	古墳中期
6-2	磁器	広東碗	-	-	(4.1)	外施釉、裏付 内:施釉	素地灰白色 N8/	密	1/3	肥前 九陶V期
6-3	土師器	高杯	-	(8.0)	(4.7)	外:明赤褐色 2.5YR5/6 内:橙色 5YR7/6	0.5mm以下の雲母を少量含む	脚部 1/5	古墳中期	
6-4	須恵器	高杯	-	-	(2.1)	内外:回転ナデ	1mm以下の石英・長石をわずかに含む	底部～体部 1/2	古墳後期	
6-5	土師器	甕	(28.0)	-	(4.3)	外ナデ、ハケメ 内ナデ、ヘラケズリ	内外:浅黄褐色 10YR8/3	密。 1mm以下の石英・長石を少量含む	口縁部～頸部 1/8以下	古墳後期～古代

試掘調査出土 石製品

掘査番号	種類	器種	法量(cm)			重量(g)	備考	
			口径	底径	器高			
6-6	石製品	石鉢	-	-	(20.2)	(7.9)	(1485)	内外面被熱

2区 遺物包含層出土遺物

掘査番号	種類	器種	法量(cm)			調整・手法の特徴	色調	胎土	残存	備考
			口径	底径	器高					
9-1	弥生土器	甕	-	-	(3.6)	外貝殻による沈線・斜線文 内:ハケ後ナデ	内外:暗灰黄色 2.5Y5/2	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	肩部 1/8以下	松本IV様式
9-2	弥生土器	甕	-	-	(5.7)	外:ハケメ、刺突文 内:斜め方向のハケメ	外:暗灰黄色 2.5Y4/2 内:浅黄色 2.5Y7/4～暗灰黄色 2.5Y4/2	0.5mm以下の石英・長石・雲母を少額含む	肩部 1/8以下	松本IV様式 弥生中期後葉
9-3	弥生土器	甕	-	-	(8.8)	外:ハケメ後斜杉文・斜線文 内:叢方向のハケメ	内外:明褐色 10YR7/6	2mm以下の石英・長石・雲母を含む	1/8以下	松本IV様式
9-4	弥生土器	甕	-	-	(6.9)	外:5条の凹線文・刺突文 内:横方向のハケメ、指頭圧痕	内外:暗色 2.5YR6/6	1～3mmの石英・長石・雲母を含む	1/8以下	弥生中期後葉
9-5	弥生土器	広口甕	(28.0)	-	(1.8)	外:3条の凹線文 内:3条の凹線文	内外:びい黄褐色 10YR7/3	密。 0.5mm以下の石英・長石・雲母を少額含む	口縁部 1/8以下	松本IV様式
9-6	弥生土器	広口甕	(31.4)	-	(1.95)	外:3条の凹線文 内:3条の凹線文	内外:浅黄褐色 10YR8/3	密。 0.5mm以下の石英・長石・雲母を含む	口縁部 1/8以下	弥生中期後葉
9-7	弥生土器	甕	(14.8)	-	(3.4)	外ナデ、1条の凹線文 内ナデ、横・斜め方向のハケメ	内外:浅黄褐色 10YR8/3	密。 0.5mm以下の石英・長石・雲母を少額含む	口縁部～肩部 1/8以下	松本IV様式
9-8	弥生土器	甕	(17.0)	-	(2.0)	外ナデ、2条の凹線文 内ナデ	内外:橙色 7.5YR6/6	密。0.5mm以下の石英・長石・雲母を少額含む	口縁部 1/8	松本IV様式
9-9	弥生土器	甕	(16.4)	-	(3.9)	外ナデ、叢方向のハケメ、3条の凹線文 内ナデ、斜め方向のハケメ	内外:びい黄褐色 10YR6/4	密。 0.5mm以下の石英・長石・雲母を少額含む	口縁部 1/8	松本IV様式
9-10	弥生土器	甕	(17.0)	-	(5.7)	外ナデ、叢方向のハケメ	内外:浅黄褐色 10YR8/3	密。 0.5mm以下の石英・長石・雲母を少額含む	口縁部～肩部 1/8以下	松本IV様式
9-11	弥生土器	甕	(10.6)	-	(4.2)	外:横ナデ、叢方向のハケメ、3条の凹線文 内:ナデ、横・縱方向のハケメ	外:暗色 2.5YR7/6 内:橙色 5YR6/6	1mm以下の石英・長石・雲母を若干含む	口縁部 1/6	松本IV様式
9-12	弥生土器	甕	(17.2)	-	(3.6)	外ナデ、3条の凹線文 内ナデ、斜め方向のハケメ	内外:浅黄褐色 10YR8/3	密。 0.5mm以下の雲母微量含む	口縁部～肩部 1/8	松本IV様式
9-13	弥生土器	甕	-	-	(3.9)	外:横ナデ、叢方向のハケメ後刺突文 内:横方向へラミガキ	内外:びい黄褐色 10YR7/4	1mm以下の石英・長石若干含む	1/8以下	松本IV様式
9-14	弥生土器	甕	(23.4)	-	(2.6)	外ナデ、2条の凹線文 内ナデ	内外:びい黄褐色 10YR7/4	密。 0.5mm以下の石英・長石・雲母を含む	口縁部～頸部 1/8以下	松本IV様式
9-15	弥生土器	甕	(24.6)	-	(4.6)	外ナデ、4条の凹線文 内ナデ	内外:浅黄褐色 10YR8/3	密。石英・長石・雲母少量含む	口縁部～頸部 1/8	松本IV様式
9-16	弥生土器	甕	(14.0)	-	(7.3)	外ナデ、3条の凹線文、貝の先端を用いた列点文 内ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕	外:暗灰黄色 2.5Y5/2 内:灰褐色 2.5Y7/2	密。1mm以下の石英・長石・雲母を少額含む	口縁部～体部 1/3	外外面に煤付着 松本IV様式 弥生中期後葉
9-17	弥生土器	甕	(22.8)	-	(11.0)	外:ハケメ後斜杉文、叢方向のハケメ、3条の沈線、 刺突文、粘土帶付け後刻目を施す 内:横ナデ、ハケメ、指頭圧痕	外:浅黄褐色 10YR8/3 内:にふい黄褐色 10YR6/3	密。1mm以下の長石と砂粒、 0.5mm以下の雲母を含む	口縁部～胴部 1/4弱	外外面に煤付着 松本IV様式 弥生中期後葉
10-1	弥生土器	高杯	-	(13.2)	(4.3)	外:2条の凹線文、刻目、8条の沈線 内:風化の為調整不明	内外:びい黄褐色 10YR7/4	1mm以下の石英・長石含む	脚部 1/8	松本IV様式
10-2	弥生土器	高杯	-	(12.2)	(3.15)	外:ヘラミガキ、3条の凹線文 内:ヘラケズリ	内外:浅黄褐色 10YR8/3	密。1mm以上の長石含む	脚部 1/8	松本V様式
10-3	弥生土器	甕	(14.0)	-	(5.1)	外ナデ、1条の凹線文 内ナデ、ヘラケズリ	内外:にふい橙色 7.5YR6/4	密。1mm前後の長石、0.5mm以下の雲母含む	口縁部～肩部 1/5	外外面に煤付着 松本V様式 弥生後期前葉
10-4	弥生土器	甕	(17.6)	-	(4.5)	外:ナデ、斜め方向のハケメ、2条の凹線文 内:ヘラケズリ、指頭圧痕	内外:にふい黄褐色 10YR7/4	密。1mm以下の石英・長石・雲母含む	口縁部～胴部 1/8	外外面に煤付着 松本IV様式
10-5	弥生土器	甕	(15.2)	-	(4.6)	外ナデ、3条の凹線文、刺突文 内ナデ、ヘラケズリ	内外:にふい黄褐色 10YR7/4	密。1mm以下の長石と砂粒、 0.5mm以下の雲母含む	口縁部～胴部 1/8	外外面に煤付着 松本V様式 弥生後期前葉
10-6	弥生土器	甕	-	-	(5.2)	外:5条の櫛描き文 内:ヘラケズリ	内外:にふい黄褐色 10YR6/3	1mm以下の石英・長石・雲母を若干含む	頸部～体部 1/8以下	外外面に煤付着 松本V様式
10-7	弥生土器	甕	(26.0)	-	(10.1)	外ナデ、横方向のハケメ、叢方向後横ハケ、2条の凹線文 内:にふい黄褐色 10YR6/4	外:にふい黄褐色 10YR7/3 内:にふい黄褐色 10YR6/4	密。1mm前後の石英・長石含む	口縁部～肩部 1/8	外外面に煤付着 松本V様式 弥生後期前葉
10-8	弥生土器	甕	-	(6.0)	(2.4)	外:ヘラミガキ 内:ヘラケズリ	内外:にふい黄褐色 10YR7/3	1mm以下の石英・長石・雲母含む	底面部 1/3	外外面に煤付着
10-9	弥生土器	垂か甕	-	(9.8)	(4.5)	外:ヘラミガキ 内:ヘラケズリ	内外:淡黄色 2.5Y8/4	2mm以下の石英・長石含む	底面部 1/5	
10-10	弥生土器	甕	(14.6)	-	(4.0)	内外:ナデ	内外:にふい黄褐色 10YR7/4	1mm以下の石英・長石若干含む	口縁部～胴部 1/8以下	外外面に煤付着 松本V様式
10-11	弥生土器	甕	(21.8)	-	(5.0)	内外:ナデ	内外:にふい黄褐色 10YR7/3	1mm以下の石英・長石若干含む	口縁部 1/8以下	外外面に煤付着 松田4～5期
10-12	土師器	甕	(14.4)	-	(4.2)	外:回転ナデ 内:回転ナデ、ヘラケズリ	外:黒色 10YR2/1 内:にふい黄褐色 10YR6/4	1mm以下の石英・白色砂粒含む	口縁部 1/6	古墳中期前半 松山II又是III期
10-13	土師器	甕	-	-	(6.2)	外:叢方向のハケメ	内外:にふい黄褐色 10YR7/4	2mm以下の石英・長石含む	頸部～体部 1/5	外外面に煤付着 古墳中期
10-14	土師器	甕	(17.0)	-	(4.2)	内外:ナデ	内外:にふい黄褐色 10YR7/4	密。1mm前後の長石、0.5mm以下の雲母含む	口縁部～胴部 1/8	外外面に煤付着 古墳中期
10-15	土師器	製塙土器か	(6.2)	-	(4.5)	外:横ナデ 内:横ナデ、叢・横・斜め方向のハケメ	内外:橙色 5YR6/6	1mm以下の砂粒若干含む	口縁部 1/4	古墳
10-16	須恵器	蓋	-	-	(3.0)	外:ケズリ 内:回転ナデ	内外:灰色 N4/	1mm以下の長石わずかに含む	1/3	古墳中期
10-17	須恵器	高杯	(17.0)	-	(4.65)	外ナデ、波状文 内ナデ	内外:灰色 N6/	密	口縁部～体部 1/8	須恵器 古墳中期
10-18	須恵器	高杯	-	(9.0)	(4.5)	内外:ナデ	内外:にふい黄褐色 10YR7/4	密。1mm前後の長石微量含む	脚部 1/4弱	須恵器 古墳中期
10-19	須恵器	甕	-	-	(5.2)	外:格子タタキ 内:同心円タタキ	内外:灰色 N6/	1mm以下の長石若干含む	1/8以下	古墳
11-1	土師器	甕	(23.0)	-	(4.0)	外ナデ、叢・斜め方向のハケメ 内ナデ、ヘラケズリ	外:浅黄褐色 10YR8/3 内:にふい橙色 7.5YR7/4	密。1mm以下の石英・長石・雲母少額含む	口縁部～頸部 1/8以下	古墳後期末奈良
11-2	土師器	甕	(10.0)	-	(3.2)	外ナデ	内外:灰白色 2.5Y7/1	1mm以下の長石少量含む	口縁部～胴部 1/4	奈良か 古代 都城のものに類似
11-3	土師器	無高台环	(13.3)	-	(4.1)	外回転ナデ、ヘラケズリ 内回転ナデ、放射状の暗文	内外:橙色 5YR7/8	1mm以下の石英・長石若干含む	口縁部 1/6	古代(7c後葉～末か)
11-4	土師器	高台付碗	(10.4)	(5.4)	3.4	外回転ナデ、貼付高台 内回転ナデ	内外:浅黄褐色 7.5YR8/6	密	1/8以下	黒色土器碗または瀬戸内沿岸部の土師質土器碗 中世前半か
11-5	土師器	高台付甕	-	(6.0)	(3.4)	内外:回転ナデ	内外:浅黄褐色 10YR8/3	1mm以下の石英・長石・雲母若干含む	1/4～1/5	国府第6型式(9c中葉～後葉)
11-6	須恵器	鉢	-	-	(2.2)	内外:ナデ	内外:灰白色 N6/	2mm以下の長石わずかに含む	1/8以下	東播系 中世前半
11-7	須恵器	甕	-	-	(3.5)	内外:ナデ、内:ハラミガキ	内外:黄灰色 2.5Y6/1	0.5mm以下の長石含む	1/8以下	中世
11-8	陶器	甕	(35.6)	-	(2.55)	内外:ナデ	内外:暗赤色 2.5YR3/2 内:にふい赤褐色 2.5YR4/3	密	口縁部 1/5	武器系 6型式(13c中～後半)
11-9	陶器	甕	-	-	(1.9)	内外:ナデ	内外:褐色 7.5YR4/4	密	口縁部 1/8以下	武器系 5型式(1220～1250)

遺物観察表

11-10	陶器	甕	(30.0)	(6.3)	内外・ナデ	内外・暗褐色 7.5YR3/3	密。1mm以下の長石少量含む	口縁部～頸部 1/8以下	陶器系 7～8型式(14c代)
11-11	陶器	甕	(38.4)	(4.8)	内外・ナデ	内外・暗褐色 2.5YR3/4～ にぶい赤褐色 5YR4/3	0.5mm以下の石英・長石含む	口縁部 1/8以下	陶器系 8型式(1350～1400年)
11-12	青磁	直口碗	-	-	(4.35)	内外・施釉	内外・オーリーブ灰色 10Y5/2	密	口縁部～体部 1/8以下
11-13	土師器	皿	(6.9)	(3.2)	1.6	外・指頭圧痕 内・ナデ	内外・浅黄褐色 7.5YR8/3	0.5mm程度の石英・長石少量含む	1/4
11-14	土師器	皿	(8.0)	(4.0)	1.5	外・指頭圧痕 内・ナデ、ナデ上げ、指頭圧痕	内外・浅黄褐色 7.5YR8/4	1mm以下の石英・長石少量含む	口縁部～底部 1/4 手づくね
11-15	土師器	皿	(8.0)	(4.2)	1.4	外・ナデ、指頭圧痕 内・ナデ上げ	内外・浅黄褐色 7.5YR8/3	0.5mm以下の石英・長石少量含む	口縁部～底部 1/4弱 手づくね
11-16	土師器	皿	(11.1)	(6.0)	1.9	外・横ナデ、指頭圧痕 内・ナデ	内外・浅黄褐色 7.5YR8/4	1mm以下の石英・長石少量含む	1/2 外面に黒斑 手づくね
11-17	土師器	皿	(11.3)	(5.7)	2.0	外・横ナデ、指頭圧痕 内・ナデ	内外・浅黄褐色 7.5YR8/4	0.5mm以下の石英・長石含む	1/5 内面に黒斑 手づくね
11-18	土師器	皿	(7.6)	(5.8)	1.2	内外・回転ナデ	外・灰白色 2.5Y8/2 内・にぶい黄褐色 2.5Y5/3	1mm以下の長石、わずかに雲母含む	1/4 手づくね
11-19	土師器	皿	(7.6)	5.4	1.15	外・系切後ナデ 内・ナデ	内外・浅黄褐色 7.5YR8/4	0.5mm以下の雲母微量含む	底部のみ完形
11-20	土師器	皿	(8.1)	(6.9)	1.05	外・系切後ナデ 内・ナデ	内外・灰白色 10YR8/2	0.5mm以下の雲母少量含む	口縁部～底部 1/4 内外面に煤付着
11-21	土師器	皿	(8.2)	(6.3)	1.4	外・系切後ナデ 内・ナデ	内外・浅黄褐色 10YR8/4	0.5mm以下の長石わずかに含む	1/5
12-1	朝鮮系	壺	-	-	(5.0)	外・格子タタキの後沈線を施す摩打の為、 沈線浅くなっている 3条・10条の沈線 内・丁寧なナデ仕上げ	内外・灰黄色 2.5Y7/2	0.5mm程度の石英若干含む 0.5mm以下の長石含む	1/8以下 弥生後期～古墳前期初頭頃

2区 遺物包含層出土遺物 金属製品

掲載番号	種類	器種	法量(cm)			重量(g)	備考
			最大長	最大幅	厚さ		
13-1	金属製品	帶金具か	-	8.5	2.4	1.1	28.35
13-2	金属製品	鉄釘	-	8.15	1.5	1.1	16.50
13-3	金属製品	鉄釘	-	6.05	1.2	1.15	18.80

1区 遺物包含層出土遺物

掲載番号	種類	器種	法量(cm)		調整・手法の特徴	色調	胎土	残存	備考	
			口径	底径						
14-1	弥生土器	壺	-	-	(6.4)	外・縱・横方向のヘラミガキ、ヘラによる羽状文 内・斜め方向のハケメ、ハケメ後ナデ	外・浅黄褐色 10YR8/4～浅黄褐色 7.5YR8/6 内・褐灰色 10YR5/1	1mm程度の石英・長石、 0.5mm以下の雲母含む	脣部 1/4弱	松本I様式 弥生前期
14-2	弥生土器	無頭壺	(11.0)	-	(3.7)	外・ヘラによる顧歛文、3条・6条の沈線 内・ナデ、横方向のヘラミガキ、2条の凹線文	外・にぶい黄褐色 10YR7/4 内・灰黄色 10YR6/2	0.5mm以下の石英・長石・雲母含む	口縁部 1/4	円孔2点 松本IV様式 弥生中期後葉
14-3	弥生土器	短頸壺	(7.0)	-	(3.3)	外・窓方向の粗い目のハケメ、原体を押し引きして 2条の凹線を施している 内・ケズリ後ナデ	外・稍褐色 5YR6/6 内・淡黄色 2.5Y8/4	1mm以下の石英、0.5mm以下の長石・雲母含む	口縁部～肩部 1/6	松本III～IV様式 弥生中期
14-4	弥生土器	小形鉢か	-	-	(5.0)	外・窓方向の粗い目のハケメ、原体を押し引きして 2条の凹線を施している 内・ケズリ後ナデ	外・褐灰色 7.5YR4/1～浅黄褐色 7.5YR8/6 内・灰黄色 10YR5/2	0.5mm以下の長石・雲母、石英少量含む	1/8以下	松本IV様式 弥生中期後葉
14-5	弥生土器	壺か甕	-	-	(3.5)	外・2条の凹線文、ハケメ工具による斜線文 内・ナデか	外・稍褐色 5YR6/6～にぶい橙色 5YR7/4 内・橙色 2.5YR6/8	0.5mm程度の石英・長石含む	1/8以下	松本IV様式 弥生中期後葉
14-6	弥生土器	壺か甕	-	-	(5.1)	外・外全体に縱方向のハケメを施したのち文様が入れられ れている。1条の凹線、横3列の刺突文、横2列の轟線文 内・斜めハケメ、斜めハケのナデ	外・にぶい橙色 5YR7/4 内・橙色 2.5YR6/6	0.5mm以下の石英・長石含む	脣部 1/8以下	松本IV様式 弥生中期後葉
14-7	弥生土器	壺か鉢	-	-	(5.8)	外・ナデ、ハケ工具による斜線文、横方向の沈線 内・横ハケのナデ	外・淡褐色 5YR8/4 内・橙色 5YR7/6	0.5mm程度の石英・長石含む	1/8以下	松本IV様式 弥生中期後葉
14-8	弥生土器	壺	-	-	(5.0)	外・斜め縱方向のハケメ、刻目突帯、3条の横凹線 内・ナデ、斜め・縱方向のハケメ	外・浅黄色 2.5Y7/4 内・暗紅色 2.5Y4/2	0.5mm程度の石英・長石含む	脣部 1/8以下	松本IV様式 弥生中期後葉
14-9	弥生土器	広口壺	(33.0)	-	(4.9)	外・窓・横方向のハケメ、4条の凹線文 内・横方向のハケメ後ナデは櫛描き直線文、5条の凹線文	外・にぶい橙色 7.5YR6/4	密。1mm以下の長石・雲母含む	口縁部～頸部 1/8以下	松本IV様式 弥生中期後葉
14-10	弥生土器	広口壺	(35.4)	-	(5.8)	外・横方向のハケメ後ナデ、縱方向のハケメ、4条の凹線文 内・にぶい黄褐色 10YR7/3	1mm程度の石英、1mm以下の長石・雲母含む	口縁部 1/4	松本IV様式 弥生中期後葉	
14-11	弥生土器	長頸壺	(33.0)	-	(9.7)	外・横方向のハケメ、4条の凹線文 内・斜め・横方向のハケとナデ、5条の沈線文	外・浅黄色 2.5Y7/4～黒褐色 2.5Y3/2 内・浅黄色 2.5Y7/4	1mm以下の石英・長石・雲母含む	口縁部～頸部 1/8	松本IV様式 弥生中期後葉
14-12	弥生土器	広口壺	-	-	(5.7)	外・全体に縱方向のハケメ後ナデ、8条の凹線文・6列の列点文 内・横方向のハケメ後ナデ	1mm以下の石英・長石・雲母含む	1/8以下	松本IV様式 弥生中期後葉	
14-13	弥生土器	壺	(17.0)	-	(5.3)	外・ハケメ後ナデ、3条・5条の凹線文 内・ナデ、斜め方向のハケメ	外・橙色 7.5YR7/6	1mm以下の長石多く含む 0.5mm以下の石英・雲母少量含む	口縁部～頸部 1/6	内外面に煤付着 松本IV様式 弥生中期後葉
14-14	弥生土器	壺	(23.4)	-	(4.2)	外・ナデか、4条の凹線文 内・ナデ	外・橙色 2.5YR6/6	1mm以下の石英・長石・雲母含む	1/8以下	松本IV様式 弥生中期後葉
14-15	弥生土器	広口壺	-	-	(6.8)	外・4条の沈線 内・横方向のハケメ、指頭圧痕	外・にぶい橙色 10YR8/3	2mm以下の石英・長石含む	1/8以下	松本IV様式 弥生中期後葉
14-16	弥生土器	壺	-	-	(4.3)	外・ヘラによる羽状文 内・横方向のハケメ後ナデ、斜め方向のハケメ後ナデ	外・灰褐色 10YR5/2	1mm以下の石英、0.5mm以下の長石・雲母含む	1/8以下	松本IV様式 弥生中期後葉
14-17	弥生土器	広口壺	-	-	(9.8)	外・窓方向のハケメ後ナデ、5点の列点文 内・斜め方向のハケメ	外・にぶい橙色 10YR7/3～褐色 10YR5/1	1mm以下の石英少量化、0.5mm以下の石英・雲母少量含む 0.5mm以下の長石・雲母含む	口縁部～頸部 1/8以下	内外面に煤付着 松本IV様式 弥生中期後葉
15-1	弥生土器	広口壺	-	-	(11.3)	外・綾杉文、3条・4条の沈線 内・ナデ	外・にぶい黄褐色 10YR6/3 内・にぶい橙色 7.5YR7/4	1mm以下の石英・長石・雲母含む	脣部 1/8以下	松本IV様式 弥生中期後葉
15-2	弥生土器	壺か甕	-	-	(4.8)	外・沈線文の間に刻目 内・ハケメ後ナデ	外・浅黄色 10YR8/4 内・橙色 7.5YR7/6	1mm以下の石英・長石含む	1/8以下	埴町式系 弥生中期後葉
15-3	弥生土器	甕	-	-	(4.3)	外・窓方向のハケメ、斜突文、7列の列点文 内・斜め方向のハケメ後ナデ、斜め方向のハケメ	外・にぶい橙色 7.5YR7/3～褐色 7.5YR5/2	1mm以下の石英少量化、0.5mm以下の長石・雲母含む 0.5mm以下の石英・長石・雲母含む	1/8以下	松本IV様式 弥生中期後葉
15-4	弥生土器	壺か甕	-	-	(4.1)	外・窓方向のハケメ後ナデ、4条の沈線文 内・ナデ	外・浅黄色 7.5YR7/6～6～褐色 7.5YR5/2	0.5mm程度の石英・長石含む	1/8以下	松本IV様式 弥生中期後葉
15-5	弥生土器	甕	-	-	(13.2)	外・窓方向のハケメ、8列の刺突文 内・窓方向のハケメ後ナデ、4条の沈線文 内・ナデ	外・淡黄色 2.5Y8/4～暗紅色 2.5Y4/2 内・黃灰色 2.5Y4/1～黃褐色 2.5Y5/3	1mm以下の石英・長石・少量の雲母含む	1/8以下	松本IV様式 弥生中期後葉
15-6	弥生土器	甕	-	-	(8.1)	外・窓方向のハケメ、横2～3列の刺突文 内・ナデ	外・浅黄色 2.5Y7/4～黃褐色 2.5Y4/1 内・暗紅色 2.5Y7/4	1mm以下の石英・長石・少量の雲母含む	脣部 1/8以下	松本IV様式 弥生中期後葉
15-7	弥生土器	甕	-	-	(7.3)	外・ヘラミガキ、横3～7列の刺突文 内・窓方向のハケメ	外・黑褐色 2.5Y3/1 内・暗紅色 2.5Y5/2～にぶい黄色 2.5Y6/4	1mm以下の石英・長石含む	1/8以下	松本IV様式 弥生中期後葉
15-8	弥生土器	甕	-	-	(6.2)	外・窓・斜め方向のハケメ、斜めの刺突文 内・斜め方向のハケメ	外・淡黄色 2.5Y8/3 内・にぶい黄褐色 10YR7/4	1mm以下の石英、0.5mm以下の長石含む	脣部 1/8以下	松本IV様式 弥生中期後葉
15-9	弥生土器	甕	-	-	(7.8)	外・窓方向のハケメ若干残る、斜めの列点文 内・斜め方向のハケメ	外・灰褐色 2.5Y7/2～黃褐色 2.5Y4/1 内・暗紅色 2.5Y5/2	0.5mm以下の石英・長石・少量の雲母含む	脣部 1/8以下	松本IV様式 弥生中期後葉
15-10	弥生土器	甕	(19.0)	-	(3.4)	外・ナデ、ハケメ後ナデ、2条の凹線文 内・ナデ	外・浅黄色 10YR8/3	0.5mm以下の石英・長石・雲母少量含む	口縁部～頸部 1/8以下	松本IV様式 弥生中期後葉
15-11	弥生土器	甕	(18.4)	-	(5.1)	外・ナデ、窓・横方向のハケメ、横方向のナデ消し、 3条の凹線文 内・ナデ	外・にぶい黄褐色 10YR6/4	0.5mm以下の長石・雲母少量含む	口縁部～頸部 1/8以下	外に煤付着 松本IV様式 弥生中期後葉
15-12	弥生土器	甕	(9.0)	-	(5.8)	外・ナデ、窓方向のハケメ後ナデ、窓方向のハケメ、木目のある原 体による刺突文 内・横方向のハケメ後ナデ、横方向のハケメ	外・にぶい黄褐色 10YR6/4	0.5mm以下の石英・長石・雲母含む	口縁部～頸部 1/4	松本IV様式 弥生中期後葉
15-13	弥生土器	甕	(14.8)	-	(5.2)	外・ナデ、窓・横方向のハケメ、4条の凹線文 内・横ナデ、ナ・ナメ方向のハケメ	外・浅黄色 7.5YR8/6	0.5mm以下の雲母少量含む	口縁部～頸部 1/8以下	松本IV様式 弥生中期後葉
15-14	弥生土器	甕	-	-	(6.2)	外・横方向のハケメ後ナデ、横方向のハケメ	外・黑褐色 2.5Y3/1～黃褐色 2.5Y4/1 内・にぶい黄褐色 10YR7/3	0.5mm以下の石英・長石・雲母含む	1/8以下	松本IV様式 弥生中期後葉

15-15	弥生土器	甕	(13.2)	-	(1.7)	外:3条の四線文、刺突文 内:ナデ、ハラケズリ後ナデ、斜め方向のハケメ、指頭圧痕文様、3条以上の四線文、3列の列点文	内外にぶい黄橙色 10YR7/4	密・0.5mm以下の長石少量含む	口縁部 1/8以下	外面に煤付着 松本IV様式 弥生中期後葉
15-16	弥生土器	甕	-	-	10.4)	外:ナデ、ハラケズリ後ナデ、斜め方向のハケメ、指頭圧痕文様、3条以上の四線文、3列の列点文 内:ナデ、ハラケズリ後ナデ	外:灰黄色 2.5Y6/2～灰白色 2.5Y8/2 内:稍黄色 2.5Y5/2～灰白色 2.5Y8/2	1～2mmの石英、0.5mm以下 の長石・雲母含む	1/8以下	松本IV様式 弥生中期後葉
16-1	弥生土器	壺か甕	-	(5.3)	(3.1)	外:ヘルミガキ 内:ヘルケズリ	外:灰褐色 10YR5/2 内:にぶい黄橙色 10YR7/2	1mm程度の石英、0.5mm以下 の長石・雲母含む	底部 約1/2	
16-2	弥生土器	壺か甕	-	(5.6)	(3.3)	外:ヘルミガキ 内:ヘルケズリ	内外にぶい黄橙色 10YR7/4 外:ヘルミガキ 内:ヘルケズリ	やや細い、微量の石英・長石、 多量の雲母含む	体部～底部 1/4	
16-3	弥生土器	壺か甕	-	(5.2)	(2.3)	外:浅黄色 10YR8/3 内:灰白色 10YR8/2	1mm程度の石英、0.5mm以下 の長石・雲母含む	底部 約1/2		
16-4	弥生土器	高杯	-	(12.0)	(6.4)	外:2条×5条・3条の波線 内:ナデ、横方向のヘルケズリ	外:にぶい黄橙色 10YR7/3 内:浅黄色 10YR8/4	1mm以下の石英・長石・雲母 含む	脚部 1/3	松本IV様式 弥生中期後葉
16-5	土師器	甕	(15.8)	-	(5.9)	外:ハゲメ 内:ナデ、ヘルケズリ	内外:黄橙色 10YR8/6 内:ナデ、ヘルケズリ	1mm以下の石英・長石・雲母 含む	口縁部～頸部 1/8	古墳中期
16-6	土師器	甕	(16.8)	-	(4.9)	外:風化の為調整不明 内:ナデ、ケズリ	外:にぶい黄橙色 10YR7/3～黒褐色 10YR3/1 内:にぶい橙色 7.5YR6/4	1mm以下の石英・長石・雲母 含む	1/8以下	古墳中期
16-7	土師器	甕	(15.6)	-	(4.7)	外:ナデ 内:ナデ、ヘルケズリ	内外:橙色 5YR6/6	密・1mm前後の長石、0.5mm 以下の雲母含む	口縁部～肩部 1/8以下	古墳中期
16-8	土師器	甕	(19.0)	-	4.25	内外:ナデ	内外にぶい黄橙色 10YR7/4	密・1mm以下との長石、0.5mm 以下の雲母少量含む	口縁部～頸部 1/8以下	複合口縁 古墳中期 松山編年Ⅱ～Ⅲ期
16-9	土師器	高杯	-	-	(4.4)	外:ナデ、ヘルミガキ 内:ナデ、ハケメ	内外:橙色 5YR6/8	密・0.5mm以下の雲母多く含 む	杯部1/3	古墳中期
16-10	須恵器	环身	(11.6)	-	(3.5)	内外:回転ナデ	内外:灰色 5Y6/1	1mm以下の石英・長石少量含 む	口縁部～胴部 1/8以下	古墳後期 出雲5～6期(7c代)
16-11	須恵器	蓋	-	-	(2.2)	外:回転ナデ、回転ケズリ 内:回転ナデ	内外:灰色 N6	0.5mm以下の石英・長石少量 含む	1/8	古墳 出雲b・c期 (7c中期～第3四半期)
16-12	須恵器	环身	(9.0)	(3.4)	3.6	外:回転ナデ、ヘルケズリ 内:回転ナデ	内外:灰白色 2.5Y7/1	密	1/4	古墳後期 出雲6期(7c代)
16-13	須恵器	無蓋高杯	(14.0)	-	4.75	内外:回転ナデ	外:褐灰色 10YR4/1 内:黄色 2.5Y5/1	1mm以下の石英・長石少量含 む	口縁部～胴部 (脚部欠け)1/8	古墳後期 出雲5～6期(7c代)
16-14	須恵器	甕	-	-	(4.1)	外:平行タキ 内:同心円タキ	外:灰色 5Y4/1 内:灰色 10Y5/1	0.5～3mmの石英、1mm以下 の長石含む	1/8以下	古墳
16-15	須恵器	無高台杯	-	(6.0)	(1.6)	外:回転系切痕	内外:灰色 10Y6/1	0.5mm以下の石英・長石少量 含む	底部1/6	古代 国府第6型式(9c中葉～後葉)
16-16	土師器	足高台付环	-	-	(2.0)	内外:ナデ	内外:橙色 7.5YR7/6	0.5mm以下の長石・雲母少量 含む	1/8以下	古代 国府第7～8型式(10c～11c前半)
16-17	青磁	碗	(16.0)	-	2.75	外:施釉、錦井弁文 内:施釉	外:オリーブ灰色 2.5GY6/1 明オリーブ灰色 2.5GY7/1 内:オリーブ灰色 2.5GY6/1	密	口縁部 1/8以下	龍泉窯系 1.5類(13c前半)
16-18	須恵器	甕	-	-	(6.5)	外:平行タキ 内:同心円タキ	外:暗褐色 N3/ 内:灰色 N4/	0.5mm以下の長石少量含む	1/8以下	中世
16-19	陶器	おろし皿	-	-	1.75	外:回転ナデ 内:6条の攝り目	外:灰白色 2.5Y7/1 内:灰白色 5Y8/2	密	底部 1/8以下	古瀬戸 後期 I～IV期(14c後半～15c代)
16-20	陶器	直線大皿	(24.5)	-	(5.5)	内外:施袖	内外:浅黄色 5Y7/3	密	口縁部 1/8	古瀬戸 後期 II～III期(15c代)
16-21	陶器	甕	-	(16.6)	(3.4)	内外:ナデ	内外:褐灰色 7.5YR5/1	1mm以下の砂粒含む	底部 1/8以下	食器系
16-22	土師器	高杯	(12.4)	-	(4.6)	内外:ナデ	内外:橙色 7.5YR7/6	2mm以下の石英・長石含む	口縁部～体部 1/8	八幡編年 中世II期(12～13c)
16-23	土師器	环か皿	-	5.4	(1.1)	外:回転ナデ、回転系切痕 内:回転ナデ	内外:黄橙色 10YR8/6	0.5mm以下の石英・長石・雲 母少量含む	底部のみ完形	
16-24	土師器	皿	(11.0)	(6.4)	3.4	外:回転ナデ、回転系切痕 内:回転ナデ	内外:橙色 7.5YR6/8	0.5mm以下の石英・長石・雲 母少量含む	1/8	島根中世IV期(16c代)
16-25	土師器	皿	-	(5.6)	(1.1)	外:回転ナデ、回転系切痕 内:回転ナデ	内外:浅黄橙色 7.5YR8/6	1mm以下の石英・長石少量含 む	底部～体部 1/4	
16-26	土師器	皿	-	(6.0)	(1.2)	外:回転ナデ、回転系切痕 内:回転ナデ	内外:橙色 7.5YR7/6	1mm以下の石英・長石・雲母 含む	底部～体部 1/4	
17-1	朝鮮系	高台付碗	11.2	8.4	8.1	外:ナデ、2条の波線 内:ナデ	内外:灰色 N6/	0.5～5mmの石英少、1mm 以下の長石含む	2/3	朝鮮平島系土器 6c末～7c初

## 1区 1面より上層出土 金属製品

掲載番号	種類	器種	法量(cm)			重量(g)	備考
			最大長	最大幅	厚さ		
18-1	金屬製品	鉄釘	6.5		1.55	1.1	17.72

## 1区 1面 遺構に伴う遺物

掲載番号	遺構名	種類	器種	法量(cm)			調整・手法の特徴	色調	胎土	残存	備考
				口径	底径	高さ					
21-1	SK01	須恵器	蓋	(10.8)	-	(3.2)	外:回転ナデ、ヘルケズリ後ナデ 内:回転ナデ	内外:灰白色 7.5Y5/1	0.5mm以下の長石わずかに 含む	口縁部～胴部 1/6	古墳後期 出雲5～6期(7c代)
21-2	SK01	須恵器	环身	(11.0)	-	(1.6)	外:回転ナデ	外:灰色 7.5Y4/1 内:灰色 10Y5/1	密	口縁部 1/8以下	古墳後期 出雲5～6期(7c代)
21-3	SK01	磁器	蓋	(10.0)	(5.1)	2.6	外:染付：竹葉文 内:施袖	素地:灰白色 N8/	密	蓋部 1/3	広東碗 肥前 九胸V期(19c)
21-4	SK05	陶器	甕	-	-	(4.9)	内外:ナデ	外:灰色 N5/ 内:灰褐色 7.5YR5/2	1mm以下の石英・長石含む	口縁部～脚部 1/8以下	食器系 5型(13c前半)
21-5	SK05	陶器	甕	-	-	(5.0)	内外:ナデ	外:灰色 5Y5/1 内:にぶい黄色 2.5Y6/3	2mm以下の石英・長石含む	頸部 1/8以下	食器系 5型(13c前半)
21-6	P4	陶器	鉢	(16.2)	8.8	5.7	外:施袖	内外:灰白色 2.5Y8/1	密	1/2	在地 (古志名)
23-1	SK08	磁器	皿	-	-	(3.4)	外:施袖	内外:灰白色 N8/1	密	底部～体部 1/4	大宰府編年 IV類 (11c末～12c後葉)
25-1	SK12	須恵器	甕	-	-	(8.2)	外:格子目タキ 内:同心円タキ	内外:灰白色 N8/	1mm以下の石英・長石含む	1/8以下	中世
25-2	SK13	須恵器	甕	-	-	(3.7)	外:格子目タキ 内:同心円タキ	内外:灰白色 N7/	0.5mm以下の長石少量含む	1/8以下	古墳
25-3	SK13	須恵器	甕	-	-	(7.3)	外:格子目タキ 内:同心円タキ	内外:黄灰色 2.5Y6/1	1mm以下の長石含む	1/8以下	古墳

## 1区 1面 遺構に伴う遺物 土製品

掲載番号	遺構名	種類	器種	法量(cm)			重量(g)	備考
				最大長	最大幅	厚さ		
23-2	P9	土製品	羽口	(4.0)		(3.2)	(2.5)	(16.11) 外径:4.0cm 内径:1.4cm
25-4	SK13	土製品	土鍤	4.6			内径0.25	1.47

掲載番号	種類	器種	法量(cm)			調整・手法の特徴	色調	胎土	残存	備考
			口径	底径	高さ					
26-1	弥生土器	高杯	(16.0)	-	(2.2)	外:ナデ、四線文 内:ヘルケズリ	内外:浅黄橙色 10YR8/4	1mm以下の石英・長石・雲 母含む	脚部 1/8以下	弥生
26-2	須恵器	甕	-	-	(4.2)	外:平行タキ 内:同心円タキ	内外:灰白色 N5/	0.5mm程度の長石含む	1/8以下	古墳
26-3	土師器	环	(9.2)	-	(2.9)	外:回転ナデ 内:ナデ	内外:浅黄橙色 10YR8/3	0.5mm以下の長石・雲母含 む	口縁部～胴部 1/8以下	古代末か
26-4	土師器	高台付 环	-	(5.3)	(2.8)	外:回転ナデ 内:ナデ	内外:浅黄橙色 10YR8/4	0.5mm以下の石英・長石・雲 母少量含む	底部～胴部 2/5	古代末か
26-5	土師器	高台付 环	-	(6.4)	(1.3)	外:ナデ	内外:浅黄橙色 7.5YR8/3	0.5mm以下の雲母を少量含 む	底部 1/4	中世
26-6	須恵器	甕	-	-	(3.3)	外:格子目タキ 内:ナデ	外:褐灰色 10YR5/1 内:灰白色 5Y7/1	1mm以下の石英・長石含む	1/8以下	中世
26-7	陶器	瓶子	-	-	(3.0)	外:施袖 内:指頭圧痕	外:オリーブ黄色 7.5Y6/3 内:灰白色 10Y7/1	密	頸部～肩部 1/8以下	古瀬戸
26-8	陶器	甕	-	-	(4.3)	内外:回転ナデ	内外:耐水褐色 5YR3/4	0.5～1mmの石英・長石含む	頸部～肩部 1/8	食器系

遺物観察表

26-9	陶器	甕	-	(5.4)	外:施釉 内:ナデ	外:オリーブ黄色 5Y6/4 内:暗褐色 7.5YR3/3	密	頸部 1/8以下	壺器系 常滑7型式(14c前半)
26-10	陶器	鉢	(31.2)	-	(6.8)	内外:ナデ	内外:暗褐色 7.5YR3/3	1mm前後の石英・長石を少 量含む	口縁部~胴部 1/8
26-11	陶器	擂鉢	(34.2)	-	(7.1)	外:回転ナデ 内:回転ナデ、5本以上の撲目	内外:暗褐色 5YR3/4	密	口縁部 1/8
26-12	土師器	壺	-	(5.0)	(3.4)	外:回転ナデ、回転糸切痕 内:回転ナデ	内外:浅黄褐色 7.5YR8/4	石英・長石を若干含む	八峰編年 中世Ⅲ期(13c~14c)
26-13	土師器	皿	-	(5.0)	(2.3)	外:回転ナデ、回転糸切痕 内:回転ナデ	内外:浅黄褐色 10YR8/3	0.5mm以下の石英・長石含 む	底面~全体 1/5
26-14	土師器	壺	-	(5.1)	(2.2)	外:回転ナデ、回転糸切痕 内:回転ナデ	内外:浅黄色 2.5Y8/3	0.5mm以下の石英・長 石・雲母含む	底部~胴部 2/5
26-15	土師器	壺	12.0	6.8	3.4	外:灰白色 10YR8/2 内:浅黄褐色 10YR8/3	1mm前後の石英・砂粒を若 干含む	1mm前後の石英・砂粒を若 干含む	八峰編年 中世Ⅲ期(13c~14c)
26-16	土師器	壺	12.0	6.2	3.3	外:回転ナデ、回転糸切痕 内:回転ナデ	内外:浅黄褐色 10YR8/3	1mm程度の石英・砂粒を若 干含む	完形 八峰編年 中世Ⅲ期(13c~14c)
26-17	土師器	壺	11.9	7.0	3.5	外:回転ナデ、回転糸切痕 内:回転ナデ	内外:浅黄褐色 10YR8/3	1mm前後の石英・砂粒を若 干含む	完形 八峰編年 中世Ⅲ期(13c~14c)
26-18	土師器	皿	(7.2)	(5.6)	1.6	外:回転ナデ、回転糸切痕、条線 内:回転ナデ	内外:橙色 5YR6/6	長石を若干含む	1/3
26-19	土師器	皿	(7.4)	5.8	1.5	外:回転ナデ、回転糸切痕、条線 内:回転ナデ	内外:橙色 5YR6/8	黒・赤色の砂粒を若干含む	2/5
26-20	土師器	皿	(7.6)	(6.2)	1.6	外:回転ナデ、回転糸切痕 内:回転ナデ	外:橙色 5YR6/6 内:橙色 5YR7/8	砂粒を若干含む	1/5
26-21	土師器	皿	(7.3)	(5.5)	1.3	外:回転ナデ、回転糸切痕 内:回転ナデ	内外:橙色 5YR6/8	石英・長石を少し含む	2/5
26-22	土師器	皿	(7.7)	(4.6)	1.15	外:回転ナデ、回転糸切痕 内:回転ナデ	内外:浅黄褐色 10YR8/4	0.5mm以下の石英・長石少 量含む	1/6
26-23	土師器	皿	(7.8)	(5.6)	1.15	外:回転ナデ、回転糸切痕 内:ナデ	内外:橙色 5YR6/6	0.5mm以下の長石少量・雲 母多く含む	1/3
26-24	土師器	皿	(8.4)	(6.8)	1.0	外:回転ナデ、回転糸切痕 内:回転ナデ	内外:浅黄褐色 7.5YR8/6	2mmの石英1点・1mm以下 の長石・雲母含む	1/3
26-25	土師器	皿	(7.2)	(5.8)	0.9	外:回転ナデ、回転糸切痕 内:回転ナデ	内外:浅黄褐色 10YR8/4	1mm以下の石英・長石少 量含む	1/3
26-26	土師器	皿	7.4	3.2	1.9	外:ナデ、指頭圧痕 内:ナデ、ナデ上げ	内外:浅黄褐色 10YR8/3	1mm以下の石英・長石含む	完形 手づくね
26-27	土師器	皿	(11.1)	-	(2.3)	外:指頭圧痕 内:ナデ	内外:灰白色 10YR8/2	0.5mm以下の石英・長石・ 雲母少量化	手づくね 肥前 九陶IV期 18c代
27-1	磁器	碗	-	-	(2.6)	外:染付 菊花文 内:施釉	素地:灰白色 N8/	密	底部~胴部 1/3
27-2	磁器	碗	-	(3.5)	(2.8)	外:染付 草文 内:施釉	素地:灰白色 N8/	密	底部~胴部 1/3
27-3	陶器	碗	(10.3)	-	(4.8)	内外:施釉	内外:明緑灰色 7.5CY7/1	密	口縁部~胴部 1/8以下 布志名
27-4	陶器	皿	8.2	4.5	2.6	外:施釉、回転糸切痕 内:施釉	外:暗赤褐色 5YR3/3 内:5YR5/8 内:暗赤褐色 5YR3/3	0.5mm以下の石英・長石含 む	完形 布志名(米待釉) 近世~近代

2区 1面より上層出土 金属製品

掲載番号	種類	器種	法量(cm)			重量(g)	備考
			口径	底径	器高		
28-1	金属製品		5.6		1.8	2.4	13.83

2区 1面より上層出土 石製品

掲載番号	種類	器種	法量(cm)			重量(g)	備考
			最大長	最大幅	厚さ		
29-1	石製品	金床石か	(15.6)		(10.8)	(9.5)	(2.285)

1区 1面より上層出土

掲載番号	種類	器種	法量(cm)			調整・手法の特徴	色調	胎土	残存	備考
			口径	底径	器高					
30-1	弥生土器	広口壺	(23.0)	-	(4.8)	外:ナデ、縱方向のハケメ、5条の凹線文 内:ナデ、横方向のハケメ後ナデ、1条の凹線文	外:にぶい黄褐色 10YR6/4 内:にぶい黄褐色 10YR5/3	1mm以下の石英・長石・雲 母を少量含む	口縁部~頸部 1/8以下	松本IV様式 弥生中期後葉
30-2	弥生土器	高杯	-	-	(3.6)	外:4条の沈線文 内:しづり目あり	内外:浅黄褐色 10YR8/4	2mm以下の石英・長石・砂 粒多く含む	1/8以下	弥生中期
30-3	土師器	甕	-	-	(3.0)	外:ナデ 内:ヘラケズリ	内外:浅黄褐色 10YR8/4	3mm以下の石英・長石少し 含む	頸部 1/8以下	単純口縁 古墳中期
30-4	土師器	高杯	-	(10.0)	(5.8)	外:ナデ 内:ナデ、絞り目	外:橙色 7.5YR6/6 内:黄褐色 10YR8/6	0.5mm以下の石英・長石・ 雲母含む	脚部 1/2	古墳
30-5	土師器	土製支脚	-	-	(4.6)	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ	橙色 7.5YR6/6	1mm以下の石英・長石・雲 母含む	1/8以下	古墳
30-6	須恵器	蓋	-	-	(1.5)	外:回転ナデ 内:回転ナデ	内外:灰白色 N7/	密	蓋部 1/6	古墳後期 出雲6b~6c (7c中葉~第3四半期)
30-7	須恵器	蓋	(9.8)	-	3.5	外:回転ナデ、ヘラケズリ 内:回転ナデ、静止ナデか	内外:黄灰色 2.5Y6/1	0.5mm以下の長石少量含む	1/4	古墳後期 出雲6期(7c代)
30-8	須恵器	甕	-	-	(4.3)	外:格子目タタキ 内:同心円タタキ	内外:黄灰色 2.5Y6/1	1mm以下の石英・長石少量 含む	1/8以下	古墳
30-9	須恵器	甕	-	-	(8.2)	外:平行タタキ後横方向のかき目 内:同心円タタキ	内外:黄灰色 2.5Y6/1	0.5mm以下の長石少量含む	1/8以下	古墳
30-10	土師器	足高高台付杯	-	-	(1.7)	外:ナデ	内外: 橙色 7.5YR7/6	石英含む	1/8以下	国府第7~8型式か (10c~11c前半)
30-11	土師器	足高高台付杯	-	-	(1.9)	外:ナデ	内外: 橙色 7.5YR7/6	2mm以下の石英・長石含む	1/8以下	国府第7~8型式 (10c~11c前半)
30-12	須恵器	蓋	-	(5.9)	(1.4)	内外:回転ナデ	内外: 青灰色 5B6/1	0.5mm以下の石英を含む	蓋部 1/3	国府第5型式 (8c末~9c前葉)
30-13	須恵器	壺	-	(8.6)	(3.2)	内外:回転ナデ	内外: 灰色 N6/	1mm以下の石英を含む	底部 1/2	国府第1型式(7c後葉)
30-14	瓦質土器	奈良火鉢	-	-	(6.4)	外:縱方向のハケメ、スタンプ 内:横・斜め方向のハケメ	内外: 灰色 2.5Y7/1	1~5mmの石英、 0.5~2mmの長石・雲母含む	口縁部 1/8	中世 (16cまでのところ)
30-15	土師器	坏か皿	-	4.5	(1.4)	外:ナデ、回転糸切痕 内:ナデ	内外: 橙色 7.5YR7/6	1mm以下の石英微量 0.5mm以下の長石・雲母含 む	底部 1/3	八峰編年 中世IV~V期か(14c~15c)
30-16	土師器	皿	-	(6.2)	(1.4)	外:ナデ 内:ナデ	内外: 橙色 5YR6/6	1mm以下の石英・長石若干 含む	底部 1/3	布志名
30-17	陶器	碗	(10.0)	-	(6.9)	内外:施釉	内外:明オリーブ灰色 5GY7/1	密	1/5	19c~
30-18	磁器	碗	9.6	3.9	5.1	外:染付 内:施釉	素地:灰白色 N8/	密	4/5	肥前 くらわんか手 九陶IV期 18c後半
30-19	磁器	広東碗	-	(5.6)	(3.4)	内外:染付	素地:灰白色 N8/	密	底部 1/3	肥前 九陶V期

1区 1面より上層出土 古鏡

掲載番号	種類	直径(mm)		孔径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
		直径	孔径				
31-1	寛永通宝	24.6		5.63	1.90	3.40	ス貝宝
31-2	寛永通宝	24.5		5.10	2.01	3.36	ス貝宝
31-3	寛永通宝	25.0		6.03	1.51	3.56	ス貝宝
31-4	寛永通宝	25.31		5.39	1.91	3.47	裏に「文」
31-5	寛永通宝	25.76		5.56	2.46	1.81	

# 写 真 図 版

図版1



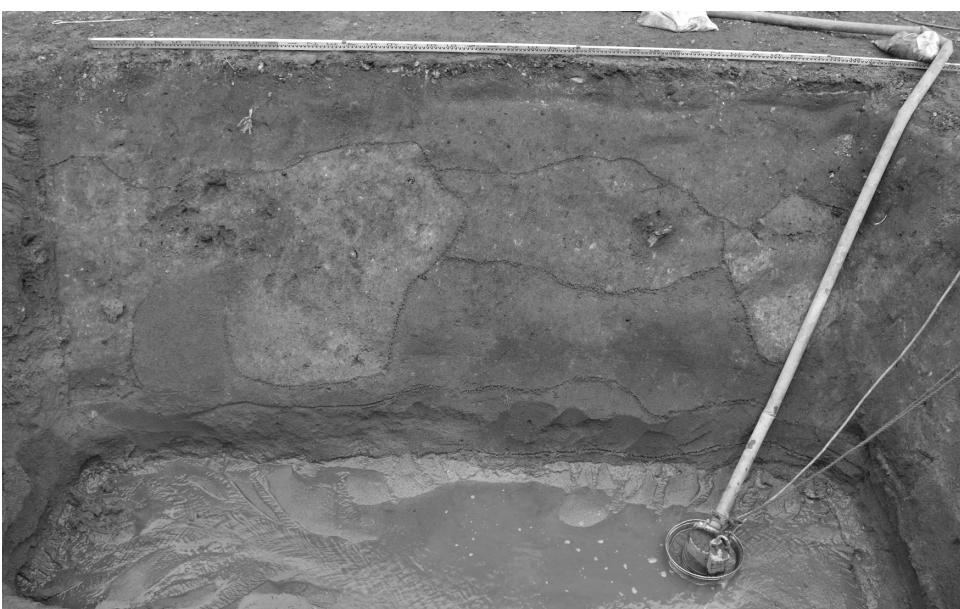
調査開始前状況 (1区東端から)



調査終了状況 (2区西端から)



2 区 4SP 土層堆積状況  
( 北壁 )



2 区 7SP 土層堆積状況  
( 北壁 )



1 区 8SP 土層堆積状況  
( 北壁 )

図版 3



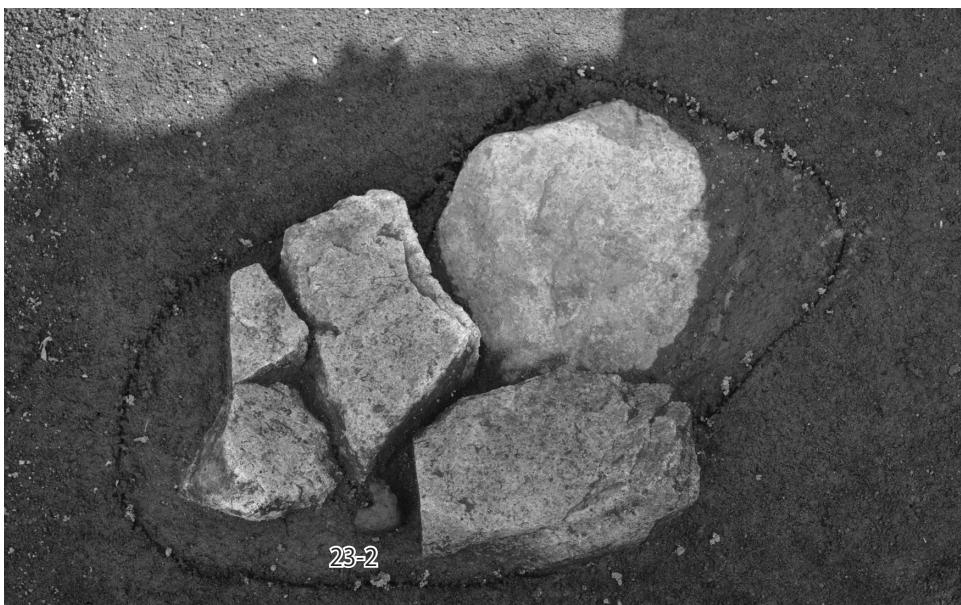
2 区 1SP 検出状況(南西から)



1 区 5SP 検出状況(南東から)



1区1面 SK05 完掘状況  
(北から)



1区1面 P9 検出状況  
(南から)



1区1面集石検出状況  
(北西から)

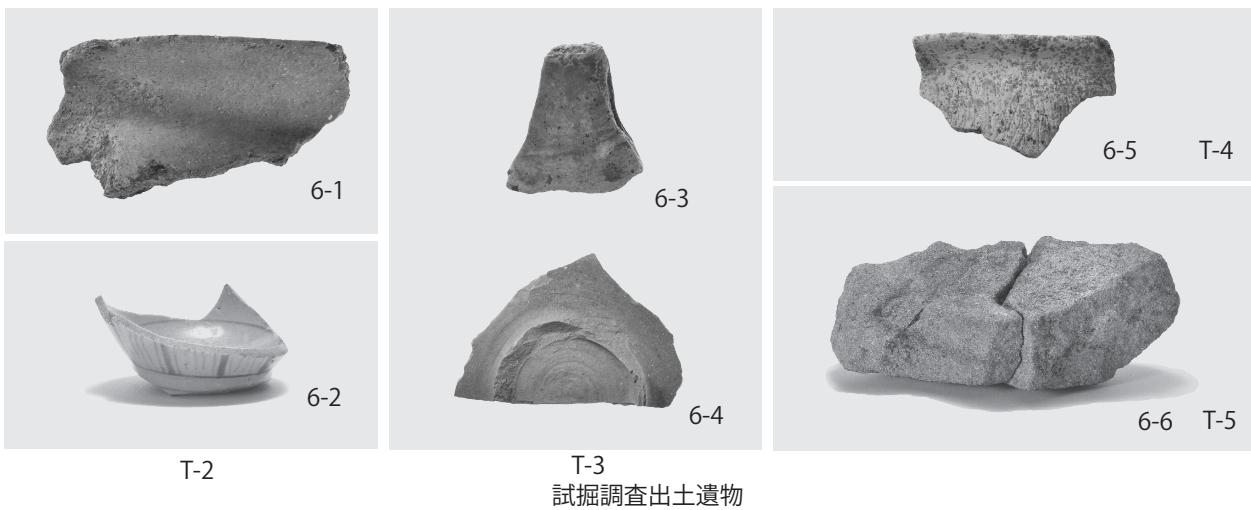
図版 5



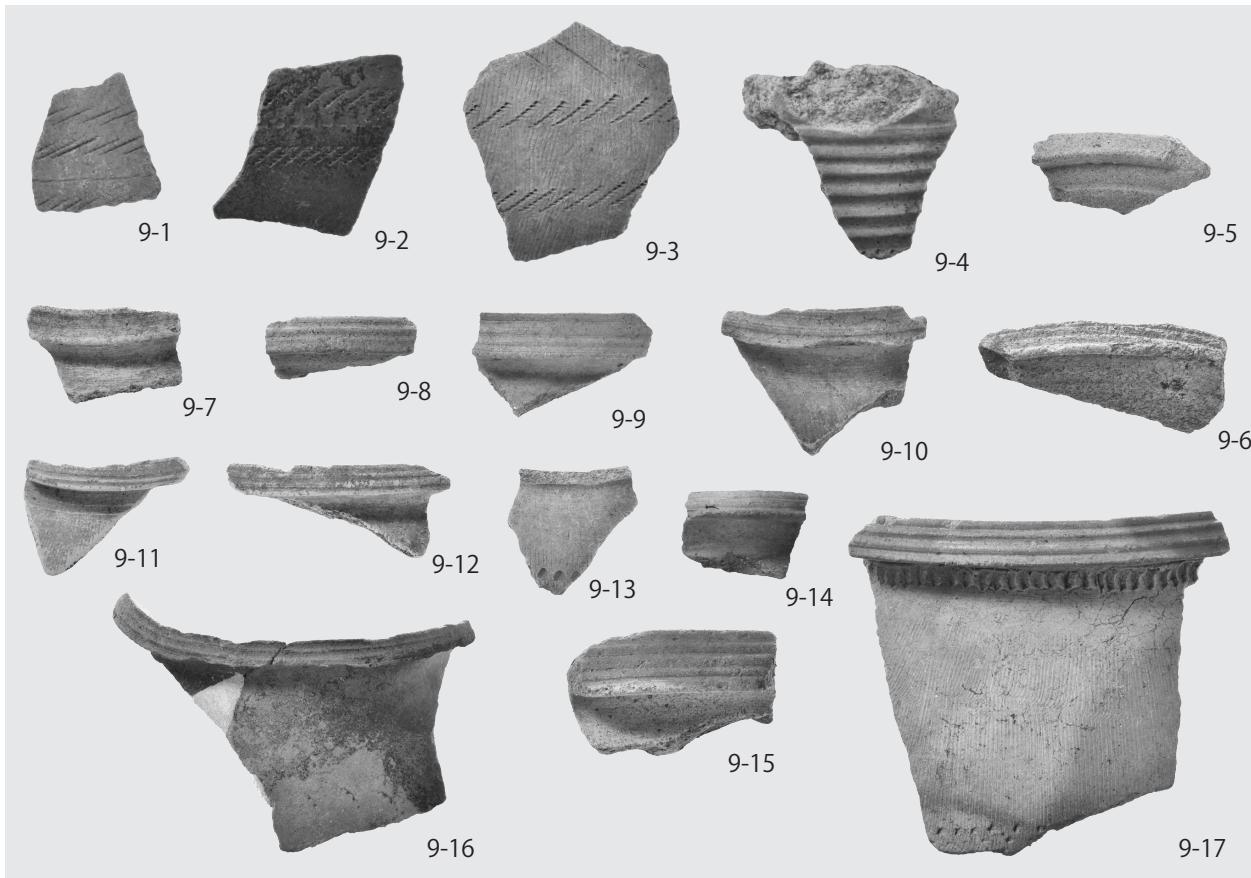
1 区 7SP1 面 完掘状況(南から)



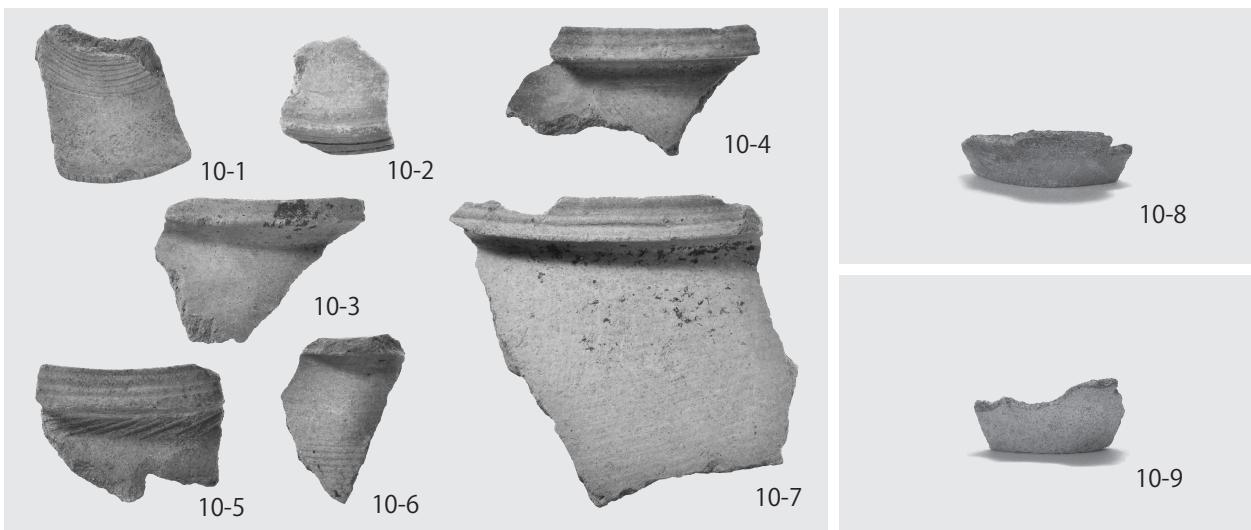
1 区 3SP1 面 完掘状況(東から)



試掘調査出土遺物

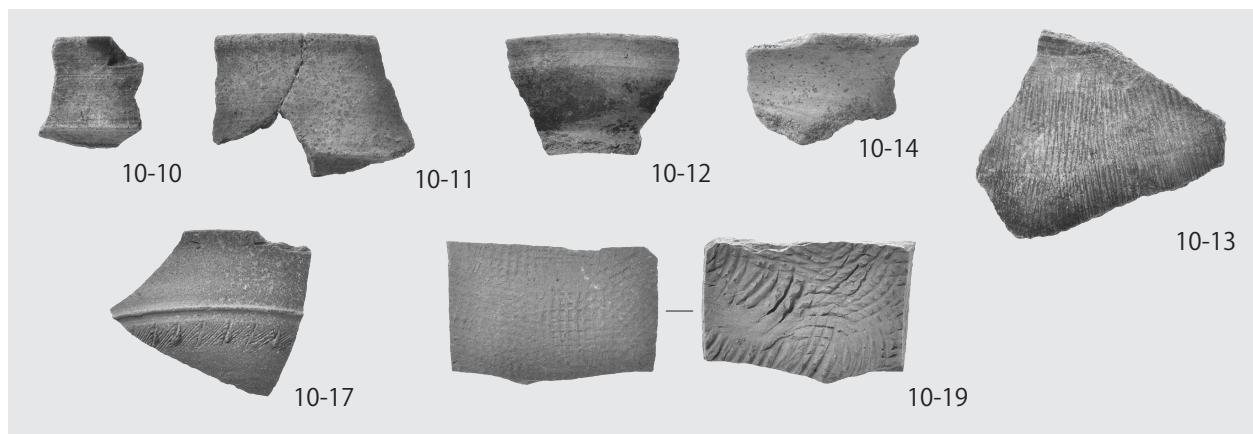


2 区遺物包含層出土遺物 (1)

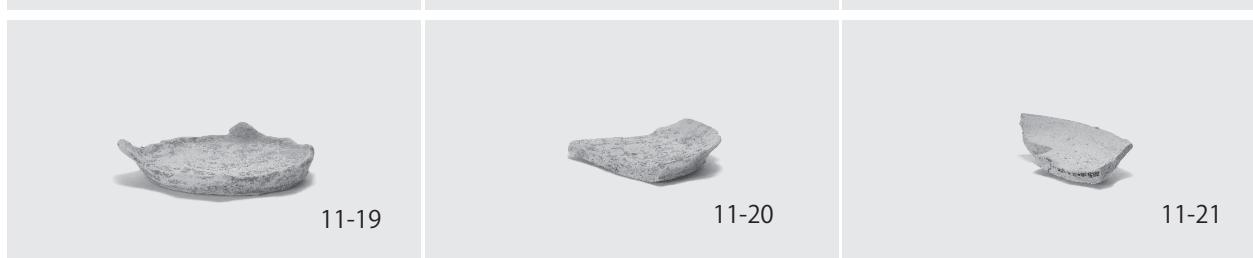
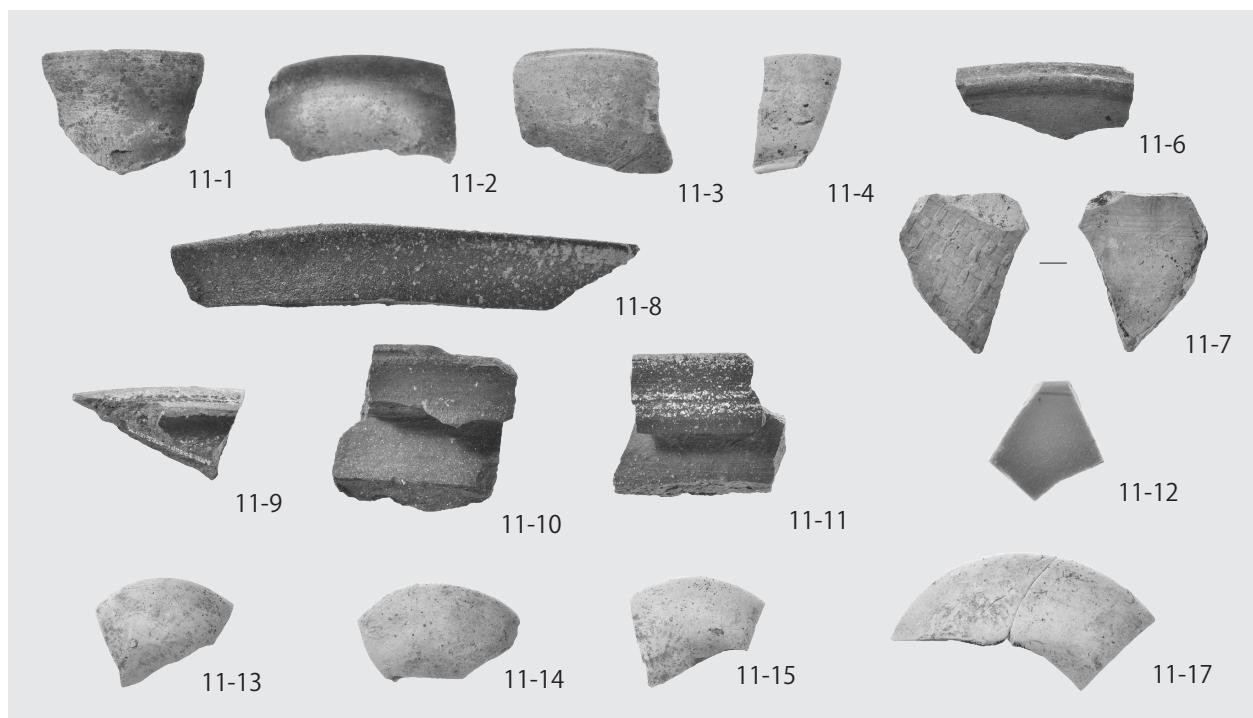


2 区遺物包含層出土遺物 (2)

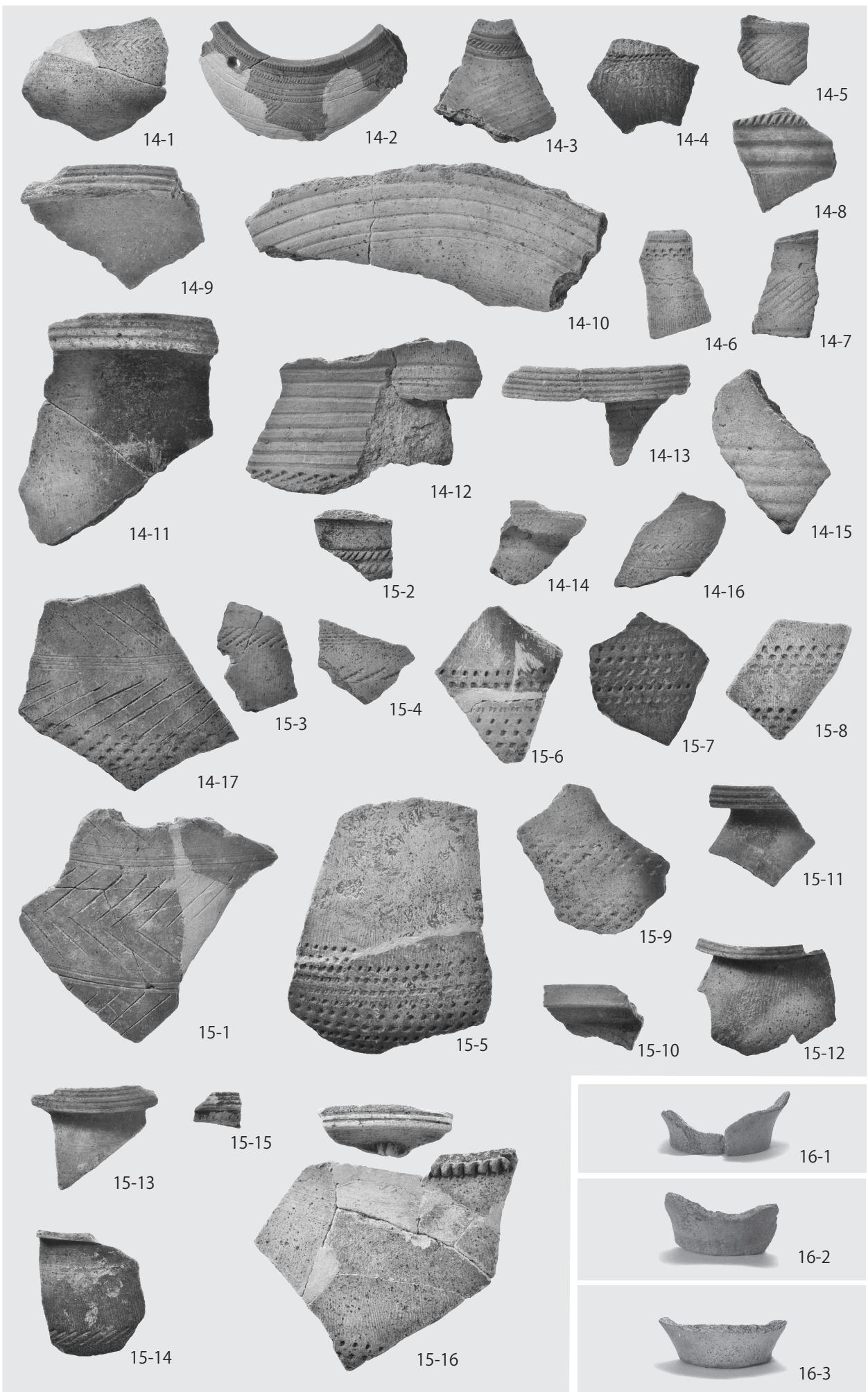
図版7



2区遺物包含層出土遺物(3)

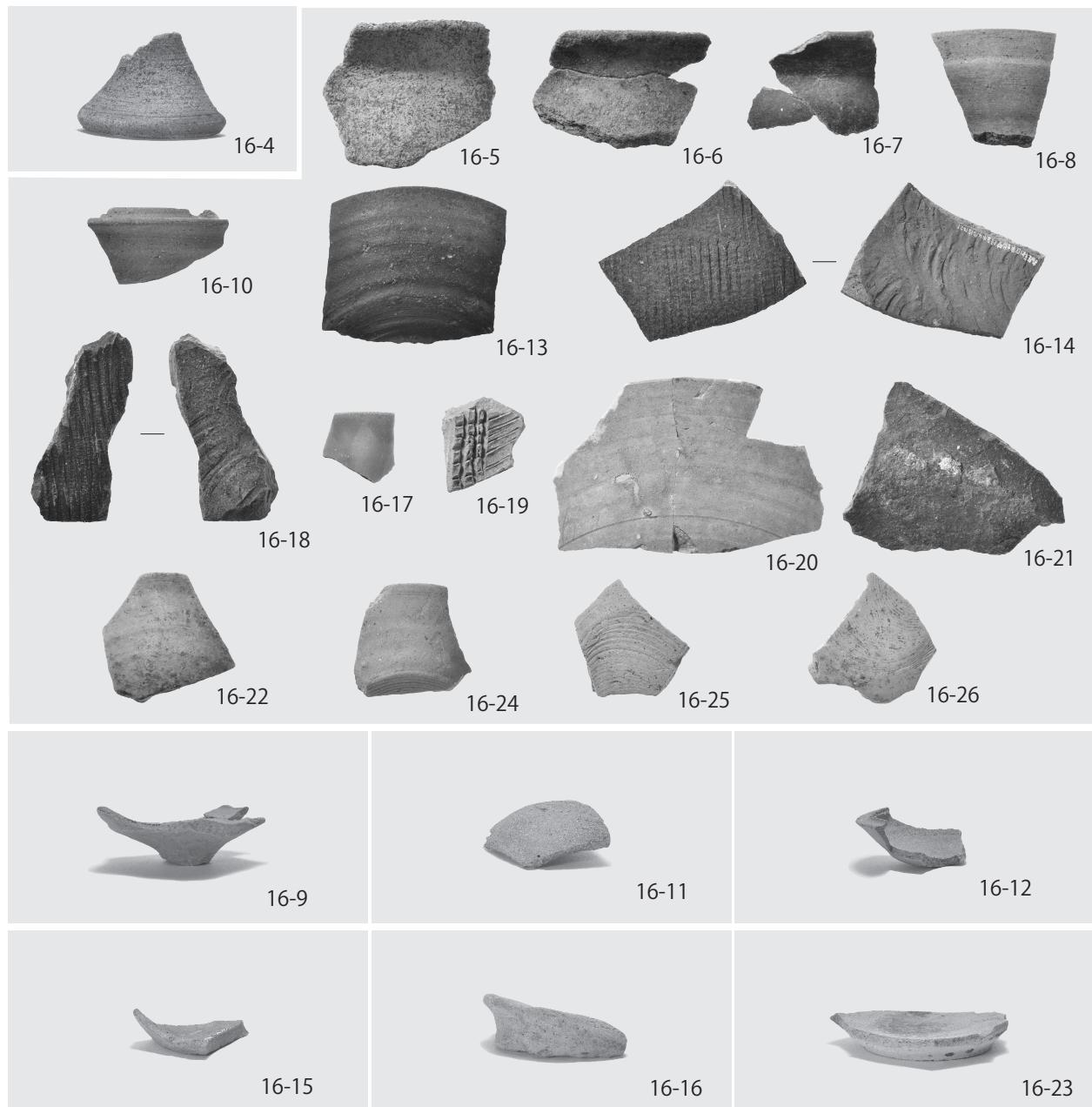


2区遺物包含層出土遺物(4)



1区遺物包含層出土遺物(1)

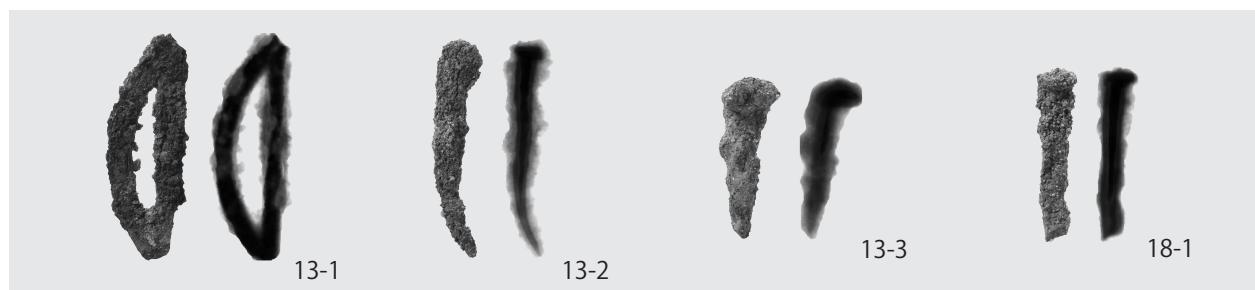
図版 9



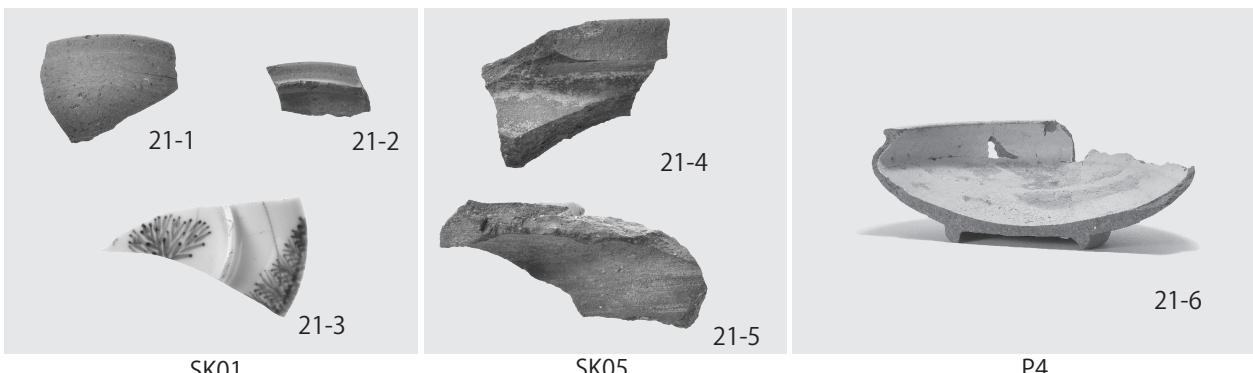
1区遺物包含層出土遺物(2)



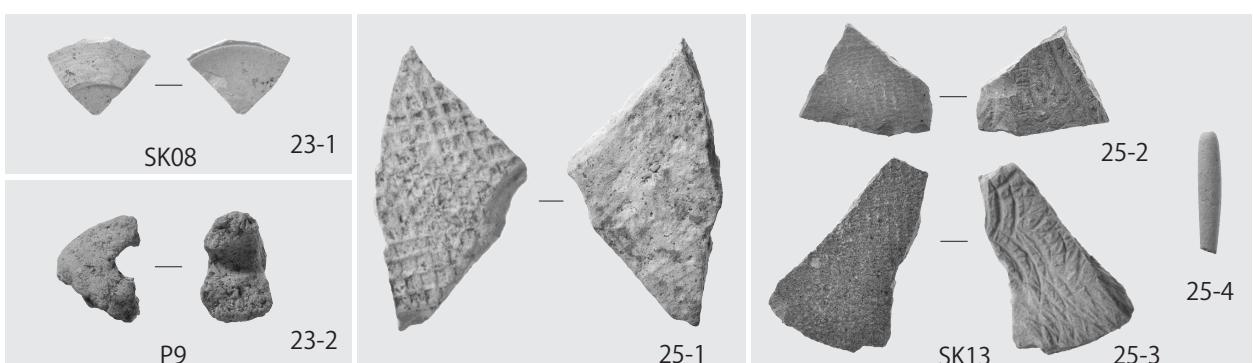
遺物包含層出土 朝鮮半島系土器



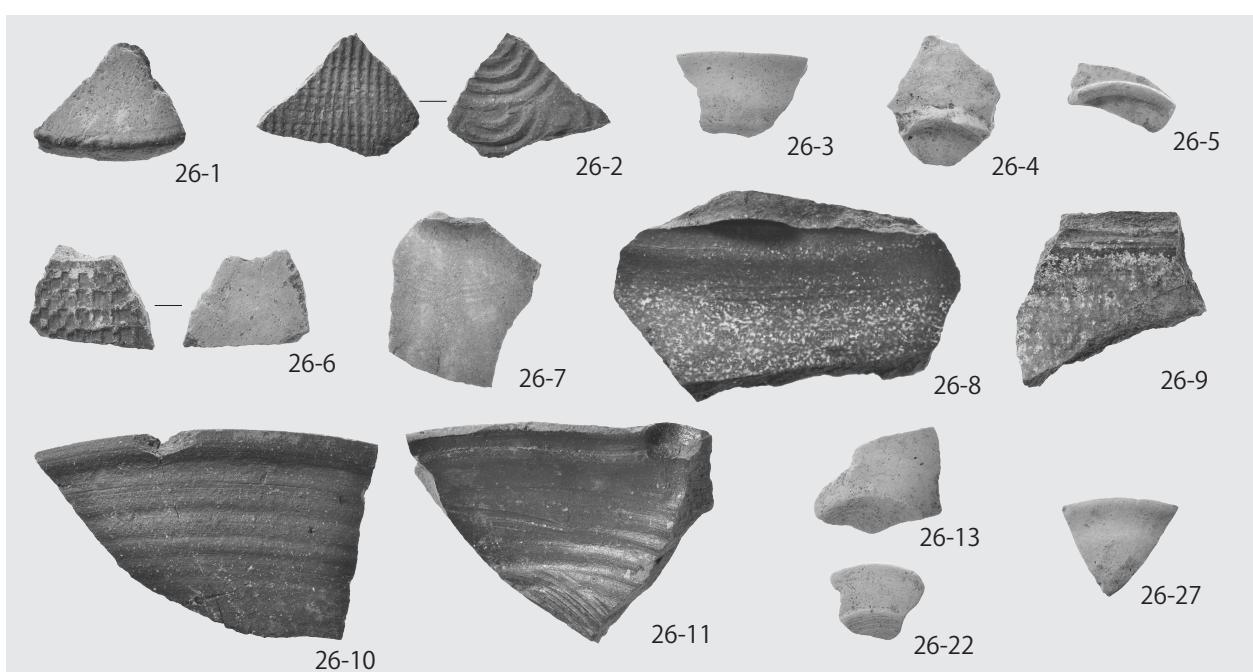
遺物包含層出土 金属製品(右側はX線写真)



1 区 1 面 7・8SP 遺構出土遺物



1 区 1 面 1・2SP 遺構出土遺物

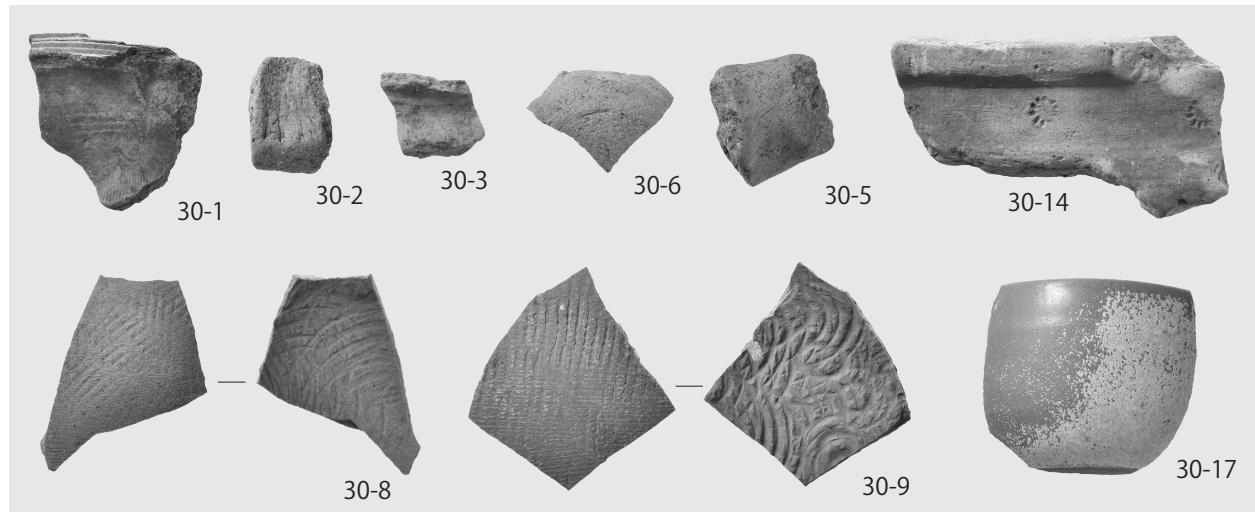


2 区 1 面より上層 出土遺物 (1)

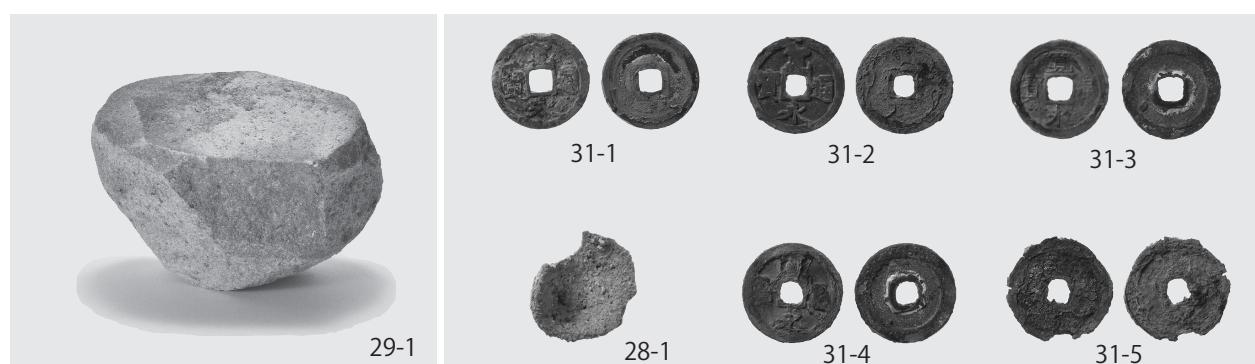
図版 11



2区1面より上層出土遺物(2)



1区1面より上層出土遺物



2区1面より上層出土 石製品

1区1面より上層出土 金属製品

# 報告書抄録

ふりがな	もりやしきいせき					
書名	森屋敷遺跡					
副書名	穴道複合施設進入路整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書					
巻次						
シリーズ名	松江市文化財調査報告書					
シリーズ	第176集					
編著者名	徳永桃代 渡辺正巳 徳永隆					
編集機関	松江市歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 〒690-8540 島根県松江市末次町 86 番地 まちづくり文化財課 TEL:0852-55-5284 公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 埋蔵文化財課 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀 1263-1 埋蔵文化財課 TEL:0852-85-9210					
発行年月	2016(平成28)年7月					
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	調査期間	調査面積	調査原因
もりやしきいせき 森屋敷遺跡	まつえし 松江市 宍道町宍道 885-3ほか	32201	H-332	35° 24' 30" 132° 54' 29"	20151021 ～ 20151124	302.4 m <sup>2</sup> 進入路 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
もりやしきいせき 森屋敷遺跡	集落遺跡	弥生時代 ～ 近世	土坑 溝	弥生土器、土師器 須恵器、陶器、磁器	弥生中期土器が多く出土。 朝鮮半島系土器が出土。	
要約	森屋敷遺跡は松江市宍道町宍道に存在する遺跡である。 弥生中期から近世にかけての遺跡で、特に弥生中期土器、中世の遺物が多く出土している。 周知の遺跡で、ここまで多くの弥生中期土器が出土したのは森屋敷遺跡が初めてである。 このほか、塩町式系土器、朝鮮半島系土器など他地域との交流を示す遺物が出土しており、森屋敷遺跡が古くから交通の要衝であったことを物語る貴重な成果を得た。					

松江市文化財調査報告書 第 176 集

宍道複合施設進入路整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

**森屋敷遺跡**

平成 28(2016) 年 7 月

編集・発行 島根県松江市教育委員会  
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

印 刷 千鳥印刷株式会社  
島根県松江市春日町 344-2

